

博 多 36

—第59次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集

1993

福岡市教育委員会

博多 36

—第59次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集



1993

福岡市教育委員会

序

JR博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には古代以来、大陸との貿易拠点として栄えた中世都市「博多」が包蔵されています。

近年、この地区は都市基盤整備が進み、高層ビル化が進んでいます。これらの再開発事業に伴い、100ヶ所に近い発掘調査を実施しています。

本書は、祇園地区の第59次調査の発掘調査報告書です。調査においては、古墳時代から中世の遺構を検出し、多種多様の遺物を得ることができました。特に古墳時代初期の住居址からは、鐵器製作に関連するまとまった遺物を得ることができました。

発掘調査から資料整理、本書発行までの費用負担をはじめ、多くのご協力を賜った四宮正信氏をはじめとする関係者各位に対し、心から感謝の意を表します。

最後に、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井 口 雄 哉

例　　言

1. 本書は、博多区祇園町187-226の四宮正信氏による駐車場ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年11月から翌年2月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡第59次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治、牛田裕二（故）、大塚恵治、石本恭二、岡嶽、清川朋和、石田晴美、泉明美、井手かすみ、尾崎君枝、甲斐田嘉子、坂井昭美、星子輝美、森優雅、山口朱美、山崎美枝子があたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、古代までの土器を平川敬治、中世の陶磁器・土師器を龜井明徳、堀尾京夫、その他の遺物を山口謙治、太田明子があたった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、牛田裕二が、遺物を平川敬治があたった。
5. 本書使用の図面の製図は、山口朱美があたった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本調査出土の古式土師器の胎土分析を奥田尚氏、赤色顔料分析を成瀬正和・本田光子氏、中世の陶器のガラス状付着物の分析を山崎一雄、肥原隆保氏にそれぞれ依頼し、分析結果については本書に収録した。なお、出土鉄器など鉄器生産に関連する遺物については大澤正巳氏に教示を得た。
8. 本書の執筆は、第1～4面の出土遺物については龜井明徳が、第4章については日次に明記し、他は山口謙治があたった。
9. 本調査地出土遺物および本調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1.はじめに.....	1
2.調査体制.....	1

第2章 遺跡の位置と環境

1.遺跡の位置と立地.....	3
2.博多遺跡群の調査.....	3

第3章 調査の記録

1.調査概要.....	7
2.層序について.....	9
3.第1～3面の調査.....	10
4.第4面の調査.....	37
5.第5面の調査.....	55
6.第6面の調査.....	61

第4章 自然科学的分析

1.博多第59次調査ピット0018出土の無軸壺に付着した緑色ガラスの化学分析山崎一雄・肥塚隆保.....	87
2.土器表面にみられる砂礫.....奥田尚.....	89
3.博多遺跡第59次調査出土の赤色顔料について.....本田光子・成瀬正和.....	97
第5章 結章.....	99

挿 図 目 次

Fig. 1	博多第59次調査地点地形実測図	4
Fig. 2	博多遺跡群調査地点位置図	(折り込み)
Fig. 3	第59次調査地点	5
Fig. 4	第1面遺構配置図	6
Fig. 5	第1面遺構分布状況（東から）	6
Fig. 6	第59次調査地点遺構配置図	7
Fig. 7	調査区東壁土層断面実測図	8
Fig. 8	第2面遺構分布状況（東から）	10
Fig. 9	第2面遺構配置図	10
Fig.10	第3a面遺構配置図	11
Fig.11	第3面遺構分布状況（西から）	11
Fig.12	第3b面遺構配置図	12
Fig.13	第6号井戸出土遺物実測図	13
Fig.14	第2・6号井戸出土遺物	14
Fig.15	第6号井戸出土遺物	15
Fig.16	第5号井戸（SE-05）実測図	16
Fig.17	第2・5・25号井戸および第9・10・12・13・15・20号土壤出土遺物実測図	17
Fig.18	第11号土壤および第6号井戸出土遺物実測図	18
Fig.19	第11・12号土壤出土遺物	19
Fig.20	第16・18号土壤（SK-16・18）実測図	21
Fig.21	第9・10・13-15号土壤出土遺物	22
Fig.22	第14号土壤出土遺物実測図	23
Fig.23	第16号土壤出土土器実測図	24
Fig.24	第16号土壤出土遺物	25
Fig.25	第21号土壤出土遺物実測図	26
Fig.26	第20・21号土壤出土遺物	27
Fig.27	第17号井戸（SE-17）実測図	28
Fig.28	第25号井戸（SE-25）実測図	29
Fig.29	第28号土壤（SK-28）実測図	30
Fig.30	第17号井戸上・下層出土遺物実測図(1)	31
Fig.31	第17号井戸井筒内出土遺物(1)	32
Fig.32	第17号井戸井筒内出土遺物(2)	33

Fig.33	第17号井戸上・下層出土遺物実測図(2).....	33
Fig.34	第26号井戸・第27号土壙出土遺物実測図.....	34
Fig.35	第25・26号井戸出土遺物.....	35
Fig.36	第27・28号土壙出土遺物.....	36
Fig.37	第4面遺構配置図.....	37
Fig.38	第30号土壙(SK-30)実測図.....	37
Fig.39	第34号土壙(SK-34)実測図.....	38
Fig.40	第34・37号土壙充掘状況.....	38
Fig.41	第35号土壙(SK-35)実測図.....	39
Fig.42	第37号土壙(SK-37)実測図.....	39
Fig.43	第39号土壙(SK-39)実測図.....	40
Fig.44	第28・30・31号土壙出土遺物実測図.....	41
Fig.45	第30・31号上層出土遺物.....	42
Fig.46	第34号土壙上層出土遺物.....	43
Fig.47	第34号土壙上・下層出土遺物実測図.....	44
Fig.48	第34号土壙下層・第35~37層土壙出土遺物.....	46
Fig.49	第36・60号井戸および第37号土壙出土上遺物実測図.....	48
Fig.50	第39号土壙上・下層出土遺物.....	49
Fig.51	第39号土壙上・下層出土遺物実測図.....	50
Fig.52	第60号井戸出土遺物.....	51
Fig.53	各柱穴出土遺物(1).....	52
Fig.54	各柱穴出土遺物(2).....	53
Fig.55	第1~4面出土遺物.....	54
Fig.56	出土和同關係.....	55
Fig.57	第5面出土上器実測図(1).....	56
Fig.58	第5面出土上器実測図(2).....	57
Fig.59	第5面出土土器実測図(3).....	58
Fig.60	第5面出土遺物実測図.....	59
Fig.61	第6面遺構配置図.....	60
Fig.62	第6面遺構検出状況.....	60
Fig.63	第41号竪穴式住居址(SC-41)実測図.....	61
Fig.64	第41号竪穴式住居址出土上器実測図(1).....	62
Fig.65	第41号竪穴式住居址遺物出土状態(1).....	63
Fig.66	第41号竪穴式住居址遺物出土状態(2).....	64
Fig.67	第41号竪穴式住居址出土變形土器.....	65

Fig.68	第41号竪穴式住居址出土土器実測図(2).....	66
Fig.69	第41号竪穴式住居址出土土器	67
Fig.70	第41号竪穴式住居址出土鉄製品	67
Fig.71	第41号竪穴式住居址出土鉄製品実測図	68
Fig.72	第41号竪穴式住居址出土遺物	69
Fig.73	第41号竪穴式住居址出土遺物実測図	70
Fig.74	第43号竪穴式住居址 (SC-43) 実測図	71
Fig.75	第43号竪穴式住居址出土土器実測図	72
Fig.76	第44号竪穴式住居址出土上土器実測図	72
Fig.77	第44号竪穴式住居址 (SC-44) 炎測図	73
Fig.78	第44号竪穴式住居址石器実測図	73
Fig.79	第45号竪穴式住居址出土土器実測図	73
Fig.80	第48号竪穴式住居址 (SC-48) 実測図	74
Fig.81	第48号竪穴式住居址出土土器実測図(1).....	75
Fig.82	第48号竪穴式住居址出土土器実測図(2).....	76
Fig.83	第48号竪穴式住居址出土二重口縁壺	77
Fig.84	第48号竪穴式住居址出土遺物実測図	78
Fig.85	第48号竪穴式住居址出土遺物	79
Fig.86	第49号竪穴式住居址 (SC-49) 実測図	80
Fig.87	第49号竪穴式住居址出土土器実測図	81
Fig.88	第57号竪穴式住居址出土上土器実測図	81
Fig.89	第54号竪穴式住居址出土土器実測図	82
Fig.90	第58号竪穴式住居址出土土器実測図	82
Fig.91	第58号竪穴式住居址出土土器	83
Fig.92	第6面出土土器実測図(1).....	84
Fig.93	第6面出土土器実測図(2).....	85
Fig.94	出土金属器実測図	86
Fig.95	第6面出土他時代遺物実測図	86
Fig.96	0018号穴出土遺物実測図	87
Fig.97	第5面出土磨石実測図	88

第1章 序 説

1. はじめに

博多区祇園町の大博通りに隣接する一画に、四宮正信氏によって駐車場ビル建設が計画された。この地周辺は博多遺跡群のなかで、もっとも高い博多砂丘上に位置している。ビル建設の計画者である四宮正信氏の依頼により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下、埋文課とする)は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、計画地の北側は搅乱を受けて破壊されているが、南側では、地表下1.4m前後の標高4.3m前後で遺構面を検出した。また、遺構面では多量の古代から中世にかけての陶磁器類が出土した。試掘調査結果および周辺地の発掘調査の成果から、埋文課は、計画地北側の地下埋設施設がある部分を除き、計画地南側については占墳時代から中世の遺構が遺存しているとし、計画変更し保存するか、全面的な発掘調査が必要であると決定した。以上の決定を受け、埋文課と四宮正信氏は協議を重ね、現状保存は困難であり、記録保存のための調査を実施することとなった。

以上の調査決定を受け、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなどについての協議に入り、それぞれ契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所用プレハブの設置、表土層のすき取り後、弥生時代から中世の各時代各時期の様相把握を目的とし、約4ヶ月にわたって実施した。

遺跡調査番号	8957	遺跡略号	HKT-59	分布地図番号	049-A-1
調査地地籍	博多区祇園町187-226			調査実施面積	276m ² (7面)
調査期間	1989年11月7日～1990年2月24日				

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分な体制を組むことはできませんでしたが、四宮正信氏をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行いたしました。

整理報告作業は調査担当者である山口の調査業務繁多により、1989年度の調査にもかかわらず、本年度で実施いたしました。四宮正信氏をはじめとする関係各位にこの場をお借りし、お詫び申し上げるとともに、ご協力に謝意を表します。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係

教育長 佐藤善郎(前) 井口雄哉 前文化部長 川崎賢治

文化財部長 花田兎一 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前) 折尾学
第二係長 柳沢一男(前) 塩屋勝利
調査担当 山口謙治
試掘調査担当 横山邦繼(主任文化財主事) 小畠弘巳 常松幹雄
事務担当 松延好文(前) 中山昭則 吉田麻由美
調査指導員 亀井明徳(専修大学文学部) 大澤正巳(新日鐵)
調査・整理補助員 故牛田裕二 平川敬治 大丸陽子 堀苑京美 山口朱美
調査・整理協力者 大塚恵治(現八女市教育委員会) 石本恭二 囲崇 小川勝彦 清川朋和
後藤和武 柳澤竜広 泉明美 森優雅(以上、福岡大学) 赤星輝 有
吉千栄子 石田晴美 池田礼子 井手かすみ 大久保沙波 太田明子
尾崎君枝 甲斐田嘉子 神谷玲子 吉良山益美 叢井昭美 佐々木美子
品川伊都子 中原尚美 西野敦子 龍美須賀子 平野徳子 星子輝美
松下節子 村田洋子 矢川みどり 山崎美枝子

なお、整理作業のなかで、古式土師器の胎土分析を奥田尚氏、陶器付着物の分析を山崎一雄
(名古屋大学名誉教授)・肥塚隆保(奈良国立文化財研究所)両氏、赤色顔料の分析を成瀬正和
(宮内庁正倉院事務所)・本川光子両氏にそれぞれ依頼し、分析結果については本書に収録し
た。また、鉄器生産関係の遺物については大澤正巳氏に分析を依頼し、本書に収録の予定であ
ったが、山口の意懶から遺物の図化が遅れたため分析できなかった。同遺物については、大澤
正巳氏より教示を得たことを明示するとともに、本報告後、同氏に分析を依頼し、分析結果に
については、次年度以降の博多の報告書に収録する。

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1・2)

福岡市の博多湾岸には0.3~2km前後の幅をもつ砂丘が形成されており、砂丘は東から多々良川・御笠川・那珂川・櫛井川・対見川など北流して海に注ぐ河川によって切られている。博多湾岸の砂丘上には、南北幅が広いほど古い時期からの大遺跡が所在している。博多遺跡群は、博多湾岸中央部の御笠川・那珂川に挟まれた砂丘上に位置している。博多遺跡群は、大きく海側の「息の浜」と内陸側の「博多浜」両砂丘上とその間に所在している。現在、この地域は都市基盤整備が進み、商業地域として市街化し、標高4~5m前後の平坦な地形をなしている。

本調査地は、JR博多駅から海に向かって一直線に伸びている大博通りの祇園六差路に第65次調査（本年度報告書発行、福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集）を挟み接している。博多遺跡群のなかでみていくと南部にあたり、「博多浜_砂丘の頂部から南斜面に位置し、現在標高は5.7m前後である。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から17cm、東から15.3cmの位置にあたる。

2. 博多遺跡群の調査 (Fig. 2)

博多遺跡群の調査は、都市高速道（地下鉄）建設に伴う調査を端緒として、今まで90地点の発掘調査と20ヶ所前後の立会い調査が実施されている。現段階の調査実施面積は4ha強にもなっている。しかし、博多遺跡群は80ha以上の広がりをもつと考えられ、現段階では本遺跡群の約5%前後の調査が実施されているに過ぎないといえよう。

本調査地が所在する「博多浜」砂丘は、聖福寺を中心とした地域から祇園町周辺（万行寺を含む）にかけて地形が高い。「博多浜」砂丘は、聖福寺を中心とした高まりと祇園町から万行寺にかけて広がる高まりに細分でき、本書では後者を「祇園」砂丘と仮称し、述べていくことにする。博多遺跡群のなかで、「祇園」砂丘地区については都市高速道に伴う調査以来、比較的調査が実施されている。ここでは、「祇園」砂丘のこれまでの成果を、古墳時代までに視点をあて概観することにする。

「祇園」砂丘で、最古段の遺物としては、第17次調査（以下、第17次とする）で夜白式土器があるが、今まで弥生時代中期初頭までの遺構は検出されていない。中期初頭までの遺物は第17・50次で出土している。中期前半から同後半にかけて「祇園」砂丘上に甕棺墓と住居址が営まれている。甕棺墓は、都市高速道店屋町祇園1区B・C区で20基、同祇園出入口で6基、第22次で6基、第24次で1基、第36次で5基と第32次で数基検出されている。第22次を除き、他は同一の甕棺墓群で、博多遺跡群に2ヶ所の墓域があると考えられる。甕棺墓はいずれも中期

前半から中期後半のものである。同時期の生活遺構としては、第30次で竪穴式住居址が1基検出されているのみである。同時期の遺物は、第45・50次など「紙園」砂丘上の各調査で出土している。後期前半から中頃の遺構は現在まで未検出である。ふたたび遺構がみられるようになるのは後期後半からである。都市高速道店屋町紙園I区のO区で後半から終末にかけての土壌が、第17・20次でも同時期の竪穴式住居址3基と土塙5基が検出されている。博多遺跡群での人の痕跡は弥生時代初頭に遡るが、生活の痕跡は中期前半以降、「紙園」砂丘上で墓が先行する形でみられるようになる。中期および中期以前および後期前半から中頃の生活遺構は存在の可能性があり、検出が待たれる。

弥生時代終末から古墳時代に入ると、「紙園」「博多浜」両砂丘上の各調査区で生活遺構・墓地が検出されている。「紙園」砂丘では都市高速道店屋町紙園I区のO・Q区で土壌、紙園出入口で竪穴式住居址がまず最初に検出された。第17・20・27・33・36・45・50・59・65次で竪穴式住居址、第33・36・45・50次で土壌、第22・24・27・59次で溝が検出されている。第17・20・45・50次検出の生活遺構のなかにやや先行するものがあるが、他は布留式土器期の占段階のものである。この時期の上器は第25・37・51次などでも出土しており、「紙園」丘陵の高まり上に

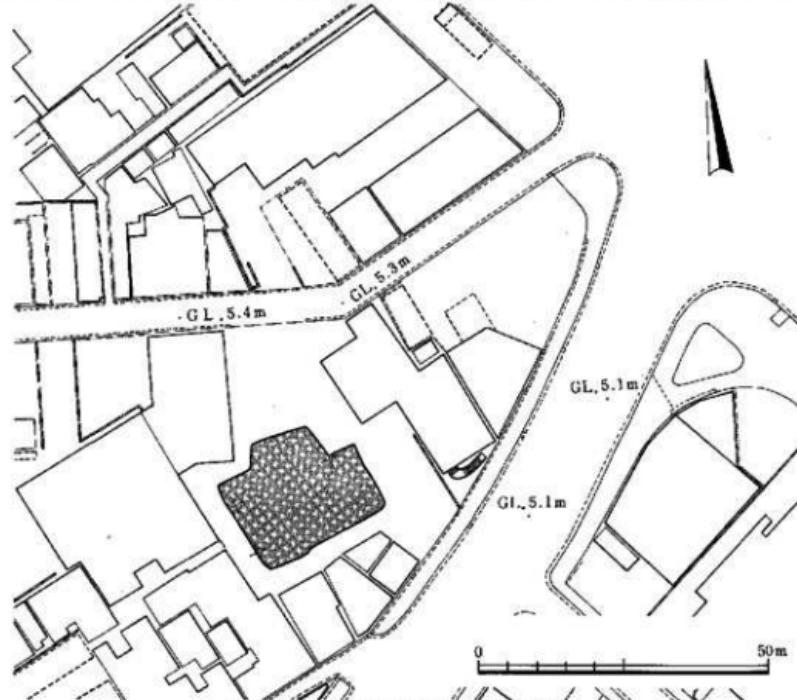


Fig. 1 博多第59次調査地点地形実測図

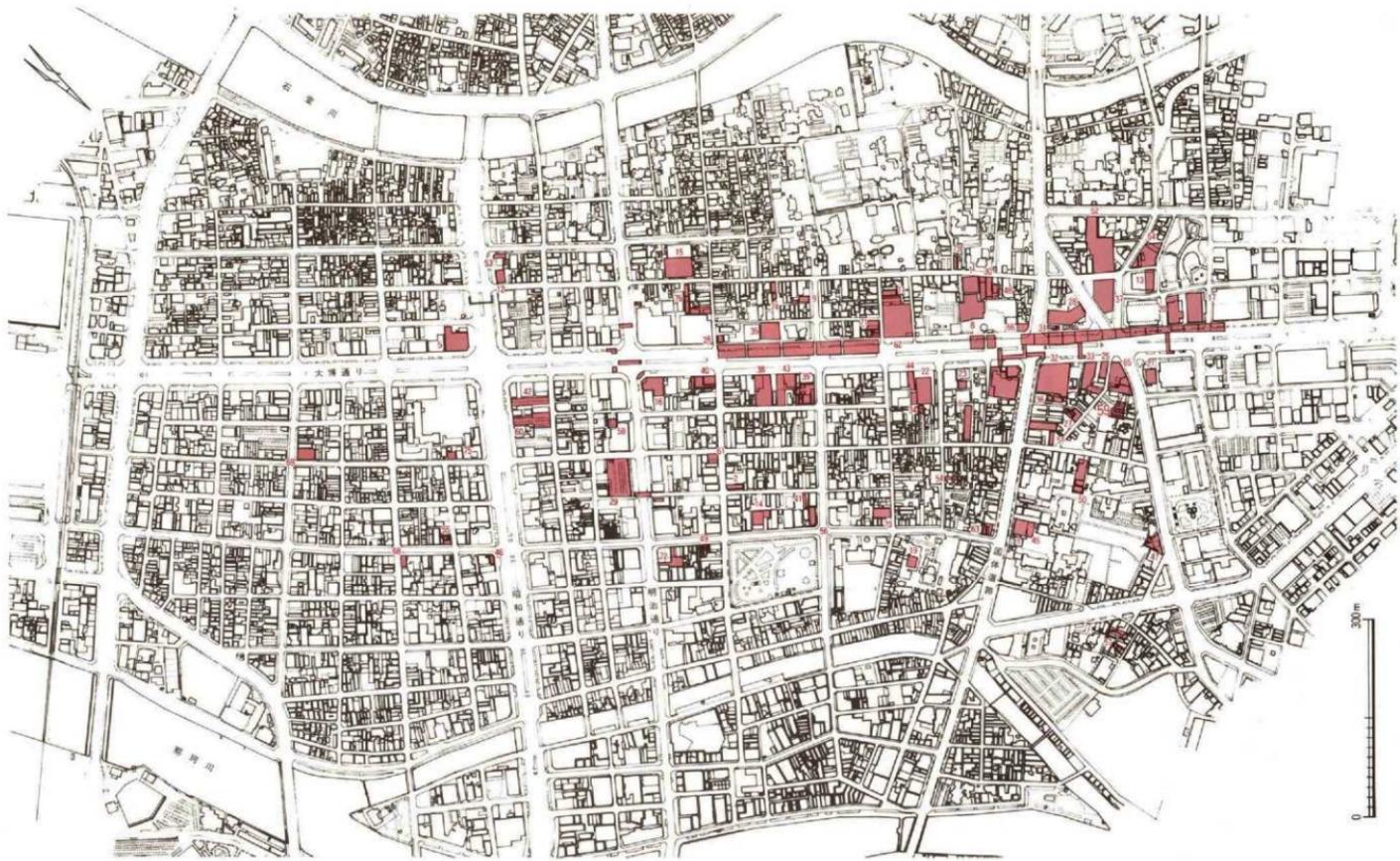


Fig. 2 博多遺跡群調査地点位置図

生活遺構は分布している。この時期の遺物をみていくと、畿内系・山陰系や大陸系の土器がかなりの量入っている。第17・20・50・59次で碧玉の剣片・玉未製品が、第59次で水晶製品核が出土しており、玉製作が行なわれていたことが推定できる。第59・65次では、鉄素材・鉄片・塊形津・鉄津・轆・鍛造鉄片など鐵器生産に関する遺物が出土しており、鐵器製作も行なわれている。鐵製品は第50次で鐵鎌、第59次で鐵鎌？などが出土し、第17・45・59次で銅鎌、第50次で筒形銅製品が出土している。第45次で婧壺、第59次などで浮きが出土しているほか、土鍤が出土している調査地もある。布留式土器期から5世紀の遺構としては、第17・20・27・36・37次で方形周溝墓・粘土塚などの埋葬主体部、第28・31次で前方後円墳が検出されている。また、第62次でも方形周溝墓が検出されている。これらの墓地は「博多浜」「祇園」の両砂丘の中央部に位置し、第62次の方形周溝墓、第28・31次の前方後円墳は規模から主長墓系譜に入るものといえよう。古墳時代前半期の検出遺構および出土遺物・立地条件から、この時期に大陸・畿内・山陰との交流で大きく成長し、福岡平野の大拠点となったといえよう。

5世紀後半から6世紀後半までの約1世紀間は、点的に須恵器が出土しているのみで博多遺跡群のなかの空白期である。6世紀末になると都市高速道店屋町紙園I区のN区で竪穴式住居址、O・Q区で土壙・紙園出入口で7世紀の木棺墓が検出されている。第17・20・50・59次で竪穴式住居址（第33・45次で7世紀後半のものあり）、第17・20・33・45次で土壙や溝が、第28次で小石室が検出されている。6世紀末以降になると「祇園」「博多浜」砂丘の頂部のみではなく、谷部にも竪穴式住居址が検出されており、古墳時代前半よりも集落は拡大化している。7世紀になると、各調査区で柱痕跡をもつ柱穴が検出できるようになり、掘立柱建物群の所在が想定できるが、後世の遺構の切り合いにより、今まで建物として確認できたものはない。遺物の出土量は6～7世紀初頭より増加していることから、集落はさらに拡大化していると考えられることから、今後の調査に期待したい。



Fig. 3 第59次調査地点

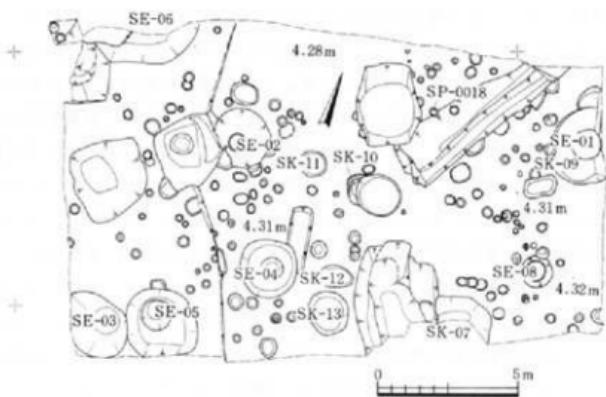


Fig. 4 第1面遺構配置図



Fig. 5 第1面遺構分布状況（東から）

第3章 調査の記録

1. 調査概要

駐車場ビル建設予定地は、大博通りの祇園六差路の西70mに位置し、北側は幅6mの道路に面し、東側は第65次に接し、西側・南側は民有地に接している。予定地の北側15×18mには地下埋設の施設があり、試掘調査の結果、遺構面はすべて破壊されていたため、調査対象から除去した。また、予定地南東部には調査事務所用プレハブを設置したため、10×15mの引きを取り、南西部および南側は民有地と接し、民有地と約1mの段差があり、ブロック塀があるため、それぞれ4mの引きを取り、東側12m、西側17m、東西23mの台形の調査区を設定した。この調査区終了後、遺構が北側に延びているため、埋設施設の際まで拡張して調査を行なった。

調査対象地は、駐車場として利用されていたためにアスファルト舗装が行なわれていた。調査は、表土層すき取り(1m前後)後に現代から近世にかけての擾乱・整地層が残存していたので、これらの層を重機で除去することから始めた。近世までの整地層を除去すると、焼土を多く含む茶褐色砂質土を基盤とする遺構が検出できたので、これを第1面として調査を実施した(標高4.28~4.35m)。以下、4.1m前後を第2面、標高4~3.75mを第3面とし、上部を3a面、下部を3b面、標高3.9~3.65mを第4面、標高3.8~3.4mを第5面(厚さ20cm前後の包含層)、標高3.35~3.1mの褐色砂層の下部を第6面として調査を実施した。

第1~3面で
は、近世から現
代の井戸と中世
前半期の井戸・
土壙・柱穴など
多数の遺構を検
出し、中世の輸
入陶磁器・土師
器など多種多様
な遺物が出土し
た。第4面では、
古代から中世に
かけての土壙・
井戸・柱穴など
の遺構を検出し、

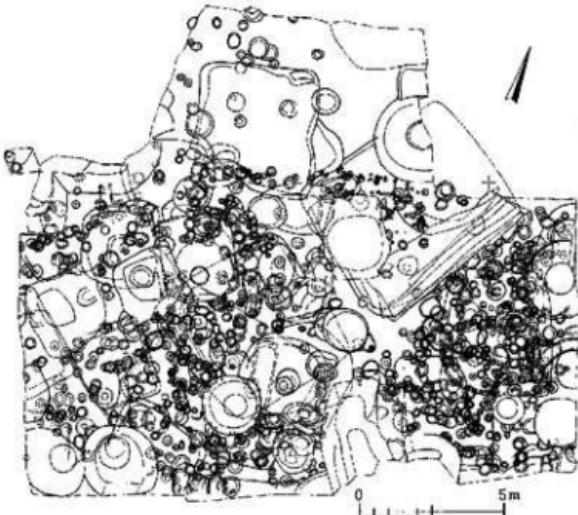


Fig. 6 第59次調査地点遺構配置図

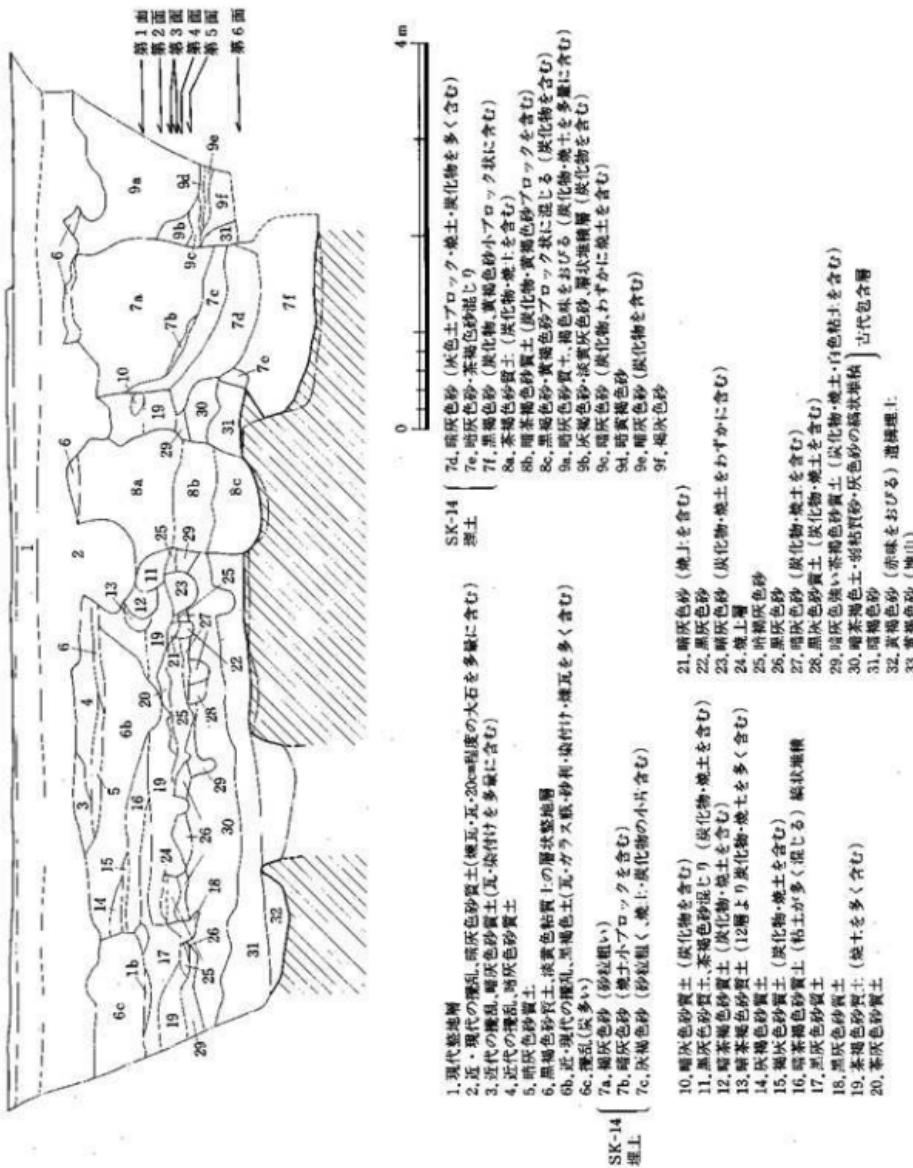


Fig. 7 河内区東壁土層断面実測図

瓦器・土師器などの遺物が出土した。第5面では、遺構は検出できなかったが、奈良時代の須恵器・土師器と金属器が出土した。第6面では、古墳時代の初期と6世紀の竪穴式住居址を検出し、古式土師器・須恵器・輪・鉄器・鐵滓・石製品などの遺物が出土した。検出遺構については、井戸をSE、土壙をSK、溝状遺構をSD、竪穴式住居址をSCと遺構記号を使用し、検出順に通し番号を付した(例 SE-01……SK-07……SC-41……SD-59)。なお、柱穴はSPの遺構記号を使用し、検出順に4桁の通し番号を付した。なお、本書中では、遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物については、金属器は895700001から、土器は895700501から通し番号を付し登録番号としているが、本書では遺構および各検出面ごとに通し番号を付し、金属器はK、石製品はSt、鐵滓はSrを番号の頭に付した。

2. 層序について

本調査地は10cm前後のアスファルト舗装がされており、その下に60cm前後の現代の整地層、第3～17層は近世の整地層で、ここまで重機を使用し除去した。

第19層は調査区全域に分布しており、ほぼ水平の層をなしている。この層の上面を第1面とした。第20～24層は調査区東壁でみると、ほとんど遺構であり面的な広がりをもたない。調査においては切り合い関係を重視し、複雑に遺構が切り合うため上から順に第2～3b面に便宜的に分け、調査を実施した。

第25～27・29層は黒灰から暗褐色の砂層で、炭化部・焼土を含み、同一層群をなし、この上面を第4面とし調査を実施した。この第4面をなす層群は、わずかに南へ傾斜している。

第30層は調査区全域に分布し、第4面と同様南へ傾斜している。この層は30～70cmの厚さをもち、検出面から20cm前後まで奈良時代の遺物を包含し、下部は無遺物で、断面でみると縦縞がみられる。

第31層は第30層と整合堆積をなし、やや南へ傾斜し、まれに柱穴、皿状の落ち込みがあるが、第30層が詰まっており、遺構と断定できなかった。第31層の下部で、竪穴式住居址・柱穴が検出できたので第6面とした。第31層の上部は、古墳時代後期(6C末～7C前半)の遺物を包含している。古式土師器の竪穴式住居址は、南へわずかに傾斜をもつ黄褐色砂層の上面で検出された。第33層は30cm以下になっていくと白味が強くなる。調査終了後、下部遺構の有無を確認するため標高1.5m前後まで掘削したが、遺構も遺物も検出できなかった。

3. 第1～3面の調査 (Fig. 4・5・8～12)

第1面は、近世までの整地層を除去した面（標高4.35～4.28m）である。この面の西側5m幅は、表土を取り時に第2面の深さまで除去している。まず、擾乱およびSE-01・02・06・08（井戸）、SK-09（土壇）の現代遺構を除去することから始め、遺構確認作業を行なった。検出遺構のうち、SE-03、SK-07は近世のもので、中世のものは井戸2基（SE-04・05）、土壇3基（SK-11～13）と116基の柱穴である。

第2面は、第1面で平面プランが不明瞭な遺構を検出するため20cm前後下げた標高4.1m



Fig. 8 第2面遺構分布状況（東から）

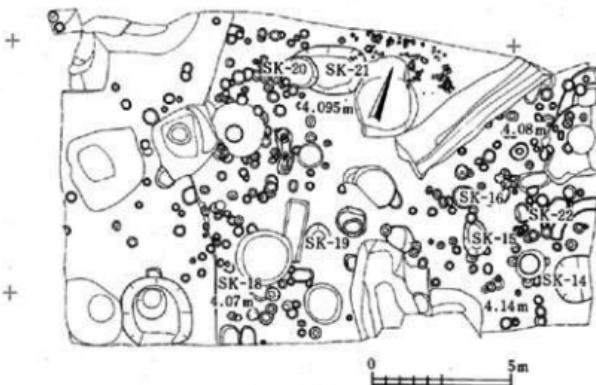


Fig. 9 第2面遺構配置図

前後の面である。

第2面検出の遺構は、土壙10基

(SK-14～16

・18～24)と柱

穴200個(SP-

0117～0316)で

ある。

第3a面は、第

2面で平面プラ

ンが不明瞭な遺

構を検出するた

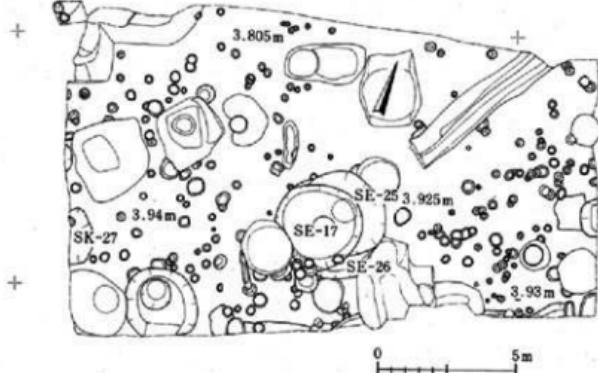


Fig.10 第3a面遺構配置図

めに20cm前後下げた標高3.9m前後の面である。第3a面検出遺構は、井戸3基(SE-17・25・26)、土壙1基(SK-27)と柱穴146個(SP-0317～0325・0328～0464)である。

第3b面は、第3a面を10cm前後下げた標高3.8m前後の面で、土壙1基(SK-28)と柱穴77個(SP-0466～0542)を検出した。

第1面検出面と第3b面検出面は55cm前後のレベル差があるが、検出遺構の時期差はほとんど



Fig.11 第3面遺構分布状況（西から）

なく、造構切り合いで連続しており、明晰に生活面と考えられる土層面もとらえることができなかった。第1～3面検出造構は同一層群中のもので、中世前半期のものといえよう。

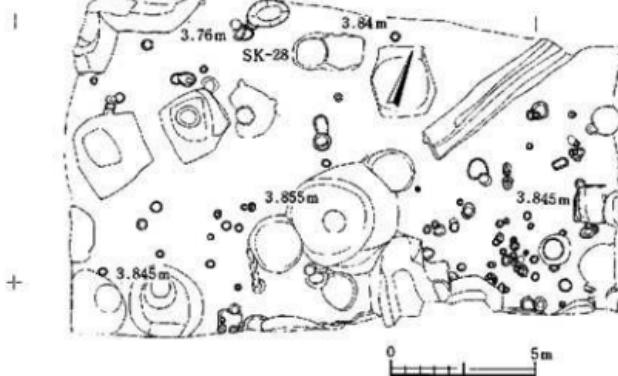


Fig.12 第3 b面遺構配置図

1) 近世および現代遺構と出土遺物

SE-02 (Fig.14・17)

竜泉窯青磁小皿を検出。オリーブ色ガラス質釉を厚く施す。他に12世紀後半期の竜泉窯青磁共伴。

SE-06 (Fig.13～15)

1の上部器は、高台付き小皿で、糸切り底。2も糸切り底壊。3～8は青磁。4はオリーブ色透明釉がかかり、外底は幕筒底状。6は初期竜泉窯製品で、外面はヘラ刻模状文、内面は片切彫り花文のち点綴文を頃現にいれ、光沢のある緑色透明釉をかける。9・10は白磁。11は無釉陶器壺で、黄褐色を呈し、糸切り底。12は茶色釉耳付き壺、14も無釉で、赤褐色の精製粘質土であり、底部は早い回転であげ底状に削る。15・16は瓦器碗で、16の口縁内側には沈線が巡り、磨きは比較的丁寧である。18～21は竜泉窯青磁。22は石鍋。

SK-09 (Fig.21)

1・2とも白磁碗で、2は周囲を打ち欠き、外底は平滑となり転用碗であろうか。

2) 第1面検出造構

SE-05 (Fig.16)

本井戸は調査区の南西部に位置し、SE-03に切られている。径2.5m、深さ3mの平面形円形で、深鉢状の掘り方をもち、やや北寄りに60cm前後の木枠組みの井筒をもっている。井筒底面の標高は50cmである。

SK-10

本土塙は調査区の中央に位置し、径1.5mの土壙に切られている。1m前後の隅丸方形を呈する土壙で40cm前後の遺存である。

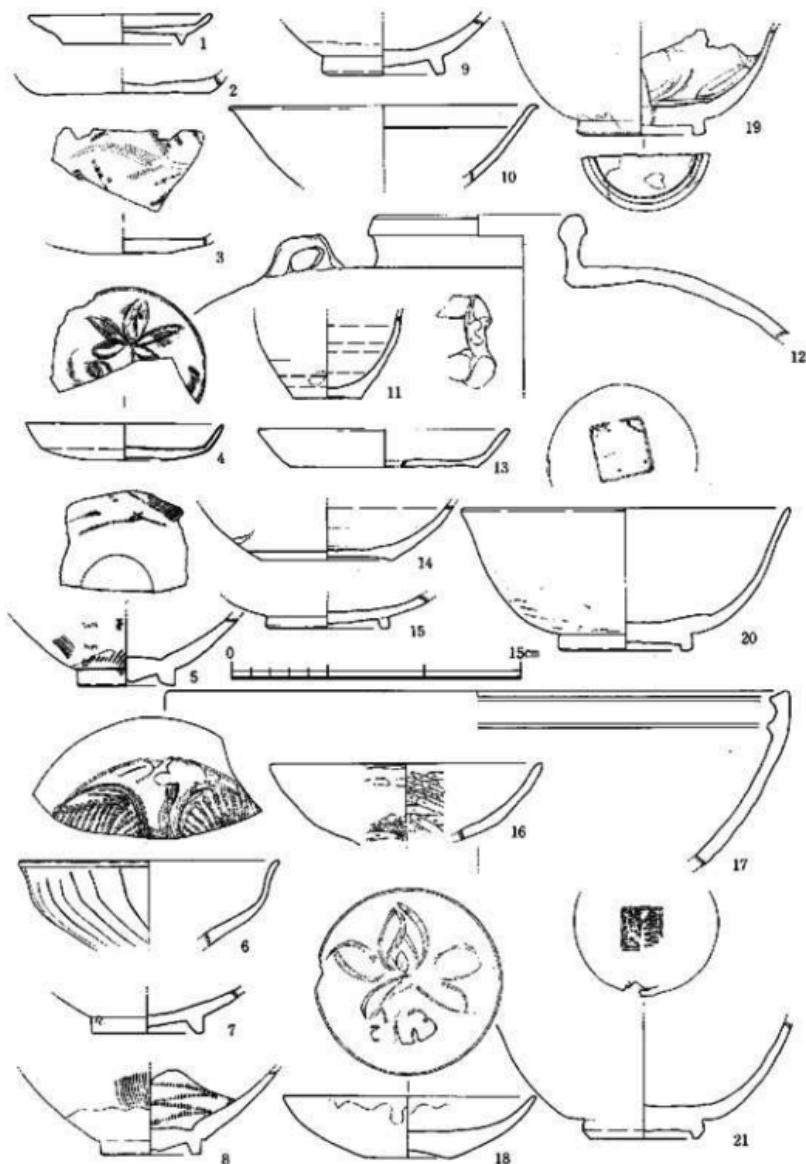


Fig.13 第6号井戸出土遺物実測図

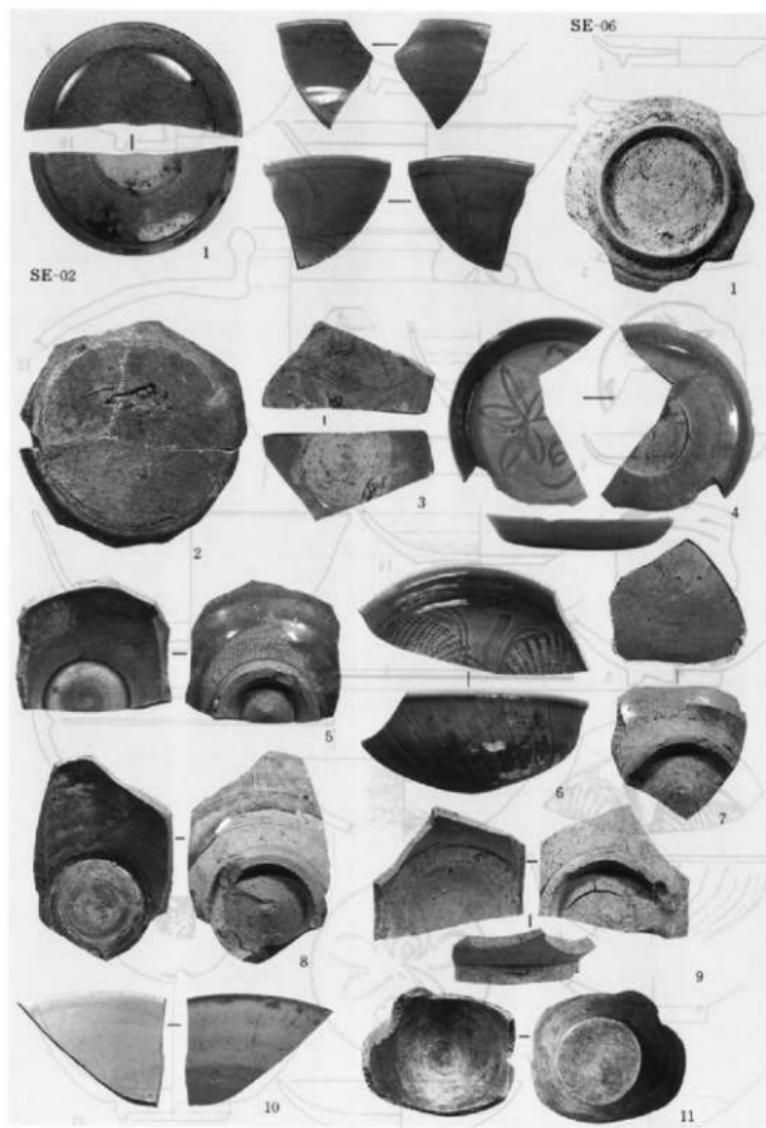


Fig.14 第2・6号井戸出土遺物

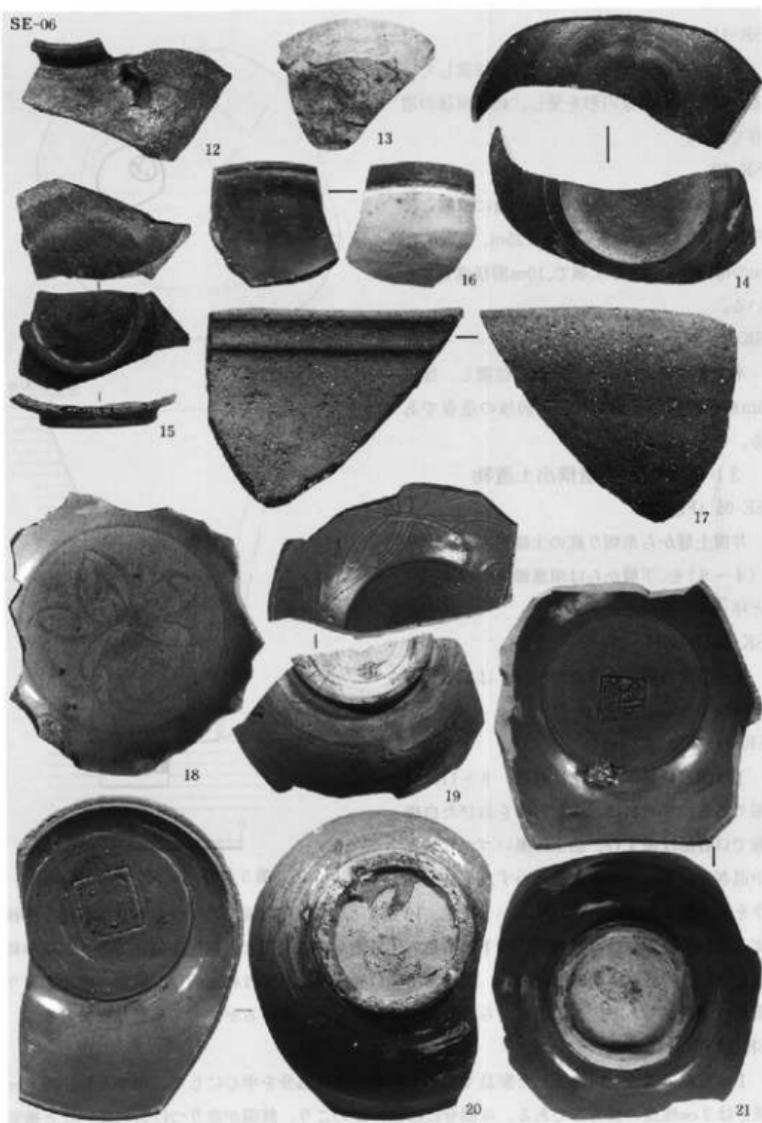


Fig.15 第6号井戸出土遺物

SK-11

本土塙も調査区のほぼ中央部に位置している。径95cmの不整円形を呈し、45cm前後の遺存である。

SK-12

本土塙は調査区中央からやや南に位置し、SK-13の北にあたる。長軸1.25m、短軸0.75mの楕円形を呈する土塙で、10cm前後の遺存している。

SK-13

本土塙は調査区中央の南端に位置し、径1.5m前後の円形を呈し、40cm前後の遺存である。

3) 第1面検出遺構出土遺物

SE-05 (Fig.17)

井筒上層から糸切り底の上師器皿および环(4~6)を、下層からは須恵器質の捏鉢(7)と环(8)を検出。

SK-10 (Fig.17・21)

1~2は白磁、3は瓦器碗、4は黄釉鉢形口縁盤である。

SK-11 (Fig.18・19)

1は須恵器質、2~7は白磁、8~11は青磁である。2の皿は、少し青みをおびた白磁釉で口唇部は黒ずむ、胎土に黒いゴマ状斑点が混ざる。8~9の青磁皿はいずれも補とヘラを施文具としているが、9はヘラを主、10では「之」字形点綴文の後からヘラで乱雑な曲線文を配している。11は黒釉碗、釉下に茶色の化粧塗がある。13は、無釉陶器鉢であり、暗赤褐色を呈し、内底には磨滅痕はない。14は常滑窯口縁部で、口径は45cm前後、胴部の破片もあり、条痕の叩打文である。この遺構から少量の土師器を検出しているがすべて糸切り底である。

SK-12 (Fig.17・19)

1は石鍋の破片を再加工した製品である。石鍋の縦耳部分を中心にして、把手とし、幅6cm、長さは7cm程度の長方形である。耳部分には鉄片がのこり、鐵環が取りつけられていたと推定

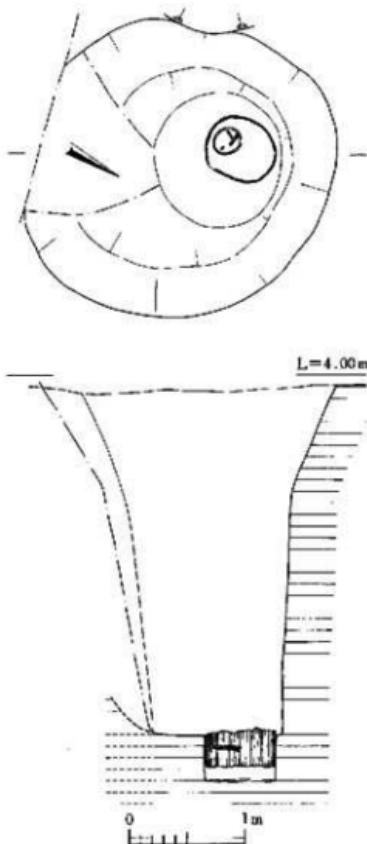


Fig.16 第5号井戸 (SE-05) 実測図
ラを施文具としているが、9はヘラを主、10では「之」字形点綴文の後からヘラで乱雑な曲線文を配している。11は黒釉碗、釉下に茶色の化粧塗がある。13は、無釉陶器鉢であり、暗赤褐色を呈し、内底には磨滅痕はない。14は常滑窯口縁部で、口径は45cm前後、胴部の破片もあり、条痕の叩打文である。この遺構から少量の土師器を検出しているがすべて糸切り底である。

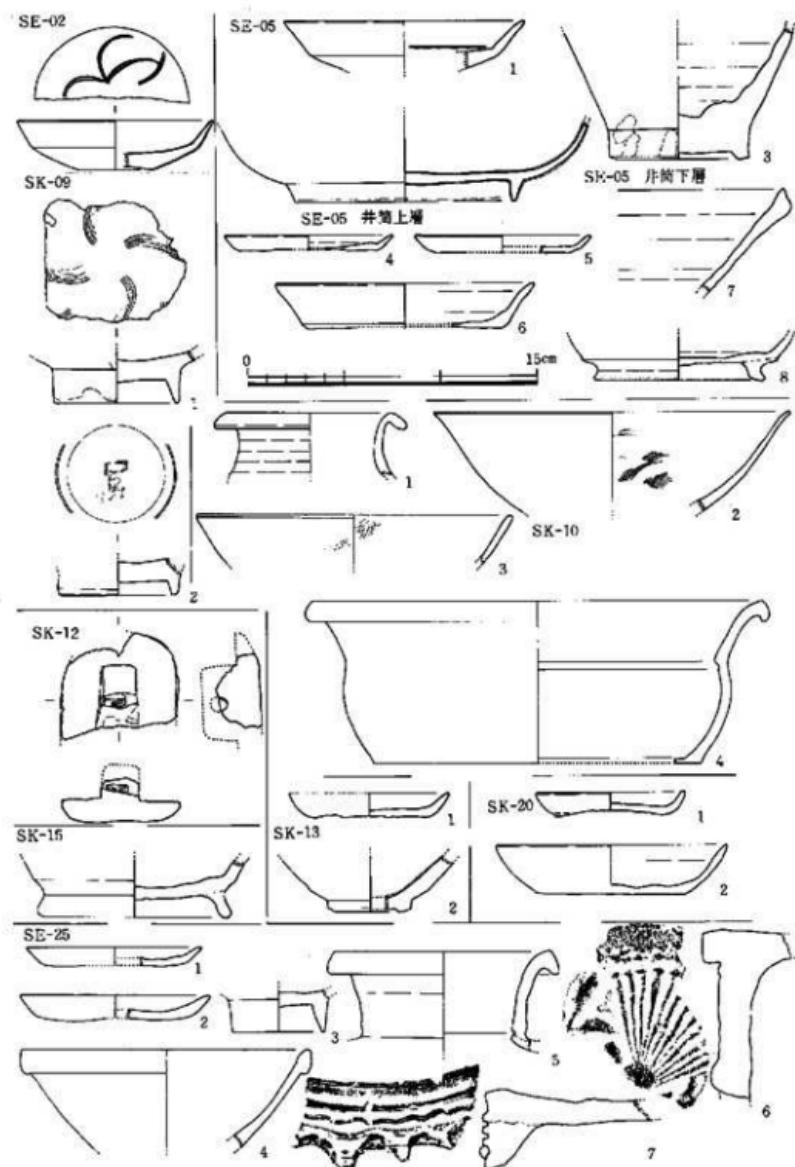


Fig.17 第2・5・25号井戸および第9・10・12・13・15・20号土壟出土遺物実測図

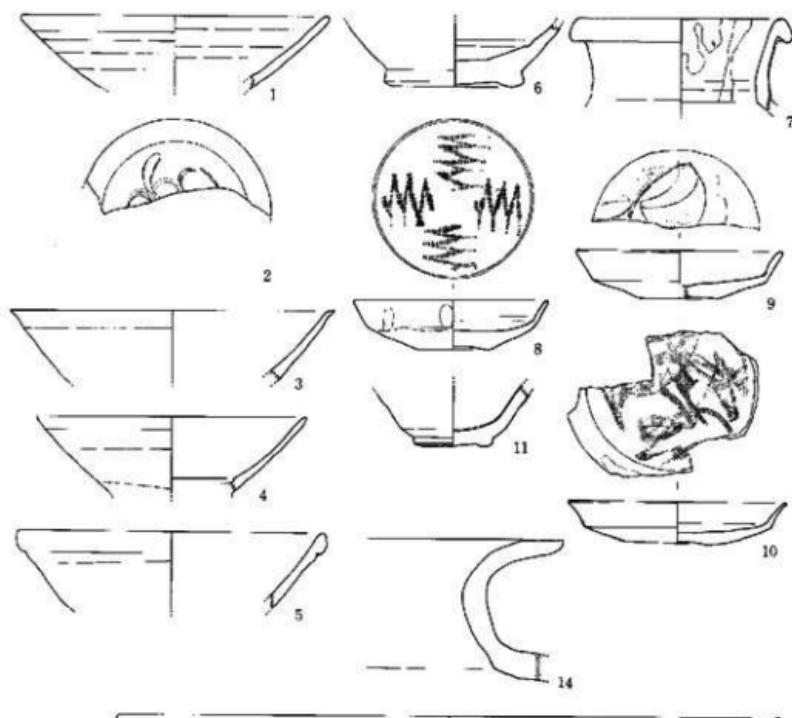


Fig.18 第11号土墳および第6号井戸出土遺物実測図

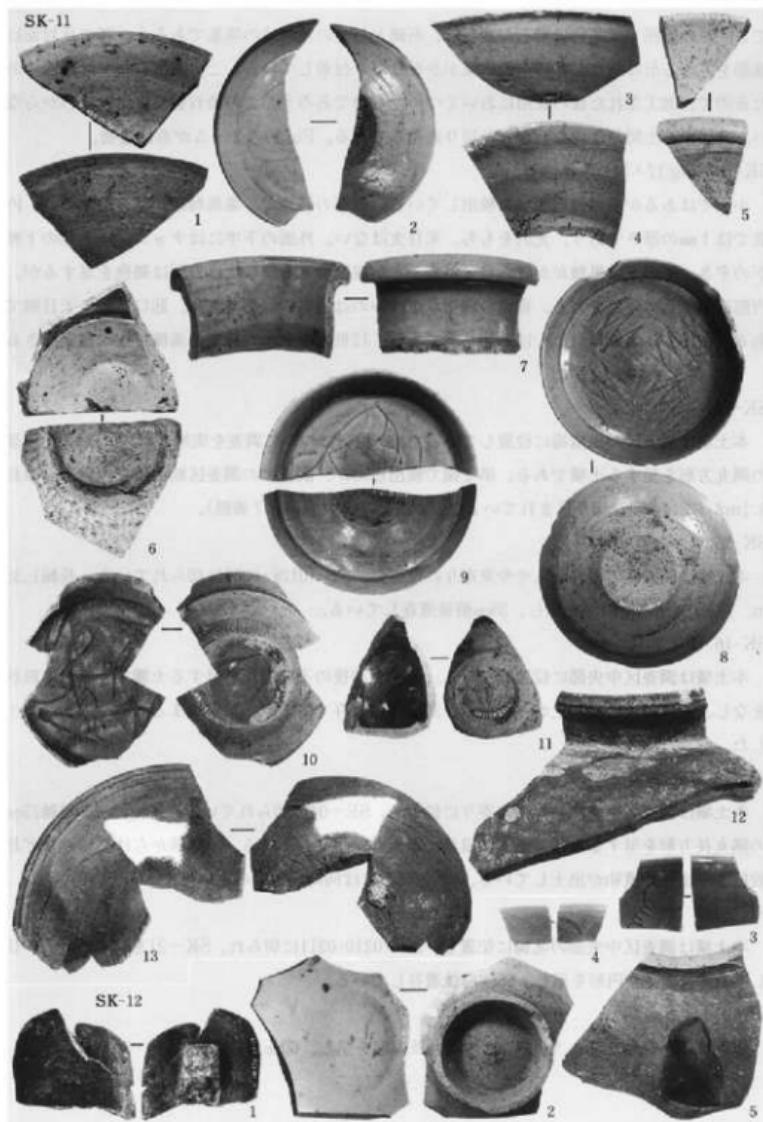


Fig.19 第11・12号土壤出土遺物

でき、耳の周囲では茶色に滑石が変色し、石鍋としての使用時の現象であろう。耳の反対面は縁部を丸める形に削り、その全面に煤がかなり厚く付着している。この面は石鍋では内面にあたるので、加工された後の使用においてついたものであろう。この滑石製品の用途はわからぬ。共伴する土師器は少ないが、糸切り底のみである。Fig.19の2～5が共伴遺物。

SK-13 (Fig.17・21)

小片ではあるが黒釉碗（2）を検出している。底部の破片で、漆黒釉薬が厚くかけられ、内底では1mmの厚さであり、光沢をもち、禾目文はない。外面の下半にはチョコレート色の下釉がのぞき、その上に黒釉がかけられていることが観察できる。胎土は表面は褐色を呈するが、内部は黒灰色の砂目である。高台の内ぐりが浅いのは通有の形態であり、匙口口縁の天日碗である。共伴する土師器（1）は糸切り底であり、12世紀中葉から後半の造構年代が想定できる。

4) 第2面検出遺構

SK 14

本土壙は調査区の東南端に位置しているため、約3%について調査を実施した。一辺1.5m前後の隅丸方形を呈する上壙である。第2面で検出したが、調査後の調査区断面精査の結果、標高5.1mから3.4m前後切り込まれていることが確認できた (Fig. 7 参照)。

SK-15

本土壙は調査区の中央からやや東寄りに位置し、SP-0128・0255に切られている。長軸1.35m、短軸0.9mの橢円形を呈し、35cm前後遺存している。

SK-16 (Fig.20)

本土壙は調査区中央部に位置している。径80cm前後の不整円形を呈する土壙で、床面は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。20cm弱の遺存であるが、比較的まとまった遺物が出土した。

SK 18 (Fig.20)

本土壙は調査区中央部のやや南寄りに位置し、SE-04に切られている。長軸85cm、短軸75cmの隅丸長方形を呈する土壙である。皿状に25cm前後遺存している。本土壙からは白磁碗など比較的まとまった遺物が出土している。SK-16とはほぼ同時期のものといえよう。

SK-20

本土壙は調査区中央部の北側に位置し、SP-0210・0211に切られ、SK-21を切っている。径1.35m前後の不整円形を呈し、55cm前後遺存している。

SK 21

本土壙は、長軸2.5m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈し、60cm前後遺存している。

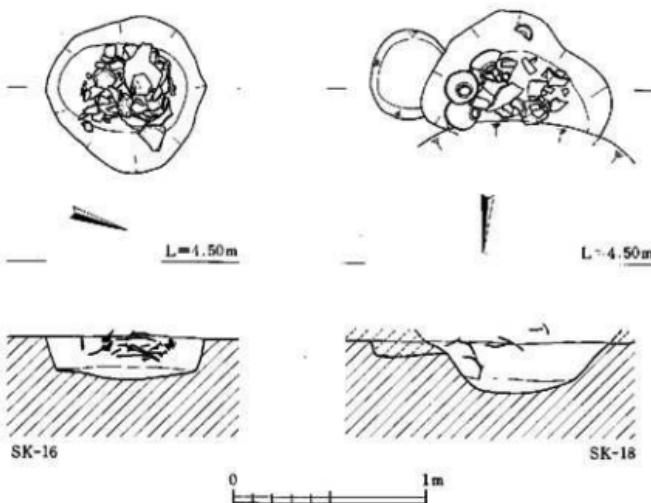


Fig.20 第16・18号土壇 (SK-16・18) 実測図

5) 第3面検出造構出土遺物

SK-14 (Fig.21・22)

土師器皿のうち、3・4・6・7はヘラ切り、他は糸切りである。両者とも調整は同じで、底部には板状圧痕がある。土師器丸底壺のうち、5は体部中位に鈍い棱をもち反転する。11は高台付柄で糸切り痕に輪高台を貼付している。12～17は瓦器椀で、12・14・16は外面はヨコナデ、13・15は高台脇まで乱雑な磨き、17の体部下半はヘラ磨きし高台付近には指頭痕がみられる。18～21はいずれも白磁であり、青磁は検出していない。18は内底に描文をいれ、わずかに緑色をおびた灰白色釉が高台付近までかけられ、ピンボールが少しみられる。20も類似した釉調と描文で、高台高さ1.5cm、口縁は外反する。内底に圓線を巡らしている。

12世紀の前半を中心とした年代を想定する。

SK-15 (Fig.21)

図示したのは土師器椀で、高台径9.3cmをはかり、褐色の精製土を用いている。高台は約1cmと高く張り出している。内底は凹まし、ナデ調整、体部はわずかに残存し、直線的な形態のようである。これに共伴して低い高台をもつ黒色土器Aの底部破片がある。

SK-16 (Fig.23・24)

土師器がなく中国陶磁器を相当量検出した。1～6は白磁である。1・2はよく似た皿で、平底は施釉後に釉薬を削りとり、1には径3.5cmほどの黄色円窓の笠餅痕がのこる。内底の花文

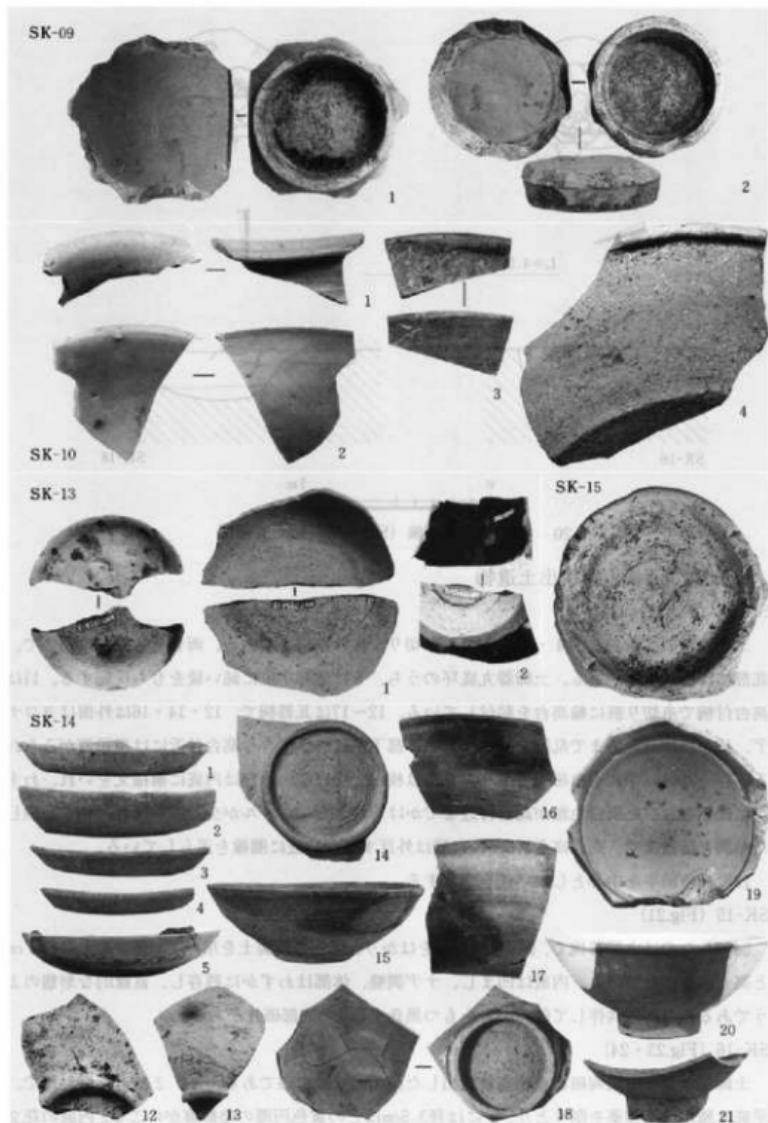


Fig.21 第9·10·13~15号土壤出土遺物

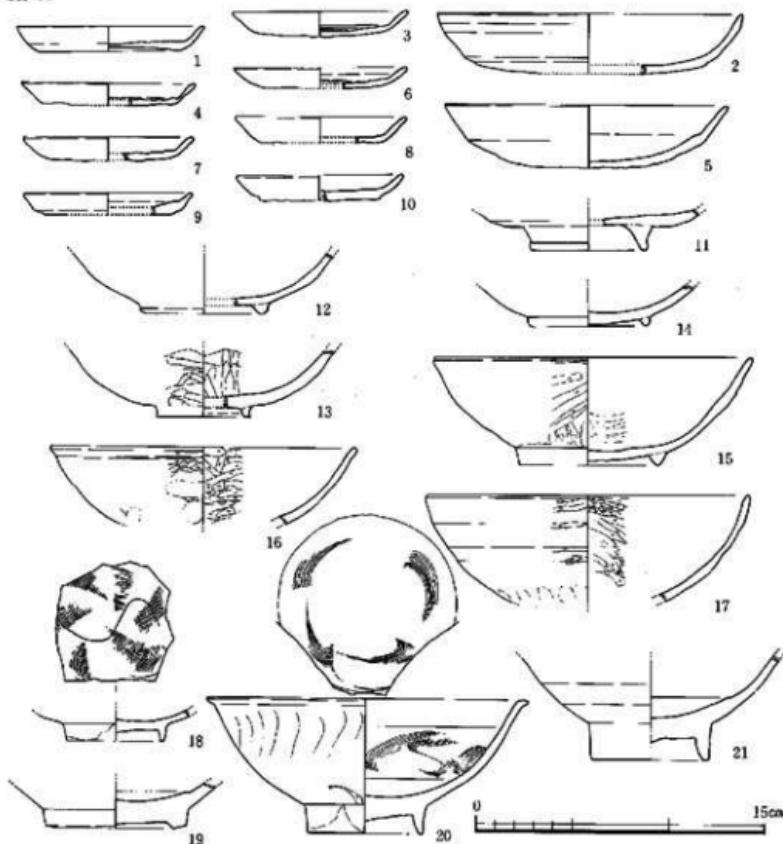


Fig.22 第14号土塙出土遺物実測図

は比較的丁寧な片切彫りで、わずかにうす緑色をおびた透明灰白色釉がかけられている。3~5の碗は微妙な相違はあるが、胎土、釉調、器形など共通しており同一窯の製品とみたい。釉薬は高台をもっての浸し掛けで、腰付近以下は露胎、焼き台とは疊付で接している。高台削り出しの際、体部側を少し深く削るため断線上にのこり、外底中央を小さく兜巾状に削る点などの特徴が共通している。白磁碗はこの形式のみを検出した。7以下は青磁。7と8はいわゆる同安窯系青磁で、8の碗の高台は深く肉厚に削り、外底中央部は兜巾状にする。黄緑色釉下の施文は櫛文の後にヘラ描文がなされ、初期竜泉窯のあり方と逆転している。9はガラス質の釉薬、内底見込みの形態、外底の兜巾状削り残しある点は8の特徴と類似するが、高台は低く広く削り出さ

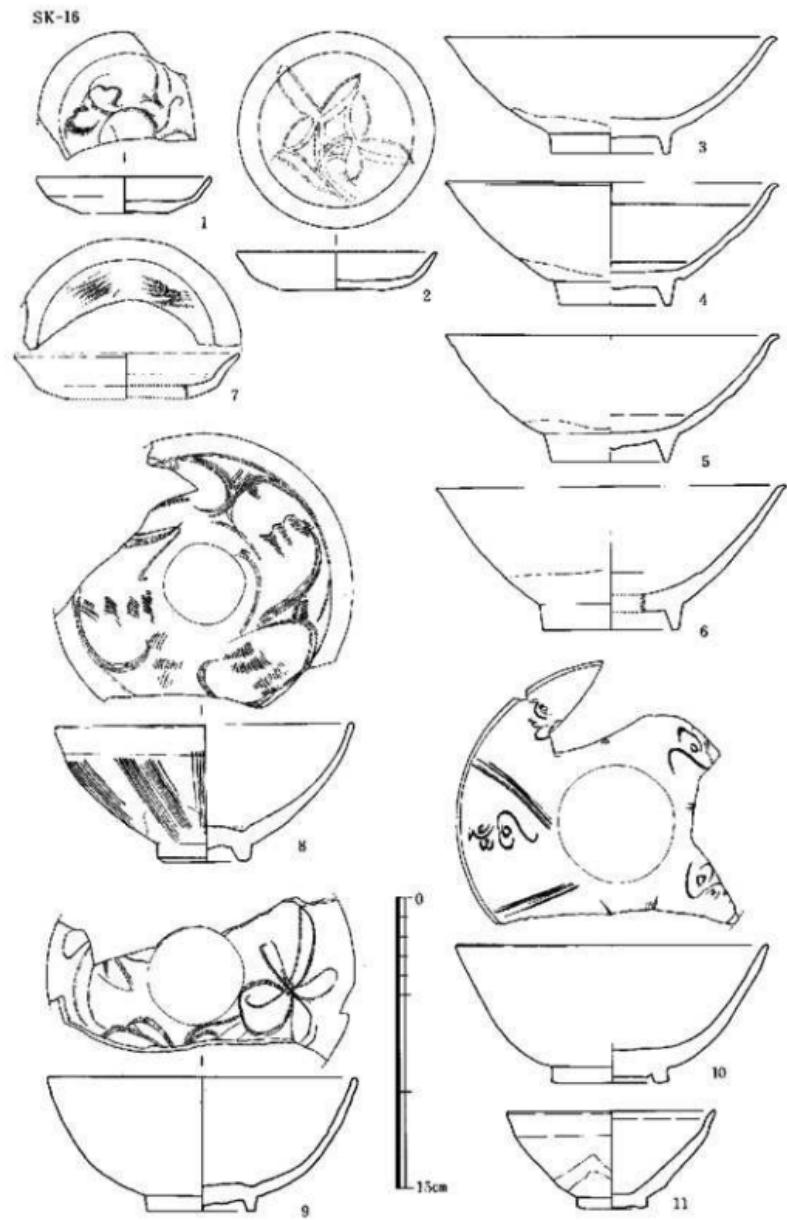


Fig.23 第16号土壤出土土器尖测图

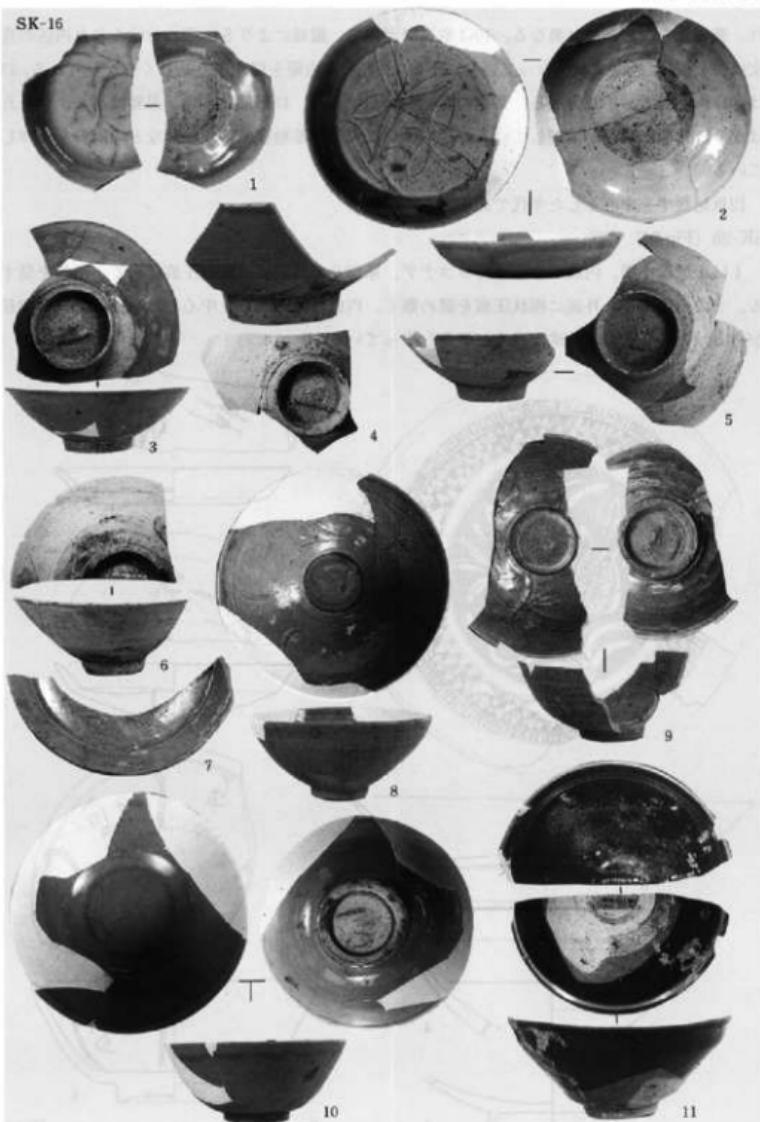


Fig.24 第16号土壤出土遺物

れ、構描文を欠き施文は異なる。10は竜泉窯青磁で、縱線により5区画に分けられた内区の花纹は少し便化しS字文状になっている。露胎の外底の高台際を深く削り込むくせが見られる。11は匙口黒釉碗で、半裁分残る。茶色の化粧釉がかけられ、口唇部は茶色、黒釉は薄く、釉たれはない。外面に黒漆が固着している。このほかに大型綠茶釉甕、茶色釉鉢などの陶器を共伴している。

12世紀後半を中心とした年代である。

SK-20 (Fig.26)

1は土師器小皿、内底の中心までヨコナデ、糸切りの外底には板状压痕ではなく、凹状を呈する。2の土師器环も外底に板状压痕を認め難く、内底は凹凸があり中心にはヘソ状に低い突起がある。1・2ともに焼成が良く、焼きしまっている。

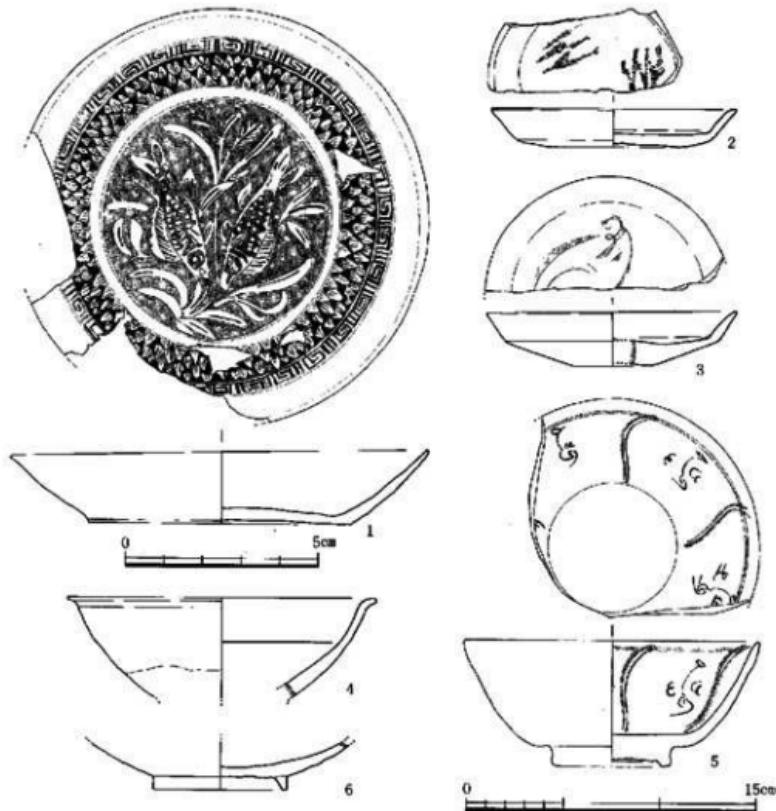


Fig.25 第21号土壤出土遺物実測図



Fig.26 第20・21号土壙出土遺物

SK 21 (Fig.25 - 26)

土師器は小片であるが、条切り底である。1は、白磁印花文皿で、青みのないクリーム色の釉薬が口縁部を除いてかけられ、外底の端に釉が少し溜まるが、水裂はなく滑らかに溶けている。口縁は芒口で、外面で幅5mm、内側で2mmを露胎にしているが、環輪が付けられた痕跡はない。内面に擦擦とみられる汚れがあり、外面にも認められる。口径10.9cm、直線的に体部をのばす形態で、軽くあげ底状につくる。見込み中央の1本の水草の根元に2匹の魚が餌を求めるかのような姿に表現している。魚はほぼ同型であり、やや大型の背鳍、3つの尾鰭からみると、金魚のような小型魚ではなく、桂魚のような江南の淡水魚であろう。見込み全体の表現は魚藻文といえる。内側面には回文と小花文を同じく印花で巡らしている。回文は回転方向がおなじ単位文を繋ぐデザインであり、明代に現れる単位文の回転方向をその中心で逆転させる形ではない。小花文は花脈を2~4本入れた花弁を3段に重ねて巡らしている。この皿の生産窯として景德鎮窯の可能性もあるが、あるいはその偽製品か決めがたい。このほかに白磁では、玉縁口縁と端反り口縁の碗がある。

2は描描文青磁皿で、口径12.3cmとやや人振り、肉厚であり、淡黄緑色で水裂のない釉薬が外底部分をのぞいてかけられている。3は、透明な暗緑色釉がかけられた竜泉窯青磁皿で、灰色の胎土は肉厚、花文が片切彫りされた内底中心は少し盛り上がり、その部分の釉薬は、使用のため摩滅している。小さい外底は釉薬を搔きとられ、焼成時の焼き台の黒点が少し付着している。4は端反り口縁の青磁碗で、透明で淡

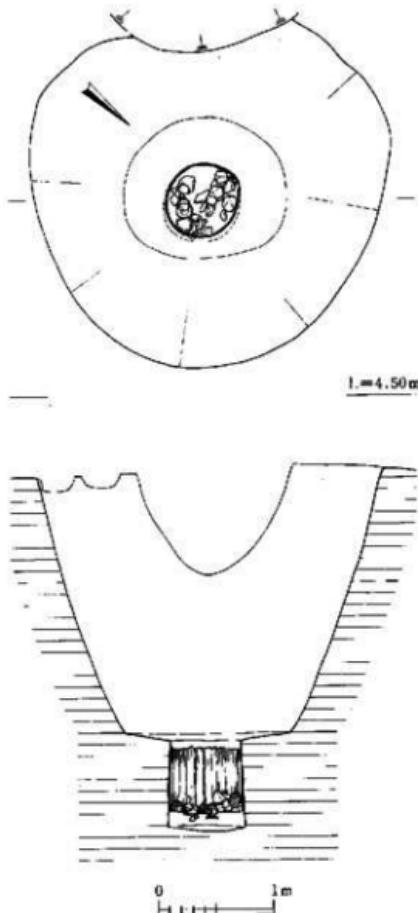


Fig.27 第17号井戸 (SE-17) 実測図

緑色、水裂のない釉薬が体部中位までかけられているが、それ以下は褐色の露胎である。内面中位に細い沈線が巡っている。胎土は白灰色の磁質であり、竈泉窯のそれとは異質のようである。5は、竈泉窯青磁六弁花文碗で、暗緑色、一部は黄緑色で透明な釉がかけられている。その釉薬は、高台疊付は一部を除いてかけられ、外底は釉薬が拭き取られているようで、径3.3cmの焼き台痕が観察でき、また、高台際は溝状に抉られており、釉薬が流れこんでいる。6は瓦器椀とみられるものであるが、通有の博多遺跡群出土のものに比べて異質である。胎土に石英粒を含む砂質で、器壁が薄く、焼成がかたい。高台は0.7cmの高さで直立し筑前産瓦器と比較してシャープである。高台内に糸切り痕が残り、高台の外側はヨコナデ調整されており、内面は磨きの痕跡は残存部では認められない。内底に径6.5cmの高台径と同じ重ね焼きの圧痕がある。

12世紀後半を中心とした年代を想定する。

6) 第3面検出遺構

SE-17 (Fig.27)

本井戸は調査区のほぼ中央に位置し、SE-04に切られ、SE-25・26を切っている。径3m弱で、2.85m前後の鉢状をなす掘り方をもち、井筒は径60cm前後で、掘り方のほぼ中央部に位置している。井筒は幅10cm前後、長さ55cm前後の板材を枠として用いている。井筒下面には拳大的な角礫が投げ込まれていた。井筒底面の標高は75cmである。

SE-25・26 (Fig.28)

SE-25は径3m強、2m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方のほぼ中央部に径70cm前後の井筒が設けられている。井筒には部分的に木枠が遺存している。井筒底面の標高は1.07mである。

SE-26もSE-25とはほぼ同じ規模をもつと考えられるが、掘り方の一部が違

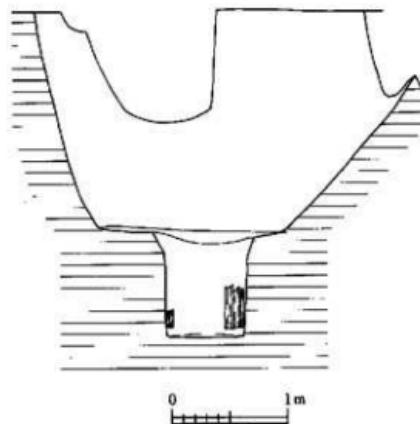
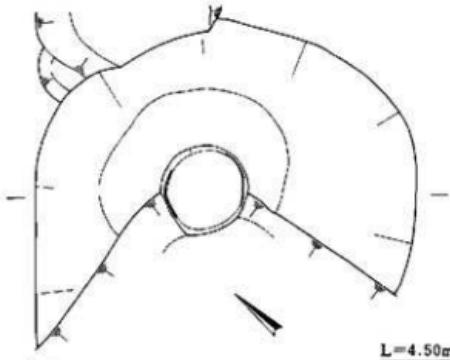


Fig.28 第25号井戸 (SE-25) 実測図

存しているのみである。

SE-17・25・26は約1世紀の間に営まれたものと考えられ、SE-26がもっとも古く、SE-17がSE-25より新しいといえよう。

SK-27

本土塙は、調査区の西南部に位置し、長軸2mで隅丸長方形を呈すると考えられるが、調査区端で検出したため完掘できなかった。

SK-28

本土塙は、調査区中央部からやや北西寄りに位置している。長軸1.4m、短軸0.9m弱の楕円形の土塙で、床面は直状をなし、壁は緩やかに立ち上がっている。

7) 第3面検出遺構出土遺物

SE-17 (Fig.30~33)

1・2の土師器は糸切りで、2の口径は12.4cmである。3・4は白磁碗で、4は低い高台、内面に棚とヘラにより施文し、灰色透明釉が高台上までかけられている。5~12は青磁である。5は五輪花小碗（口径10.4cm）で、灰色の胎土に青灰色の透明釉が高台脇までかけられ、全体にきれいな氷裂文をつくる。露胎の外底は茶色に呈発し、径2.2cmの整餅痕が認められる。6は灰色胎土に黄緑色釉、外面はヘラによる模状文である。7・8はともに内底に圓線、外底は平坦に削る。9・10は「金玉満堂」銘竜泉窯青磁碗で、10は外底にも釉薬が付着し、高台内側に砂がついている。11は5区画に内面を分ける施文で、「富」銘はスタンプではなく削り出しのようである。胎土は暗灰色、露胎の高台部分は茶色を呈し、費付に4個の珪砂目跡がついている。12は内面に蓮華文を片切彫りで丁寧に施文する竜泉窯製皿であり、疊付にも斑状に釉薬が付着し、外底に整餅痕がある。13は径20.2cmの小型黄釉鉄絵盤、15は薄く青磁釉がかけられた長胴壺で、露胎の底部に「十六口」の墨書きがある。これらの他に、青白磁型押魚藻文皿、同合子蓋、白磁堆線小碗、白磁四耳壺、高麗青磁碗、押印文軒平瓦などを、井筒上・下層から検出。12世紀後半。

SE-25 (Fig.17・35)

出土した遺物は多くない。1の土師器はヘラ切り離し底で、小片ではあるが口径9.0cmをはかる。他に土師器を検出していない。2は瓦器皿で、内面は灰色で全面磨きがされ、口縁から体部の外面は黒色を呈し、ヨコナデ調整がなされ、底部には糸切り痕が残る。3は白磁碗の底部で、高台の高さは1.7cmと高く直立している。この部分には純白の釉薬が垂れ下がっているが露

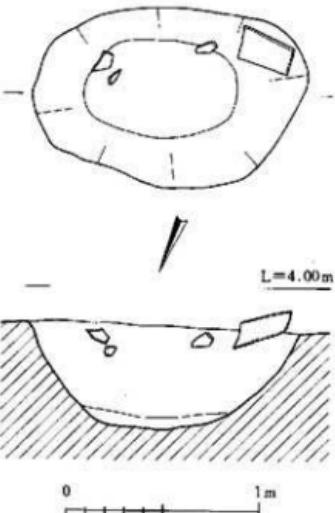


Fig.29 第28号上塙 (SK-28) 実測図

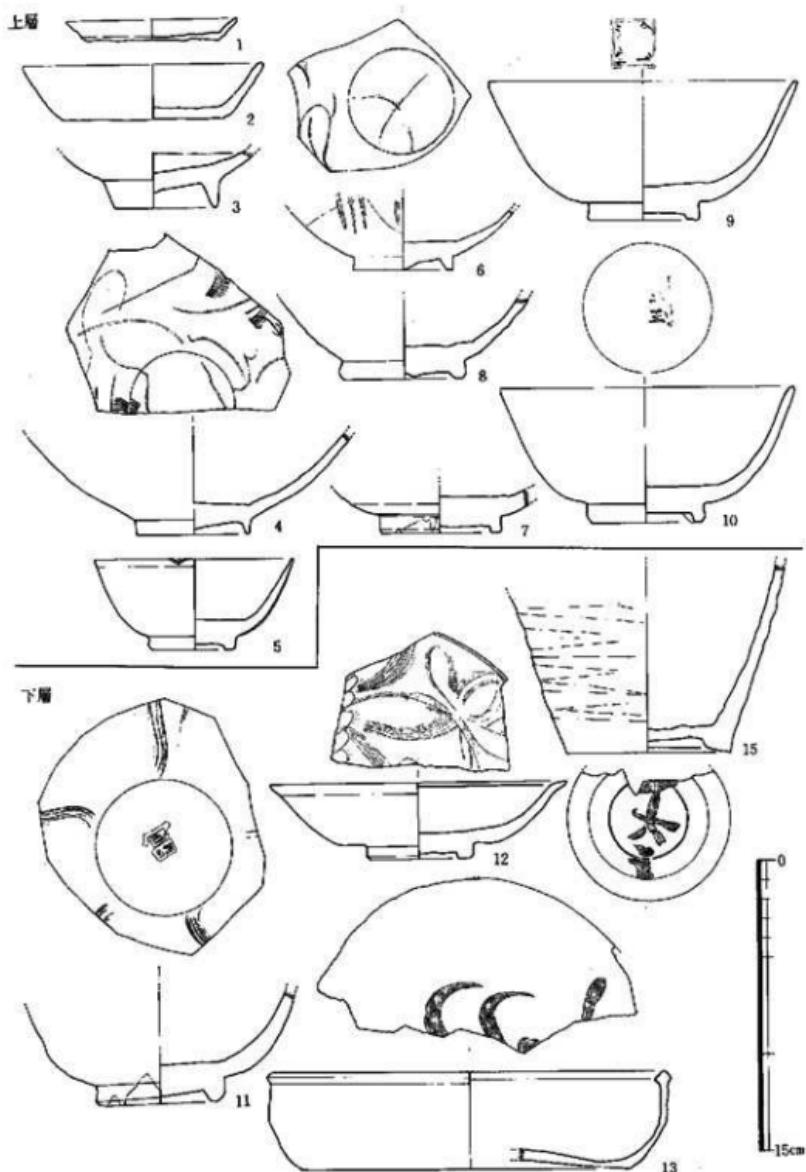


Fig.30 第17号井戸上・下層出土遺物実測図(1)

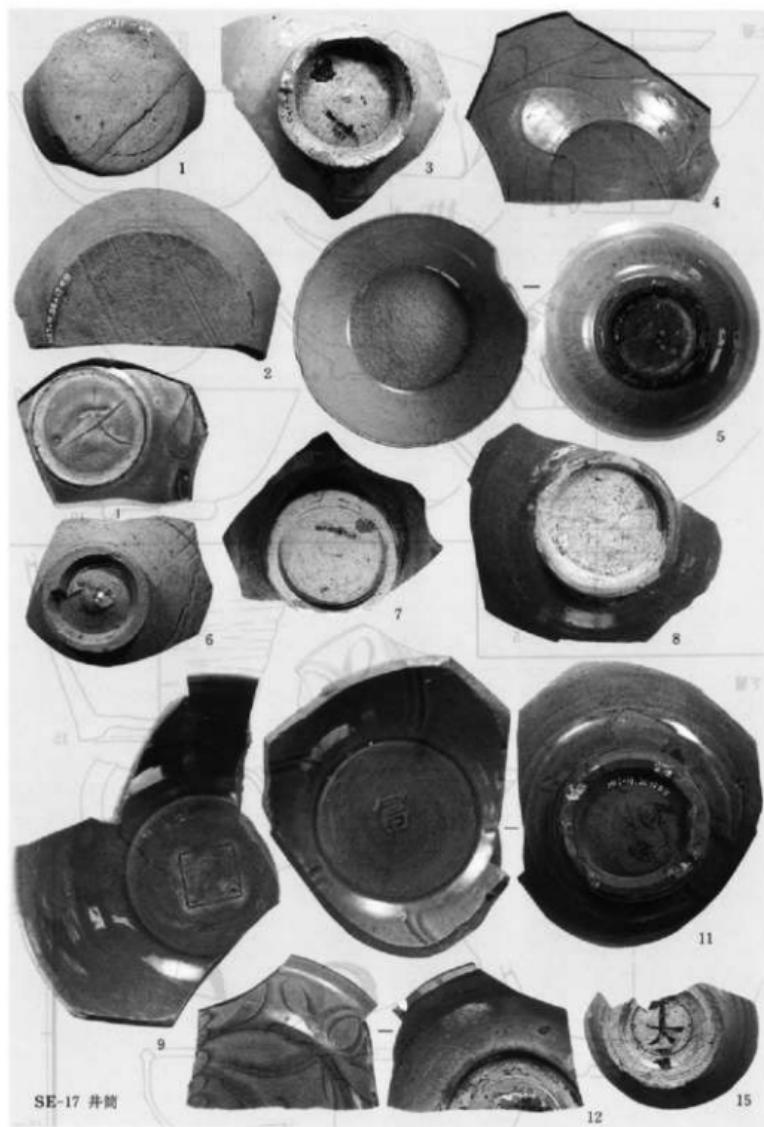


Fig.31 第17号井戸井筒内出土遺物(1)

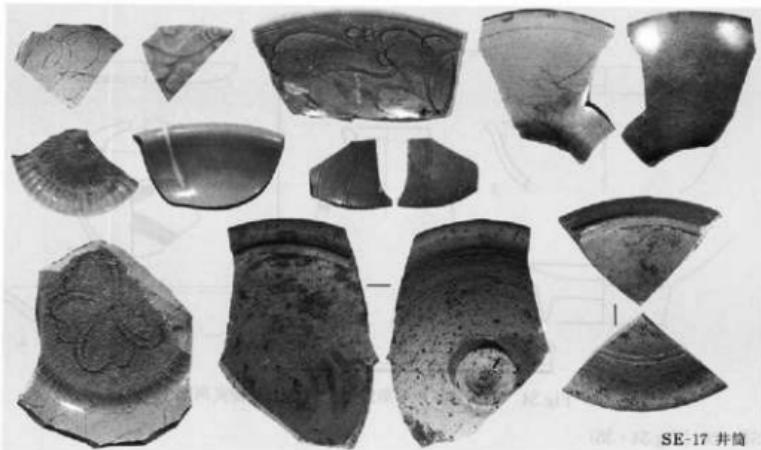


Fig.32 第17号井戸井筒内出土遺物(2)

胎である。高台内挾りは早い回転で削り出されており、窯津様の黒焦げ斑点が付着し、かつ記号様の墨書があるが不鮮明である。このように高台が高い白磁碗は、11世紀後半に江西省景德鎮窯で作られ、12世紀に盛行する福建・広東省かともわれる端反り白磁碗につながる祖形の可能性がある。4は玉縁口縁の白磁碗で、濁白色の釉薬が体部中位までかけられている。端反り口縁白磁碗も検出している。5は四耳壺の頸部で、頸部高さは4.5cmほどであり、氷裂のない灰白色釉が内外にみられる。胴部との接合は頸部を嵌め込むのではなく、単に重ね合わせて強く押させて密着しているようである。

6・7の瓦は井筒内から出土したものである。6の草花文軒丸瓦は厚みの薄い瓦当面に筒瓦を嵌め込み、接合部を補強している。7の押圧文瓦は、須恵器質に焼成され、下辺部を布をあてがって押圧し満水瓦にする。凸面には撻目叩き文が残る。

出土遺物からみると、この遺構は12世紀前半代に埋没したと推定する。

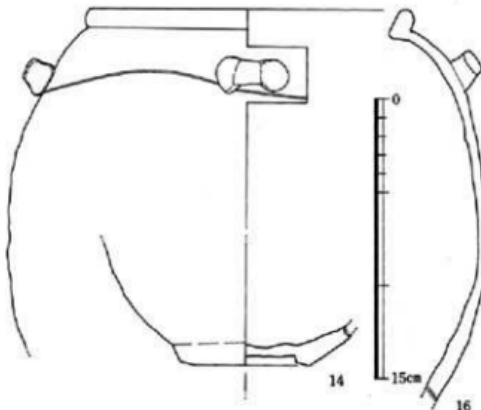


Fig.33 第17号井戸上・下層出土遺物実測図(2)

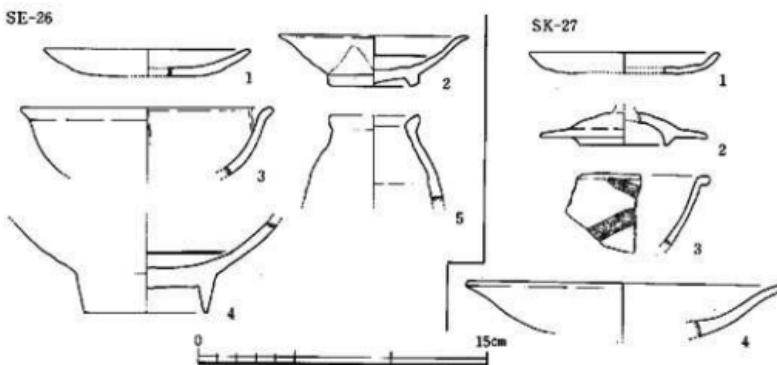


Fig.34 第26号井戸・第27号土壌出土遺物実測図

SE-26 (Fig.34・35)

1は、SE-25出土の2と類似した瓦器皿であるが、本品のほうが磨きが外面にもおよんでいる。外底には板状の圧痕が認められる。2～4は白磁で、2は高台付皿、内底の釉薬を輪状にかきとり露胎部分に黒色の重ね焼きの痕跡がある。灰白色の透明釉は外体部には無造作にかけられている。3は白堺線を口縁から垂らす碗で、玉縁碗などと同じ灰白色で、ピンポールのある釉薬がかけられている。4は、端反り碗で、高台の内挟りはざっくりと削り出され、外底に墨痕が認められるが、判読できない。5は暗緑色釉が内外にかけられた陶質長壺である。

このほかに、白磁玉縁口縁碗、青白磁倒笠型碗、竜東第2期青磁碗、同安窯系青磁碗、黒釉陶質瓶が共伴している。12世紀中葉前後の年代を推定する。

SK-27 (Fig.36)

遺物は非常に少ない。1は糸切り底の土師器皿、内底に強いナデ調整がみられる。2は、白磁蓋で、灰白色の磁質胎土に白灰色の不透明釉がかけられている。内側は露胎で、黄褐色を呈する。3は、白磁鉄絵鉢の口縁部の小片で、白色で水裂の多い釉薬が内外にかけられている。4は、青磁皿で、暗緑色で、不透明な釉薬が厚くかけられている。遺物の混入も考えられる。

SK-28 (Fig.36・44)

完形の平瓦を検出している(8)。厚みは薄いが、均質によく焼成され、堅く焼き締まり須恵器とかわりない。門面はやや粗い布目で、上辺はナデ調整が幅4cmの範囲にみられる。凸面は、網目叩打文を上辺では強いナデにより擦り消している。中位でも同様にして一部の網目は擦り消されている。上縁は未調整、下縁はヨコナナデ調整され、左右側は内側から半分を切断し、残り半分を割る、4枚作りの方法をとっている。長さ28.9cm、上弦幅22.7cm、下弦幅18.0cm、重量1,390gを計る。これに共伴して、1・2は上師器で、1はヘラ切り、2の环は口径15.0cm、

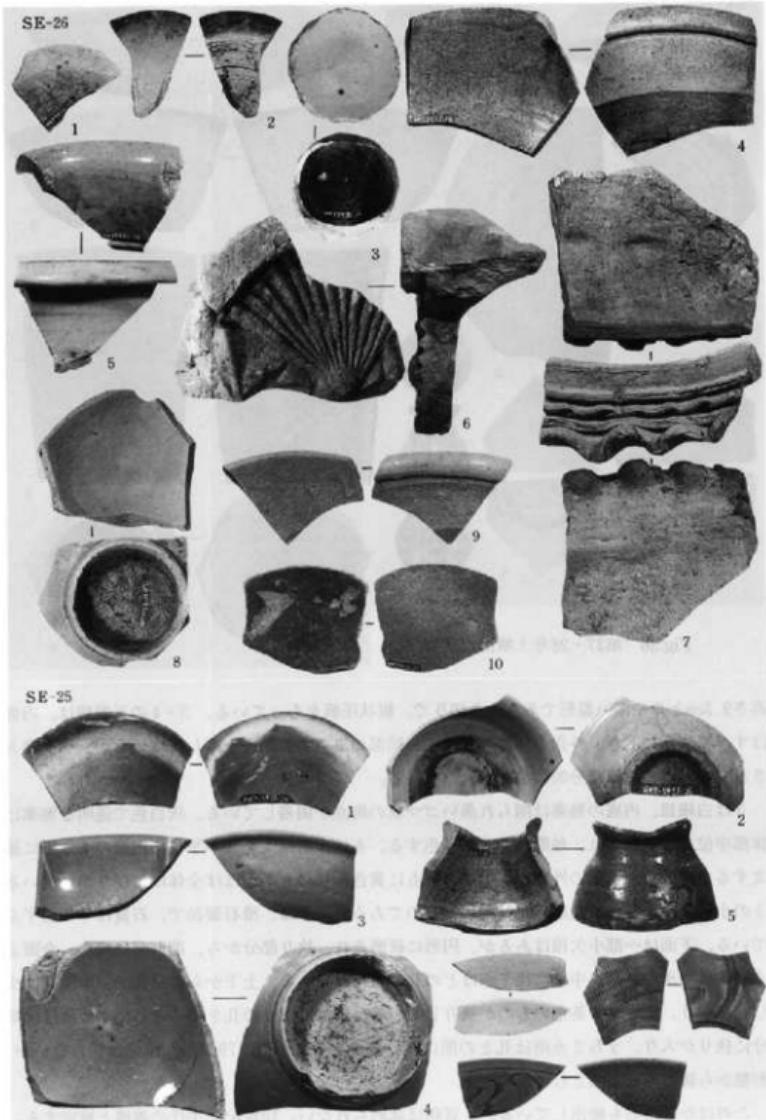


Fig.35 第25・26号井戸出土遺物

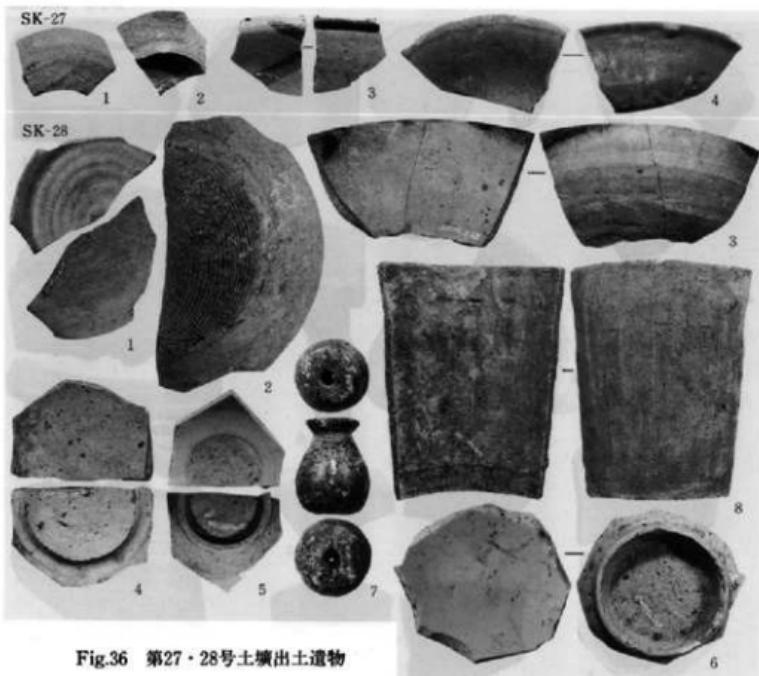


Fig.36 第27・28号土壤出土遺物

高さ9.2cmとやや深い器形であり、糸切りで、板状压痕をもっている。3・4の瓦器柄は、内面はすべて平滑に磨き、外面も体部中位まで、四部のヨコナデ箇所を残してはいるが、ヘラ磨きされている。口縁は部分的に黒色をおびている。

5は白磁皿、内底の釉薬は削られ黒いゴマ状の斑点が固着している。灰白色で透明な釉薬は体部中位までかけられ、釉際は黄色に発色する。6は、構描文を10本単位で内底の4カ所に施文する白磁碗で、露胎の外底に黒斑点とともに黄色砂状のものがほぼ全体にこびりついている。5の小皿にもみられ、焼成時に付着したものであろう。7は、滑石製品で、石質はやや黒ずんでいる。下面は一部小欠損はあるが、円形に研磨され、挟り部分から、卵形部に統く。全面よく磨かれ平滑であり、中央に径7mmほどの孔が穿たれている。上下からの穿孔で、中間部は少し細くなり、繊維状の茶色のものが残存している。頂部にはその孔を中心として4カ所ほぼ等分に抉りが入り、うち2カ所は孔との間に細い溝がある。重量は79.97g。用途は判らないが、形態から鍾型滑石製品としておく。

このほかに磁石も検出しているが、青磁は認められない。12世紀前半代の遺構と推定する。

4. 第4面の調査 (Fig.37)

第4面は、第1～3b面の層群をはずした黒灰から暗褐灰色を呈する砂層の層群の上面である。第3b面との土層堆積状態は整合をなし、境は明瞭である。標高は3.9～3.6mと南へわずかに傾斜している。

検出遺構としては、井戸2基(SE-36・

60)、土壙8基(SK-30～32・34・35・37～39)と柱穴101個がある。

1) 第4面検出遺構

SK-30 (Fig.38)

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、幅85cm前後で溝状をなしていないが、土壙の連続的な切り合いとしてとらえた。55cm前後遺存している。

SK-31

本土壙は調査区中央部に位置し、SK-30とSK-37の間にある。長軸1.65m、短軸1.3mの平面形楕円形を呈し、60cm弱遺存している。

SK-34 (Fig.39・40)

本土壙は調査区の西側に位置し、SK-37を切っている。平面形は2.4m

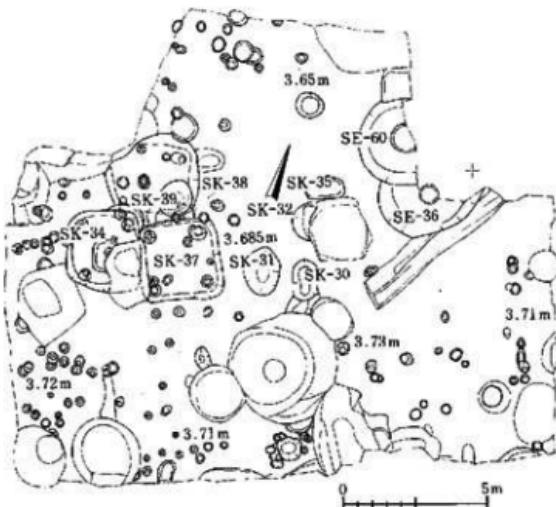


Fig.37 第4面遺構配置図

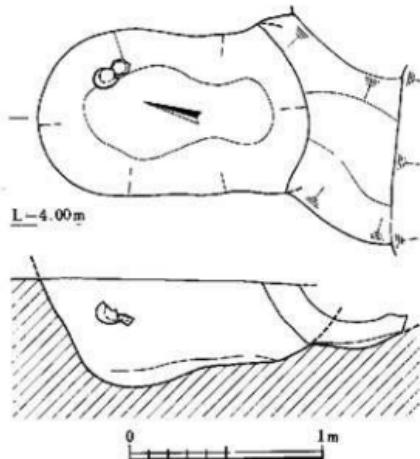


Fig.38 第30号土壙 (SK-30) 実測図

前後の隅丸方形を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。床面はほぼ平坦で、一隅は擾乱により破壊され不明であるが、他の隅部には径40cm前後の柱穴がみられる。本遺構は90cm前後遺存している。

本土墳は屋根構造をもつ倉庫と考えられ、土師器・瓦器碗など12世紀前半のまとまった遺物が出土した。

SK-35 (Fig.41)

本土墳は、調査区中央部の拡張区との境界で検出した。長軸1.35m、短軸0.7mの隅丸長方形を呈し、10cm強の遺存で、土壤墓状をなしている。

SE-36

本井戸は調査区中央部北側の拡張区と調査区境界に位置し、SE-60に切られている。径3.5mで1.35m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方中央に径65cm前後の井筒が設けられている。本井戸は、調査区境界に位置するため完掘できなかった。

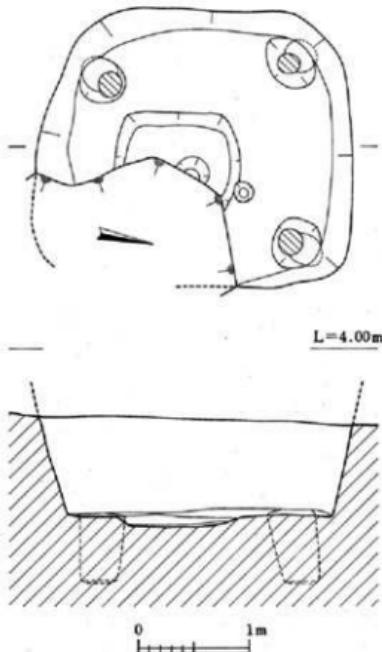


Fig.39 第34号土壙 (SK-34) 実測図



Fig.40 第34・37号土壙完掘状況

SK-37 (Fig.42)

本土壙は調査区のほぼ中央に位置し、SK-38を切り、SK-34に切られている。平面形は一辺2.75mの隅丸方形を呈し、1m前後遺存している。床面は平坦でたたき締められている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面の四隅に径50cm前後の柱穴があり、柱旗跡から径30cm前後の柱が用いられていることがわかった。また、ほぼ同じ位置に柱穴が重なることから建て替えは行なわれたと考えられる。

本土壙もSK-34・39とともに、屋構造をもつ倉庫と考えられ、切り合ひ関係からSK-39より新しく、SK-34より古いといえよう。

SK-39 (Fig.43)

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、SK-34・37・38・40に切られている。平面形は一辺3.2m前後の隅丸方形を呈し、1.1m前後遺存している。西北部は調査区限に延びているため、確認できなかった。床面は平坦で、たたき締められており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面の三隅で柱穴を検出したことから、SK-34・37と同じ性格をもつものといえよう。

出土遺物から、11世紀末から12世紀初め頃のものと考えられ、もっとも新しいSK-34との時期差が短いことから、3基とも並存した可能性もある。

SE-60

本井戸は拡張区東側で検出した。SE-36を切っている。径3.5mで1.2m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方中央に径1m前後の井筒が設けられている。本井戸もSE-36と同様、調査区境界に位置するため完掘できなかった。なお、井筒の中には拳人から人頭大の

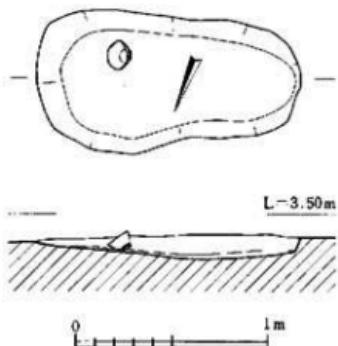


Fig.41 第35号土壙 (SK-35) 実測図

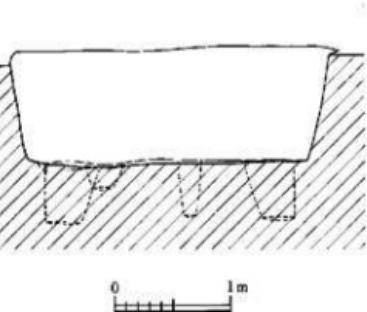
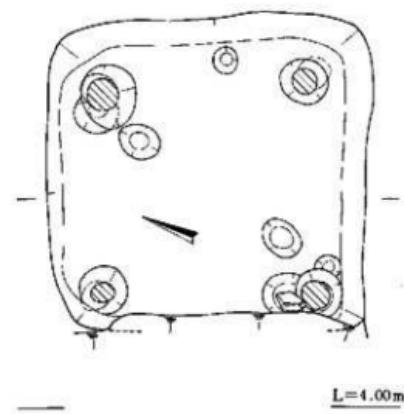


Fig.42 第37号土壙 (SK-37) 実測図

角窓が詰め込まれていた。

2) 第4面検出遺構出土遺物

SK-30 (Fig.44・45)

ヘラ切り土師器皿と白磁のみの組合せであるが、実測できるものは少ない。1は白磁碗であるが、全体に粗製のつくりで、高台は直立、肉厚、内底の銭は径7.7cmと大きい。胎土は黒く小さい粒子は混じるが白色の磁器質であり、釉薬も白く質は悪くない。2は、内面に構造文を不規則に配する白磁皿で、高台上まで黄灰色で氷裂のない釉薬がかけられている。疊付は焼成後に研磨されている。この他はすべて白磁であり、遺構は11世紀後半～12世紀前半の可能性が高い。

SK-31 (Fig.44・45)

土師器、瓦器碗を少量検出している。1は体部中位に明瞭な段をもつ浅い皿で、内底を強くナデ調整し、糸切りの外底には板状の圧痕が強くついている。淡褐色の精製土である。2も糸切り土師器皿で1に比較して肉厚で浅い器形であり、ほぼ中央に穿孔がある。煤などの付着物は認められない。3は同じく糸切り底の土師器皿であり、内底を強くナデ調整し、体部立ち上がりは溝状になる。復元口径16.4cm。4は瓦器碗で、内面は黒色で、全面に不定方向の磨きがなされている。外体部は口縁下を強くヨコナデして凹ませ、その上下の凹部はヨコナデ、凸部には磨きがみられる。

SK-34 (Fig.46~48)

[上層] 土師器（1～10）、瓦器碗（11～15）を相当量検出した。小皿のうち、1・6・7はヘラ切り離し、板状圧痕は認められない。その他は糸切りで、板状圧痕がある。ただし、2はヘラ切りの可能性もある。両者の間に法量の差は認めがたい。8・9は丸底環、9では内面ヨコナデの上にコテ痕がある。10の土師器碗は、赤褐色を呈し、内面は磨き、一部はその上にナデ調整がみられる。外体部も横方向の磨きが下半までみられる。瓦器碗のうち、11は10の土

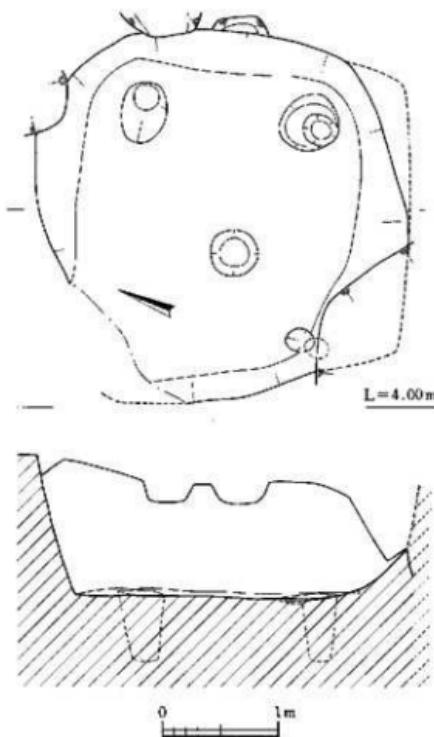


Fig.43 第39号土壤 (SK-39) 実測図

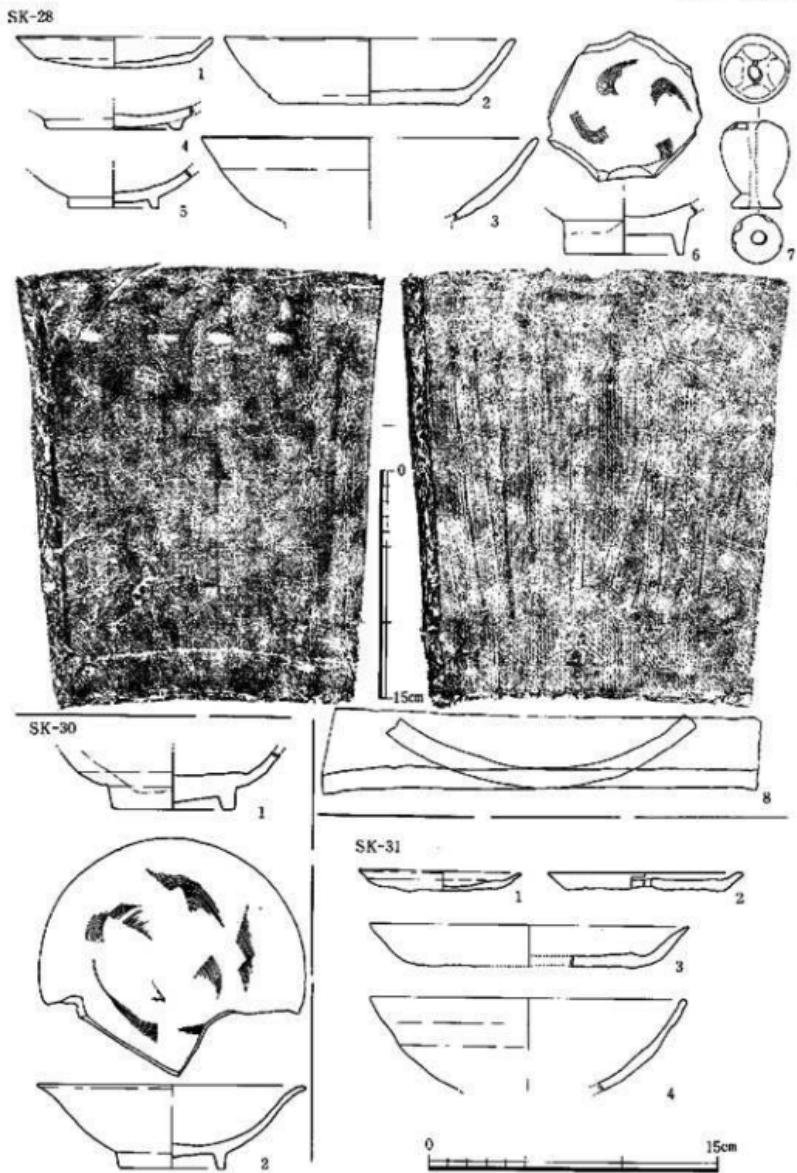


Fig.44. 第28・30・31号土壌出土遺物実測図

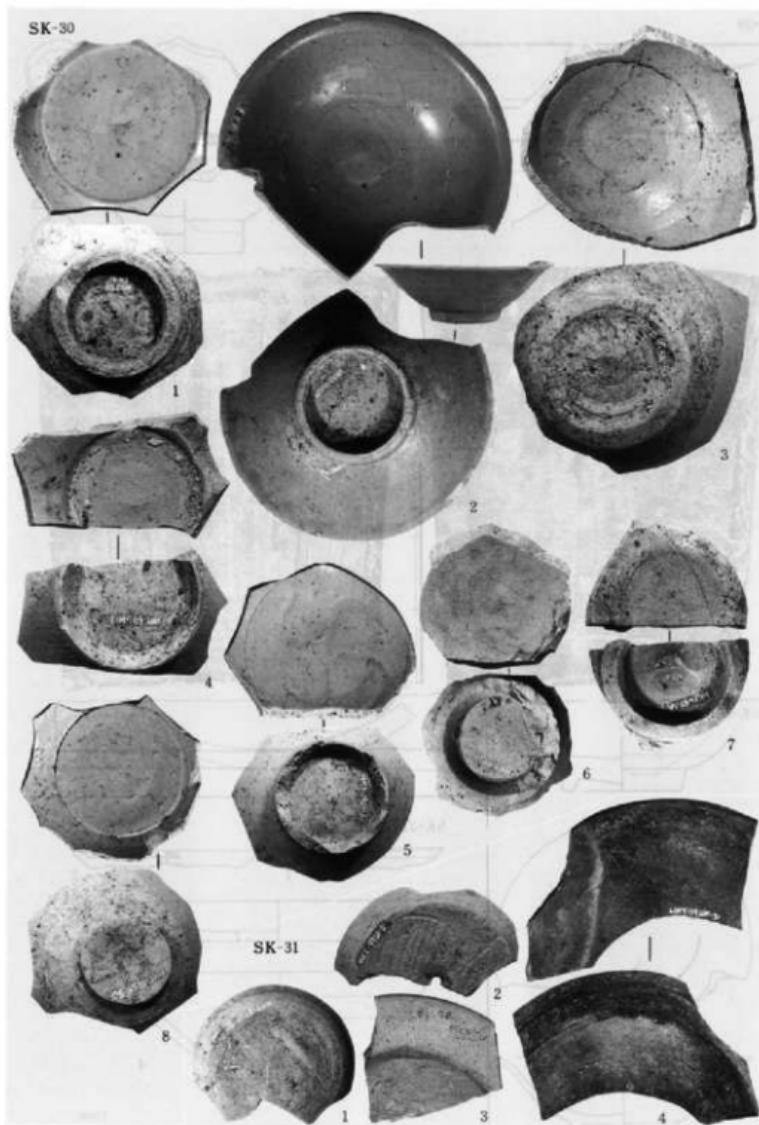


Fig.45 第30·31号土壤出土遺物

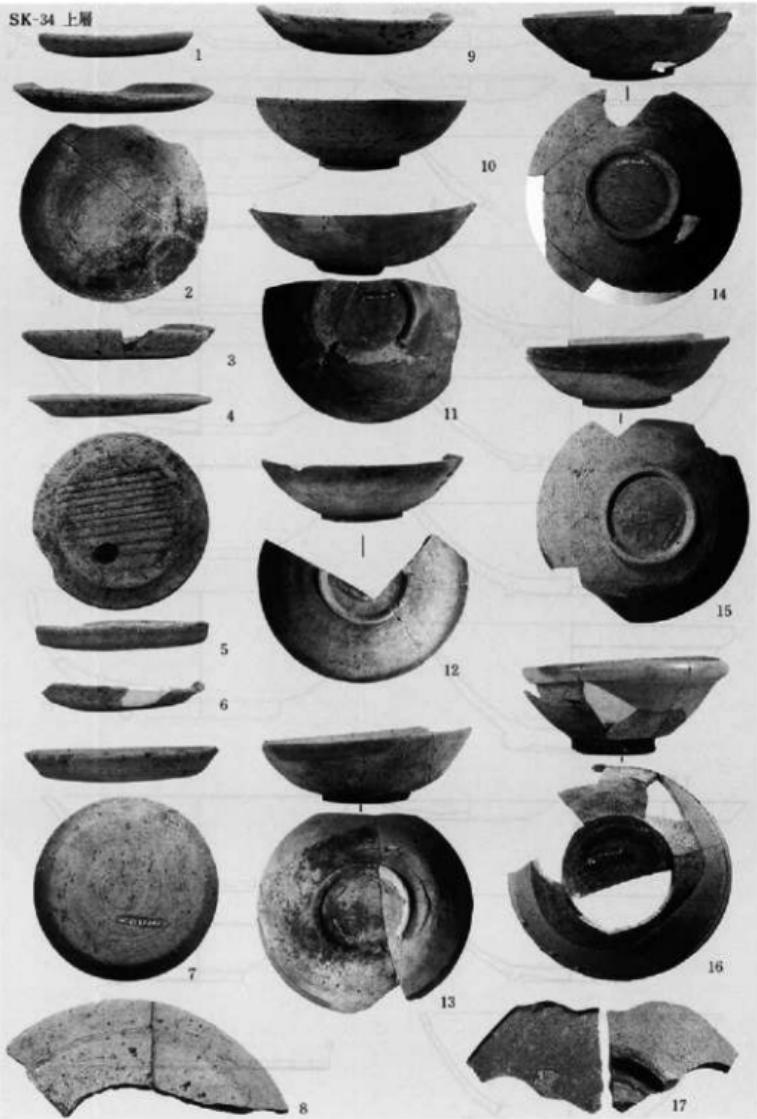
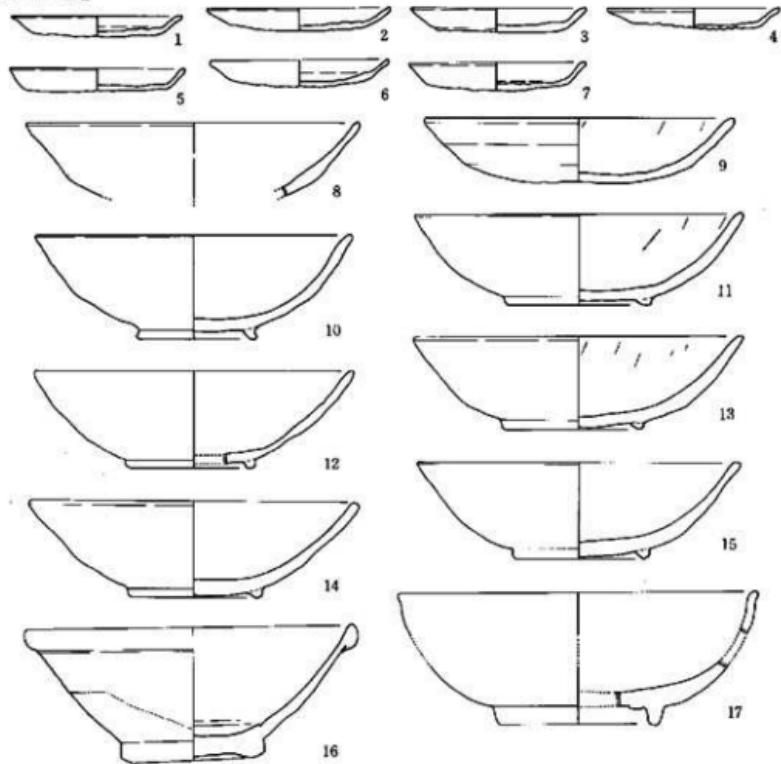


Fig.46 第34号土壤上層出土遺物

SK-34 上層



下層

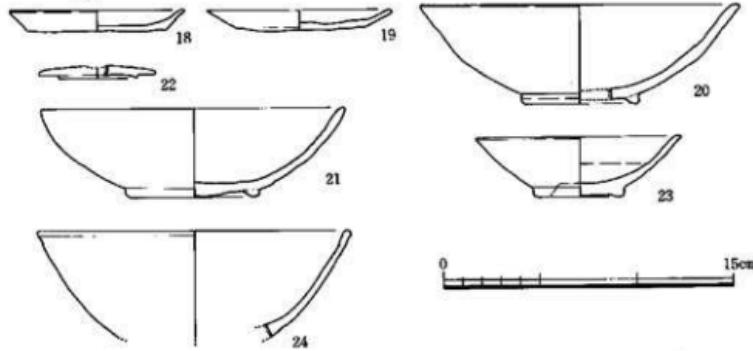


Fig.47 第34号土壞上・下層出土遺物実測図

師器と同じ調整で、黒灰色瓦器質である。12以下の外面の磨きは、凸部分を粗く磨き凹部分はヨコナナをのこしている。其伴する白磁16は玉縁口縁、内底に圓線をいれる。17は粗製の高麗青磁碗で、茶褐色粗胎に、暗緑色釉が内外にかけられ、内底に珪砂の目跡、施釉された疊付は焼成後、研磨されている。

[下層] 上層の遺物と接合するものがあるので、先後関係はないようである。土師器皿の18は糸切り底、19はヘラ切りである。下層においても両者は混在している。20・21は瓦器椀で、ともに高台付近まで粗い磨きが施され、20は灰黒色、焼成は固い。21は口縁部が黒灰色、他は灰色で、外底に板状压痕がある。22は青白磁小壺蓋で、純白磁胎にわずかに青みを帯びた透明釉がかかる。23は白磁皿で、浅い抉りの高台部分は露胎。24は暗緑色の釉がかけられ、部分的に黄褐色に窯変しており、竜泉窯青磁碗であろう。

12世紀前半の土師器と瓦器椀の良好なセット資料である。

SK-35 (Fig.48)

図示した白磁碗1は、内底を輪状に釉剥ぎするタイプである。体部は直線的にのばし、露胎の腰部のヘラ削り、直立する高台の削り出し、外底の兜巾状の抉りなど無造作で、早い輪轉回転の仕事である。疊付にはわずかに釉薬が残るが、焼成後の研磨がされている。輪状の釉剥ぎ箇所は褐色を呈し、釉薬と黒茶色の砂の付着が認められる。

SE-36 (Fig.48・49)

1～6は井戸掘方、7は井筒から検出した遺物である。1の土師器皿は、薄手に作られ、内底縁を凹ませ、口唇は肥厚させる。2の土師器皿は赤褐色、軟質で、1と同じく糸切り底で、板状压痕がみられる。3は、小片ではあるが、高麗青磁碗とみられ、内外に暗緑色の釉薬がかけられ、内面には線刻花文と圓線が施文されている。胎土は灰色。4は白磁壺蓋で、甲部には2～3本単位の界線が低い鉢から放射状にのび、透明で、淡黄緑色の水裂の多い釉薬がかかる。蓋受けから内面は露胎で、焼成時についたとみられる黒色斑点が無数にある。胎土は白灰色の磁器質である。5は白磁碗で、内底に輪状釉剥ぎがあるタイプで、円周部分は赤褐色を呈し、黄白色砂が付着する。これに対応する高台には、黄灰色砂が高台端部を包むように付着しており、疊付の研磨はされていない。6は、石鍋を再加工した方形板状品で、四面の中央に径2.5cmほどの不整円文が浅く彫られている。井筒中より検出した土師器坏7は、糸切り底で、内外面と口縁部に煤がついている。

12世紀後半の時期と考える。このほかに7世紀代の須恵器、玉壁高台綠釉皿なども出土している。

SK-37 (Fig.48・49)

少數ながらまとまった遺物を検出している。1は土師器皿で、口径9cm、底部に強く板状压痕がつき、粘土紐の痕跡がみられ、ヘラ切りである。2は口径15.6cmの土師器丸底の坏で、体



Fig.48 第34号土壤下层·第35~37层土壤出土遗物

部中位で稜をもって外反し、底部に細かい板目がついている。3は、石英を多く含み、淡褐色を呈する土師器高台付きの壺であるが、高台部分は剥離し痕跡のみである。現存器高は2.6cmと浅い丸底壺と同じであり、内面ミガキ、外面は中位にわずかに稜をもち、その上はヨコナデ、下には指頭痕がみられる。小片ではあるが、復元口径15.2cm。4は土師器壺で、口唇部にも磨きがおよび、面取り状をなしている。小型の高台を貼り付け内面と外面上部は磨きがかけられ、器面の凹部にはヨコナデ調整が残っている。口縁はわずかに残るのみで、口径は正確には計測不可能であるが、16cmと推定できる。5は須恵器壺の口頭部であるが、器肉が薄く暗灰色を呈し、肩に横方向のハケ口調整がされている。通常の須恵器とはやや異質な感じをうける。

これら土師器と共に、6は白磁碗である。口縁下に幅3mmほどの溝状凹線を入れることによって、口縁を玉縁様に肥厚させたかのようにつくる。口縁部の厚みは体部とかわっていない。釉薬は灰白色、水裂がなく内外に滑らかにかけられ、釉溜まりではわずかに緑色をおびる。

このほかに白磁皿の小片がある。7は土鏡で、最大径1.7cmである。8は砥石で、1面を除いて平滑な研ぎ面をなしているが、全体に2次的な火熱を強く受け、写真左右側面には煤がかなり厚く付着し、下面では、赤変し表面が剥離している。

次のSK-39とは同時期の11世紀末~12世紀初めと考える。

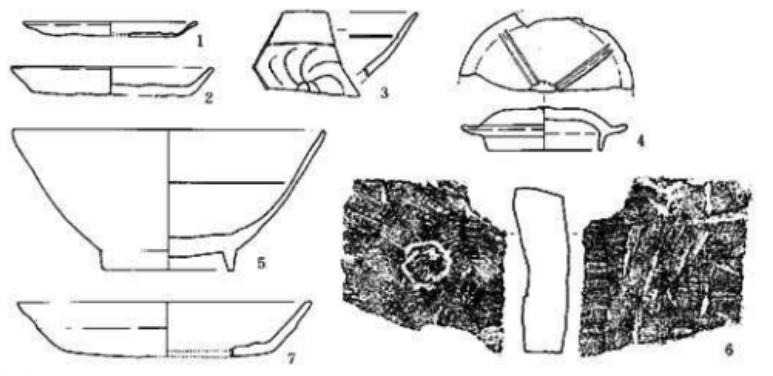
SK-39 (Fig.50・51)

この土壙からは、ヘラ切りの土師器とごく少数の白磁を検出し、糸切り土師器および青磁は認められない。土壙埋土の上層（遺物注記には上層はないが、「下層」と注記されているもの以外を上層とする）と下層出土品との相違は見出しがたいが、分けて述べる。

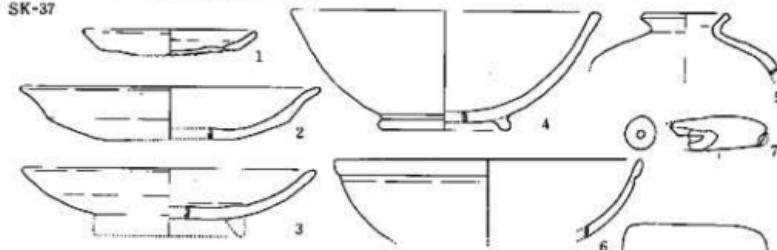
〔上層〕 実測できる個体数は下層に比べて少ない。1~4は土師器皿で、口径0.9~9.7cm、体部内外面はヨコナデ、内底はナデで、外底には段差のつくほどの板状圧痕がみられる。1と4では口縁上端面を平坦につくっている。5~8の丸底壺の法量は、口径14.9~15.4cmの間で、内面はヨコナデ後に磨きが施されているが、口縁下の凹部にはヨコナデ痕が残っている。外面の調整は口縁付近がヨコナデ、その下には指頭痕がつき、底部は板状圧痕がかなり強くついている。内面のいわゆるコテ痕は明瞭に残り、1.5~2cm間隔で、7では内底部まで認められる。8は、器高も低く、底部も平底に近い形態であるが、調整方法はほかの丸底壺と変わらない。6は他の器形に比較して口縁の開きが小さく、器高も3.7cmと高い。23の白磁碗は上層の出土で、いわゆる邢州窯様式の小型玉縁口縁であり、折り返して密着させている。この他に、白磁皿の小片がある。

〔下層〕 この層から検出した土師器もすべてヘラ切りである。9~13の皿は上層出土品と相違は認められず、調整も同じである。9や12の内底には強いナデがみられ、凹凸ができる。11を除いて、外底に板目がみられ、10の底部の器肉は非常に薄い。口径は9cmの後半が中心であり、上層とともに10cm以上のものや、逆に9cm前後の大きさのものは少ない。14~21の

SE-36



SK-37



SE-60

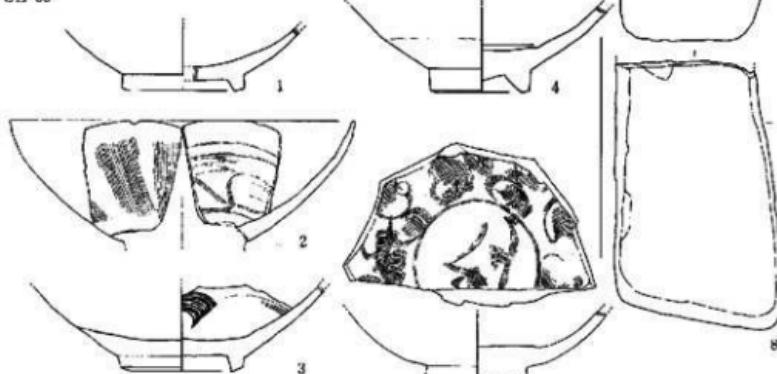


Fig.49 第36・60号井戸および第37号土壤出土遺物実測図

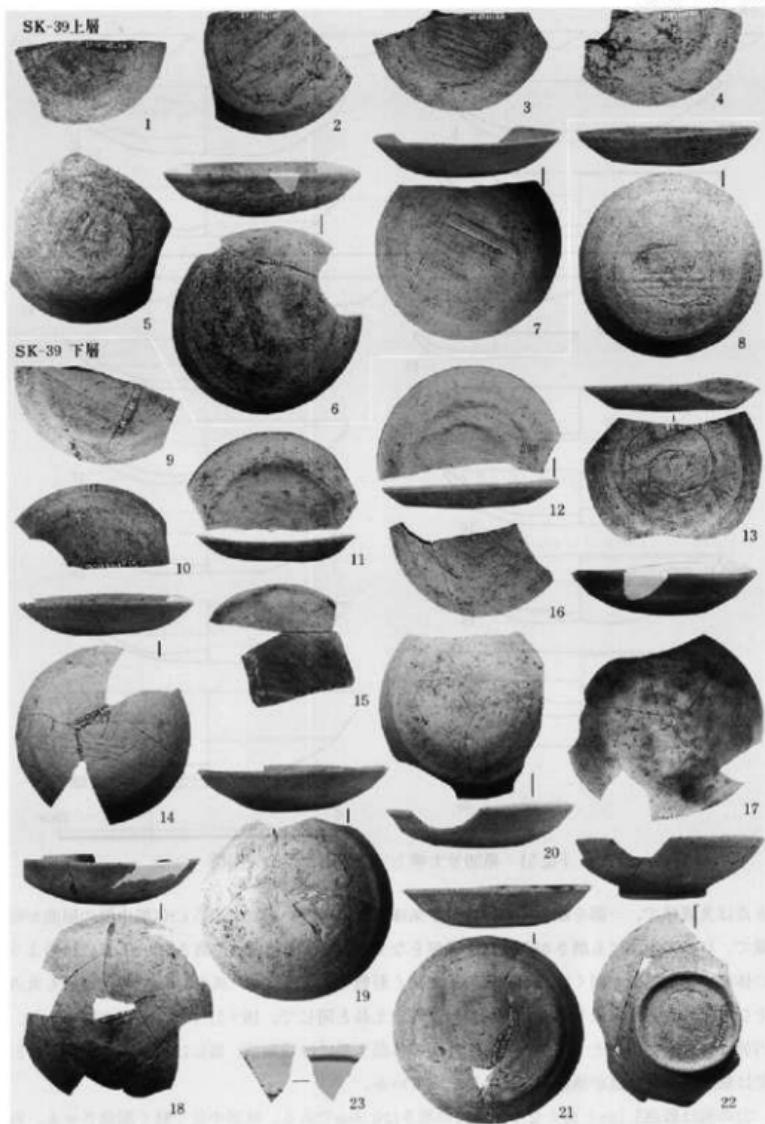


Fig.50 第39号土壤上・下層出土遺物

SK-39 上層

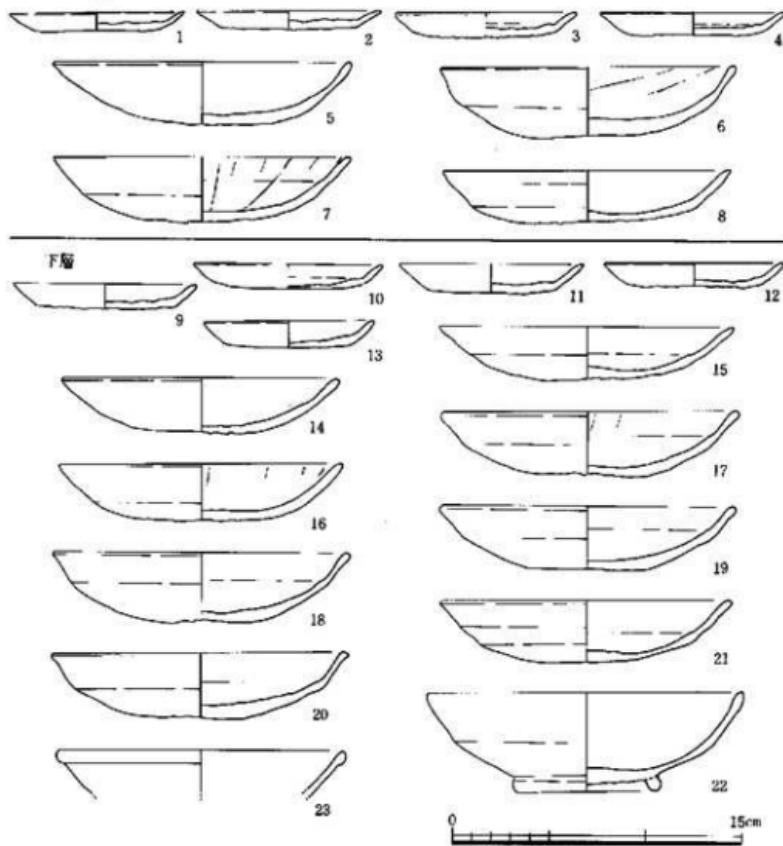


Fig.51 第39号土壤上・下層出土遺物実測図

8点は丸底壺で、一部を除いて口縁の開き気味のものが多い。20のように体部中位の屈曲が明瞭で、口縁の上端にも磨きがみられ、平坦をなす器形（口径15.4cm、高さ3.4cm）と、14のように体部中位の屈曲が弱く丸底からそのまま開く形態（口径14.3cm、高さ3.0cm）で、口唇も丸みをなすものがあり、後者が多い。調整は上層出土品と同じで、16・17ではコテ痕が認められ、内面はヨコナデのあとヘラ磨きされ、外面の体部下半には指頭痕、底には板状圧痕がつき、21では粘土紐の接合痕が渦巻状によくのこっている。

22の楕は器高5.1cmと高くなく、高台の高さは0.8cmである。体部中位で軽く屈曲させる。内

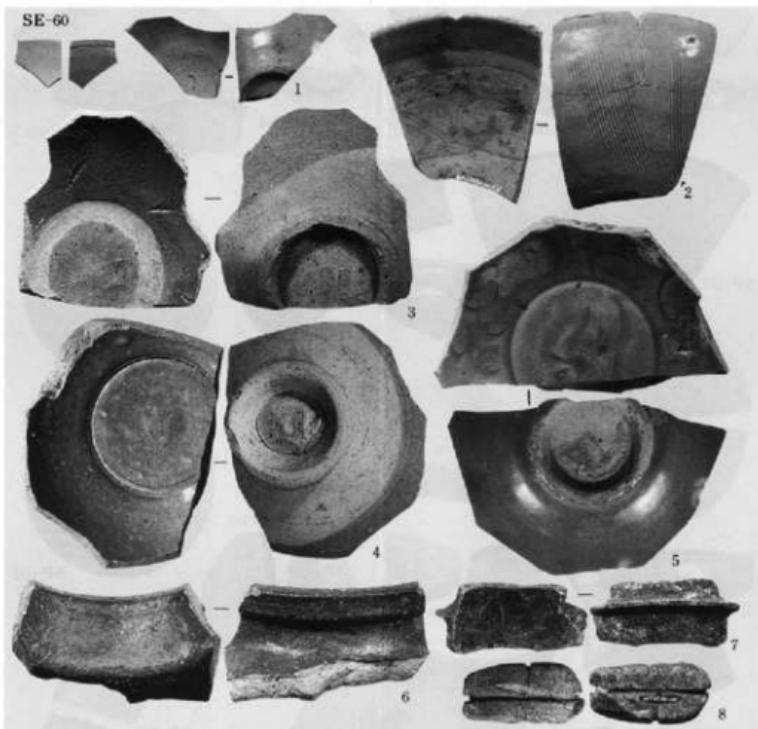


Fig.52 第60号井戸出土遺物

外面にミガキ痕があるが、胎土中に石英粒が多く、器面が荒れており判然としない。外底中央に線刻で×がみられる。

これらの出土土師器からみて、上層、下層ともに、時期差は認められず、11世紀末～12世紀初めと考えたい。

SE-60 (Fig.49・52)

1は白磁碗で、黄白色の精製土に透明釉が滑らかに高台上までかかる。3の青磁碗は粗製で黄色釉が体部中位までかけられ、荒い補により施文される。4の釉薬はガラス質透明で黄緑色である。5は構文を多用する竜泉窯青磁で、黄緑色透明釉が疊付から外底まで垂れている。7は小形の石鍋、8は石鍤、いずれも滑石製。



Fig.53 各柱穴出土遺物(1)

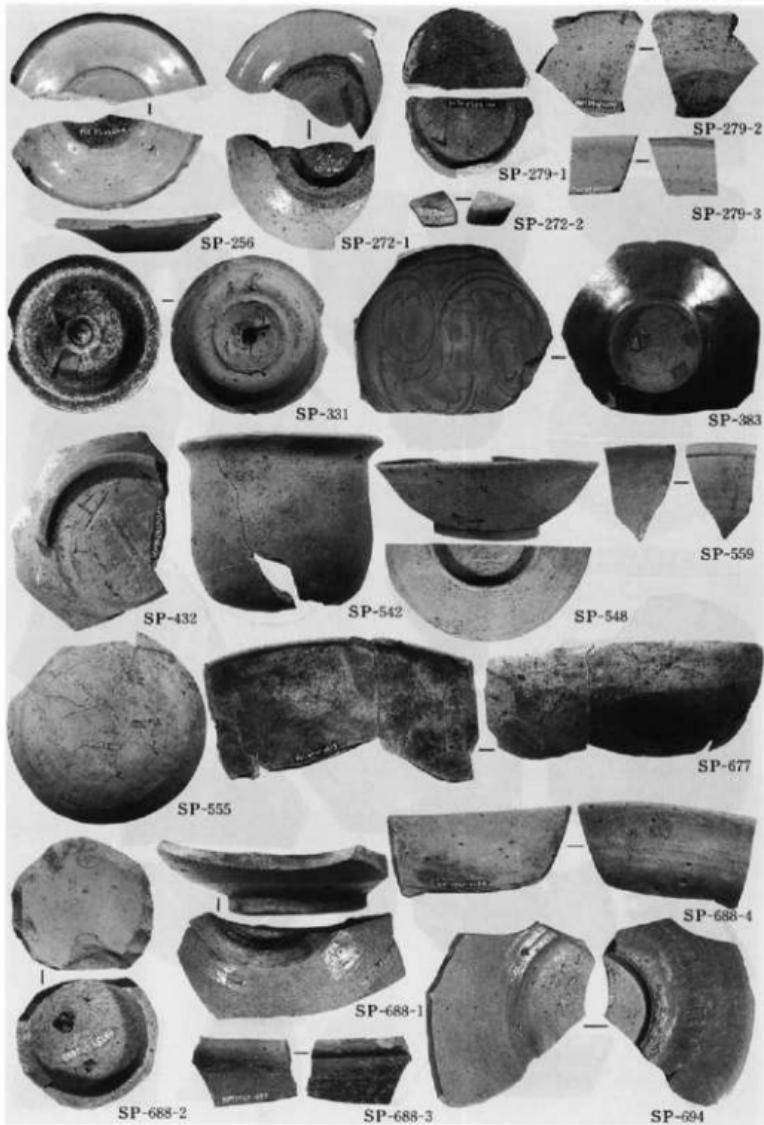


Fig.54 各柱穴出土遺物(2)



Fig.55 第1～4面出土遺物

5. 第5面の調査

第5面は、第4面の層群を除去した暗茶褐色シルトから砂層の上面である。この層は調査区全域に広がり30~70cmの厚さをもち、南へわずかに傾斜している。なお、第4面層群との境は明瞭である。第5面検出面の標高は3.8~3.4mである。

この面での遺構は検出できなかった。上面から20cm前後の厚さに、7~8世紀の遺物が含まれている。なお、隣接する第65次調査では掘立柱建物が検出されており、本調査区は広場的空間として使用されていた可能性もある。

1) 出出土器 (Fig.57~60)

第5面では、須恵器の环蓋・环身・高坏・甕などと、土師器の环蓋・环身・高坏・甕・瓶・移動式竈・製塙土器・焼塙土器と漢式土器?が出土した。

1~13は蓋形上器で、9が土師器、他は須恵器である。1~8は环蓋、10~12は甕、9~13は甕の蓋か。1~5は有返し、6~8は無返しの环蓋で、1~3~7は天井につまみをもっている。2~5の天井部にはヘラ記号があり、7の天井部には「上□□」の墨書がみられる。1~3~5は、受け部径15cm、10.4cm、14cm、器高4.2cm、3.2cm、4.4cm。6~8は口径14.4cm、16cm、12.8cm、器高2.6cm、2.6cm、2.5cmである。10~12は短頸甕の蓋と考えられ、11の天井部には「ナ」の浅いヘラ記号がある。10~11の口径は9cm、12は12cm。器高2.8cm、3.4cm、3.9cmである。9~13は口径が18cm、21cmと大きく、大形甕の蓋か。9



Fig.56 出土和同開跡の口縁は無返しで端部は丸く仕上げている。13は%の破片で、盤の可能性もある。

14~19は受け部をもつ須恵器の环身で、14がもっとも高い受け部の立ち上がりをもっている。16~17の外底にはヘラ記号がみられ、17の内面から受け部にかけ墨痕がみられる。なお、18は赤焼きの須恵器である。受け部径は、14が15.2cm、15が12cm、16が11.6cm、17~18が11cm、19が11cm。器高は14が(4.6cm)、15が3.7cm、16が11.6cm、17が3.8cm、18が3.1cm、19が2.5cm。

20~26は高台付の須恵器坏で、26がもっとも高い高台を貼り付けている。26の外底にヘラ記号、21の見込みに当て具がみられる。口径は、20が12.8cm、21が14cm、22が13.8cm、23が9.6cm、24が11.2cm、25が9.2cm。器高は、20が4.35cm、21が3.75cm、22が4cm、23が4.15cm、24が4.45cm、25が3.7cm。

27~37は高坏で、36が土師器、他は須恵器である。37は坏の可能性もある。28は口径8.9cm、器高7.6cm、底径7.4cm。口径は、27が9.4cm、30が12cm、35が19cm、37が10cm。35の坏部は皿状をなし、大きく屈曲し直に短く立ち上がり口縁部となり、端部は平坦面をなしている。36は皿状をなす坏部を立ち口縁部を丸く仕上げている。口径24cm。

38~41は無高台の坏で、41は内黒の黑色土器である。38~40の内外面はナテ調整、41の内外

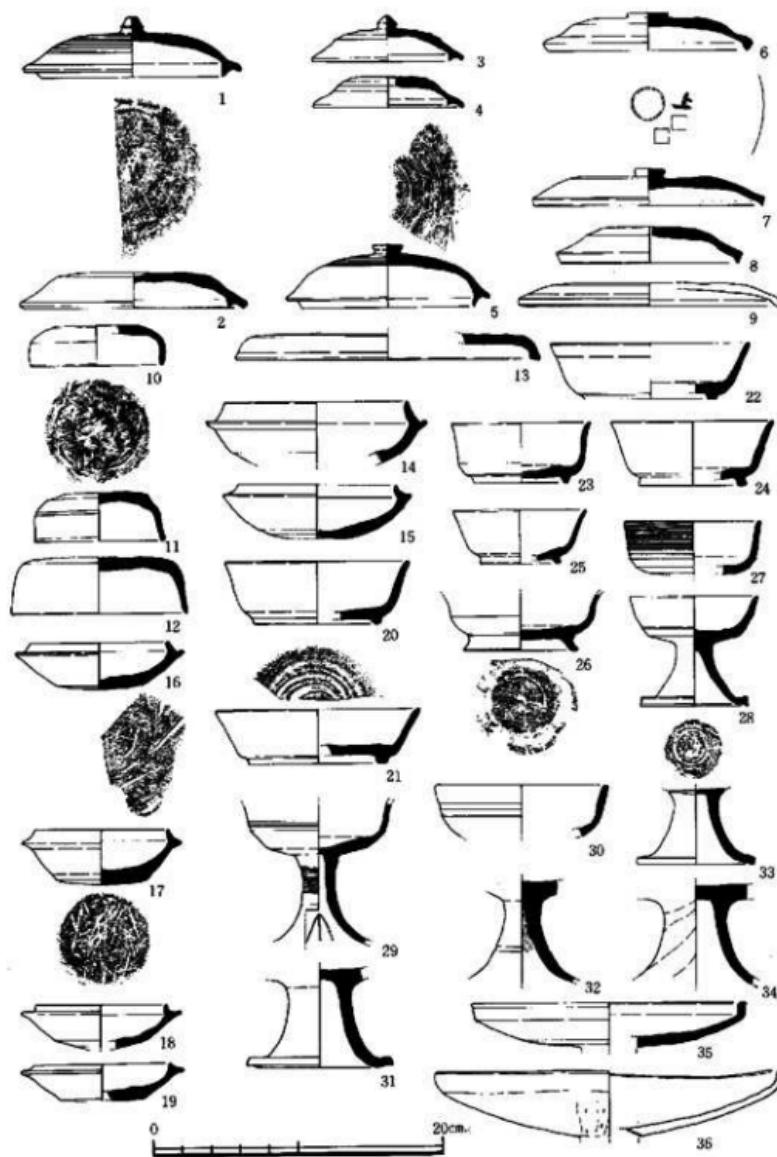


Fig.57 第5回出土土器実測図(1)

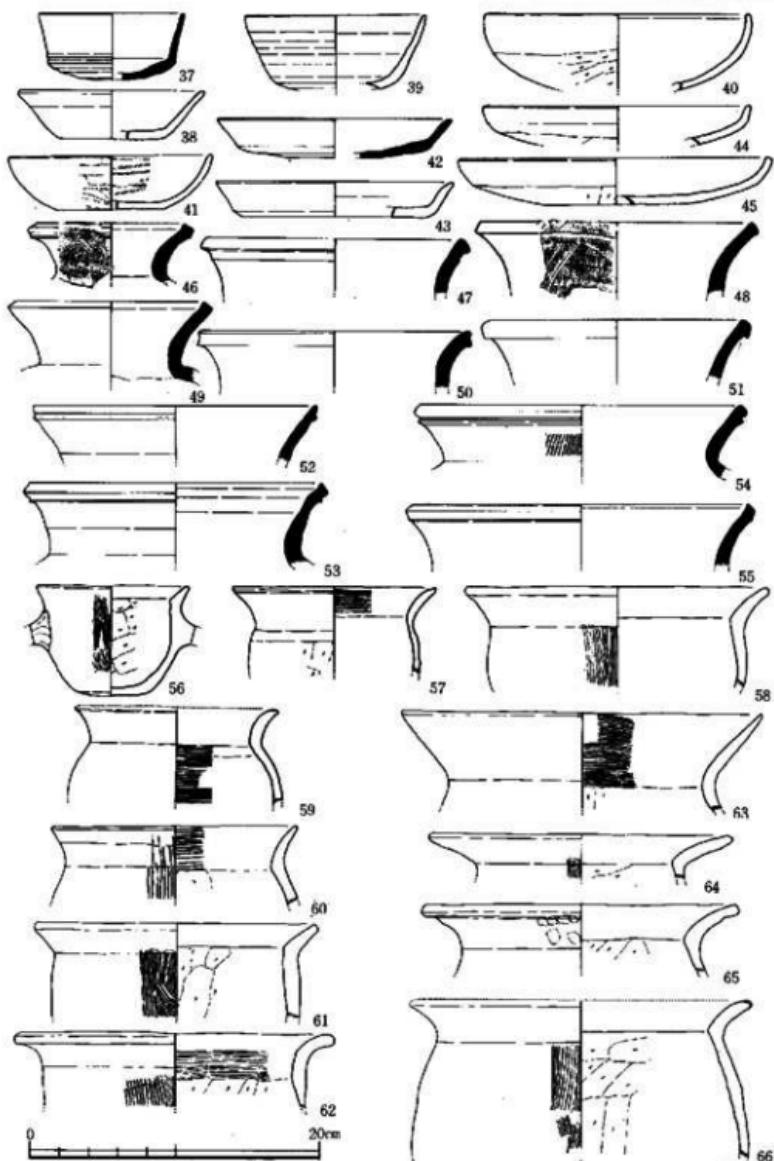


Fig.58 第5面出土土器実測図(2)

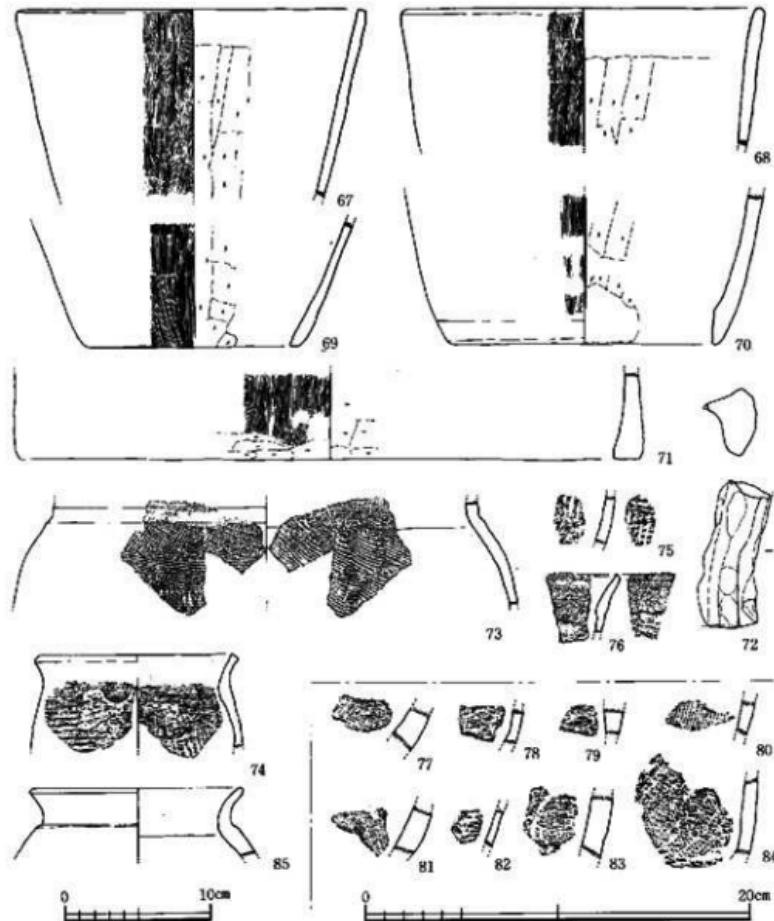


Fig.59 第5面出土器実測図(3)

面はヘラミガキが施されている。口径は38が12.8cm、39が12.4cm、40が18.6cm、41が14cm。器高は、38が3.4cm、41が3.75cm。

42~44は皿、45は盤で、42が須恵器、他は皿である。42は口径16.2cm、43は口径16.4cm、器高2.45cm。44・45の外底はヘラケズリ、口縁部は横ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。44は口径19.4cm、45は口径21.8cm、器高3.2cm。

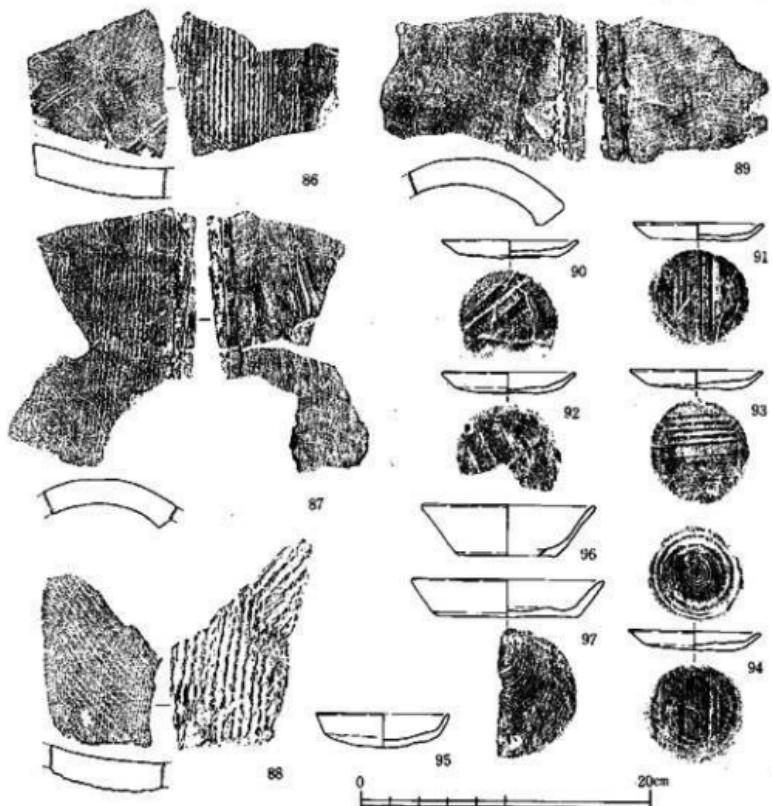


Fig. 60 第5面出土遺物実測図

46は横瓶か提瓶で口径11.4cm。頭部にヘラ記号がある。47～66は甕で、47・48が土師質須恵器（赤焼き）、49～55が須恵器、他は土師器である。48の頭部にはヘラ記号がある。口径は49が14cm、47が16.6cm、他の須恵器は 19.1 ± 0.5 cm。56は把手付で口径10.5cm、器高7.7cm。口径は57・59が14cmと小さく、58・61・62・64・65が21cm前後、63・66が24.5cm前後である。

67～70は土師器の瓶で、口径は67が24cm、68が25cm、底径は69が14cm、70が18cm。71・72は土師器の移動式竈である。

73～76は製塙土器、77～84は焼塙土器。74の口径は14cm。77～84の内面には布压痕（絹）があり、0.4～1.2cmの器壁がある。

85は口径14.6cmの甕で、器内外面とも橙色を呈し、胎上には雲母微粒を多量に含み、堅緻で

焼成も良い。漢式土器か。

90~94は外底に板状压痕、77は糸切り底の皿で、41・95・96とともに混入品と考えられる。

2) その他の出土遺物 (Fig.56・60)

土器のほかに、輪の羽口、土錐などの土製品、瓦類、砥石・磨石などの石製品、釘などの鉄製品、少量の鉄

鋤と「和同開珎」

1点が出土した。

「和同開珎」
は、開の字体が
「間」となって
おり、径25mm、
最大厚1.6mmで
ある。

86・88は平瓦、
87・89は丸瓦。

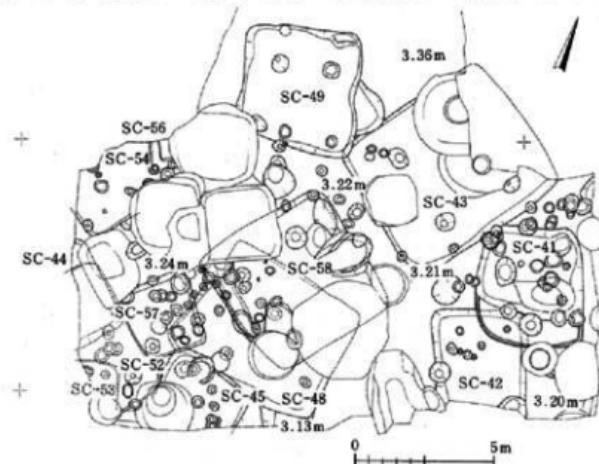


Fig.61 第6面遺構配置図



Fig.62 第6面遺構検出状況

6. 第6面の調査

第6面は、暗茶褐色シルト～砂層を除去し、調査区全域に広がる暗褐色砂層中の標高3.5～3.1mが遺構検出面である。第5面相当層を除去し、暗褐色砂層になると、古墳時代後半期の須恵器などの遺物がまとまって含まれている。しかし、遺構の平面形が把握できないため、暗褐色砂層検出面から約10cm前後除去した。この面で古墳時代後半期の遺構を検出した。なお、暗褐色砂層上面も第6面遺構検出面もやや南に傾斜している。暗褐色砂層は上面から20cm前後の厚さをもち、この層を除去すると黄褐色砂層となり、黄褐色砂層に掘り込んだ形で古墳時代初期の遺構を検出した。

検出遺構としては、古墳時代後半期の竪穴式住居址（以下、住居址とする）7基、同前半期の住居址5基がある。以上のはか、土壙・溝・柱穴を検出した。

1) 竪穴式住居址と出土遺物 SC-41 (Fig.63・65・66)

本住居址は調査区の東側に位置し、SC-42を切り、SC-43に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、東北4.3m、南北3.8mを計る。50～60cmの遺存で、南側に0.7～1.2mのベットが痕跡的に遺存していた。床面は皿状をなし、壁は緩く立ち上がっている。主柱穴は4本である。明灰色砂・暗褐色砂・明褐色砂を覆土とし、最上層の明灰色砂中に多量の遺物が含まれていたほか、遺物は床面まで出土した。出土土器 (Fig.64・67～69)：土師器の甕・壺・高环・环がある。

1～22は甕で、いずれも球状の胴部から屈曲して外反する口縁部をもつもので、器壁は薄く仕上げられている。20は屈曲部

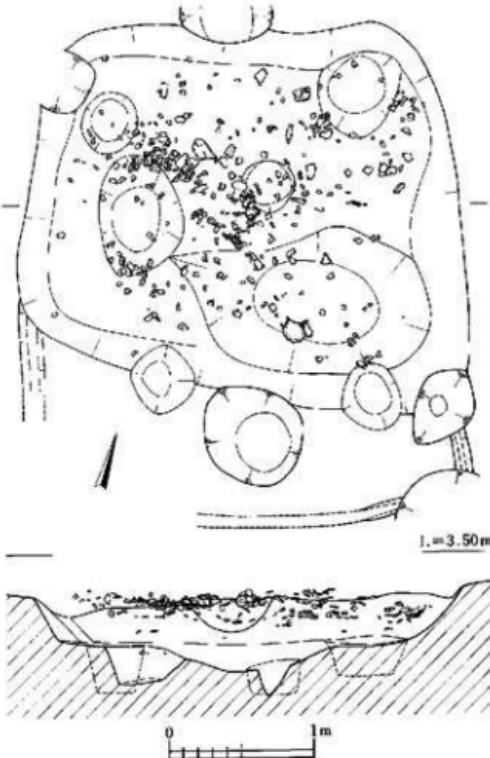


Fig.63 第41号竪穴式住居址 (SC-41) 実測図

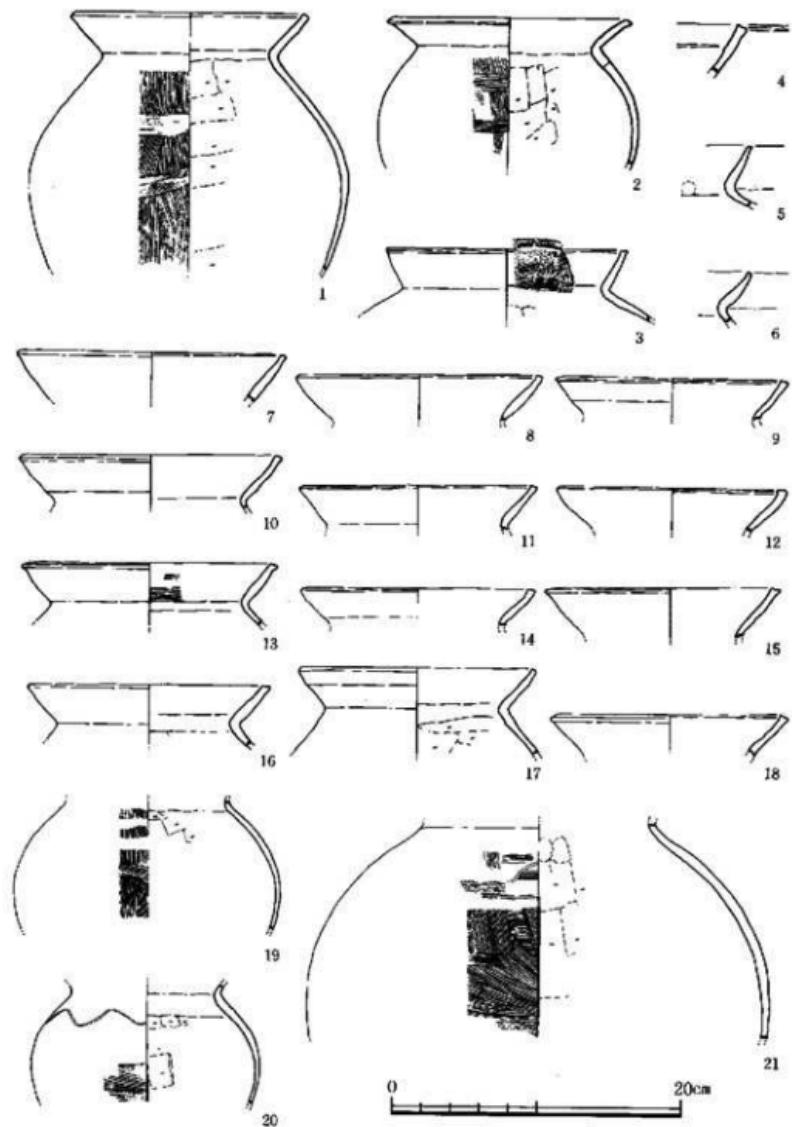


Fig.64 第41号竖穴式住居址出土土器实测图(1)

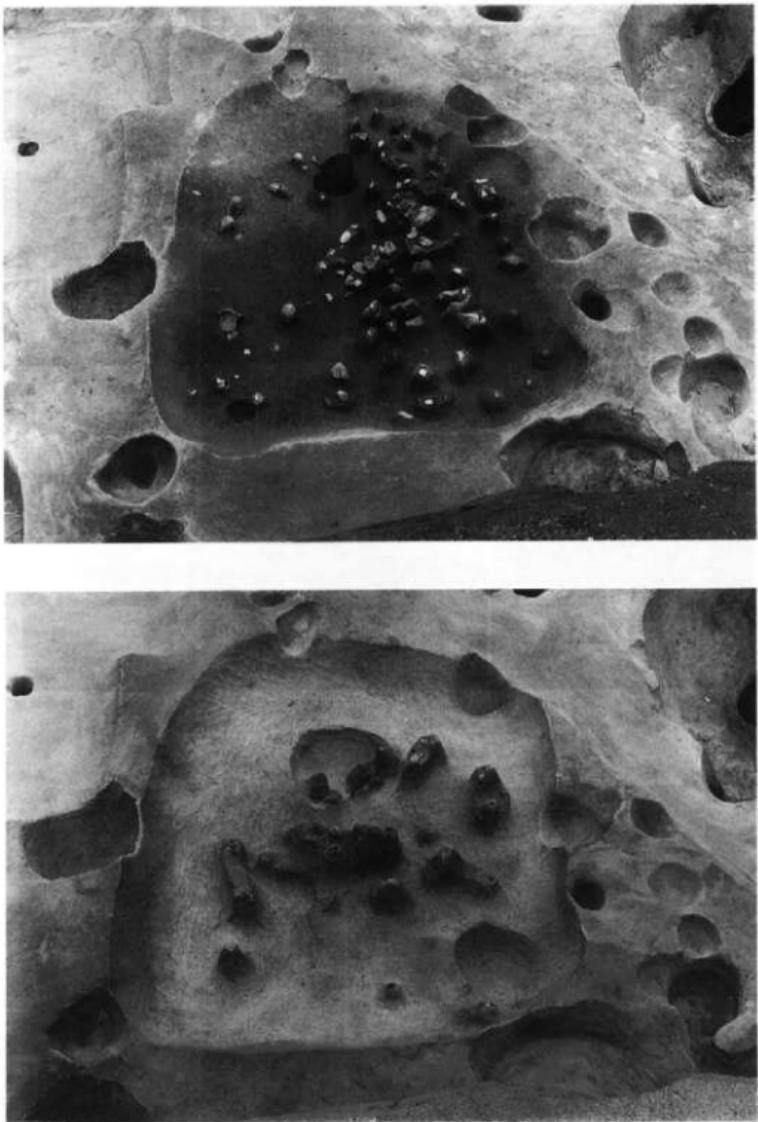


Fig.65 第41号竪穴式住居址遺物出土状態(1)

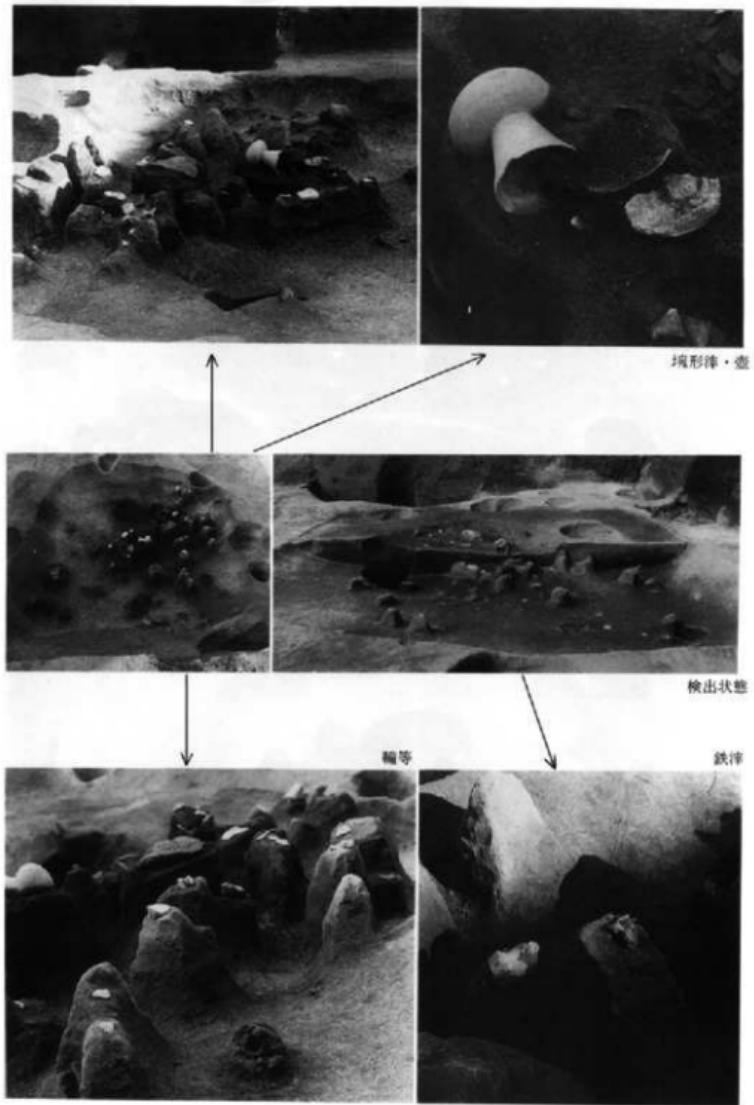


Fig.66 第41号竪穴式住居址遺物出土状態(2)

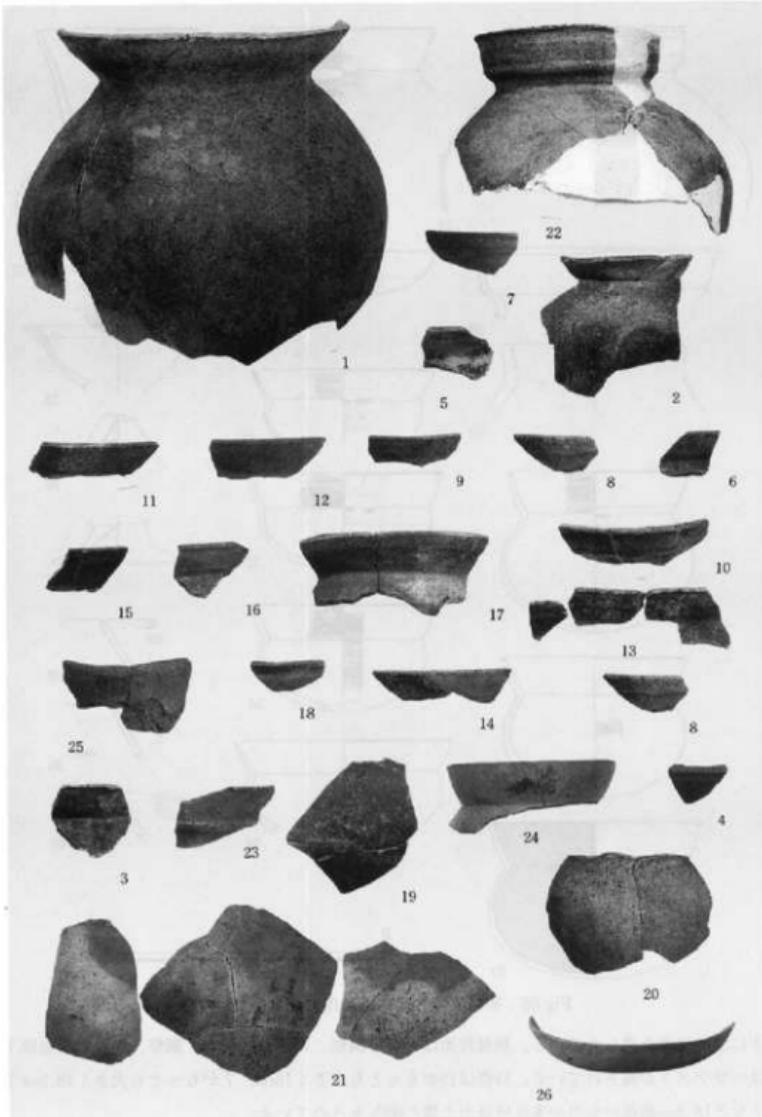


Fig.67 第41号竪穴式住居址出土變形土器

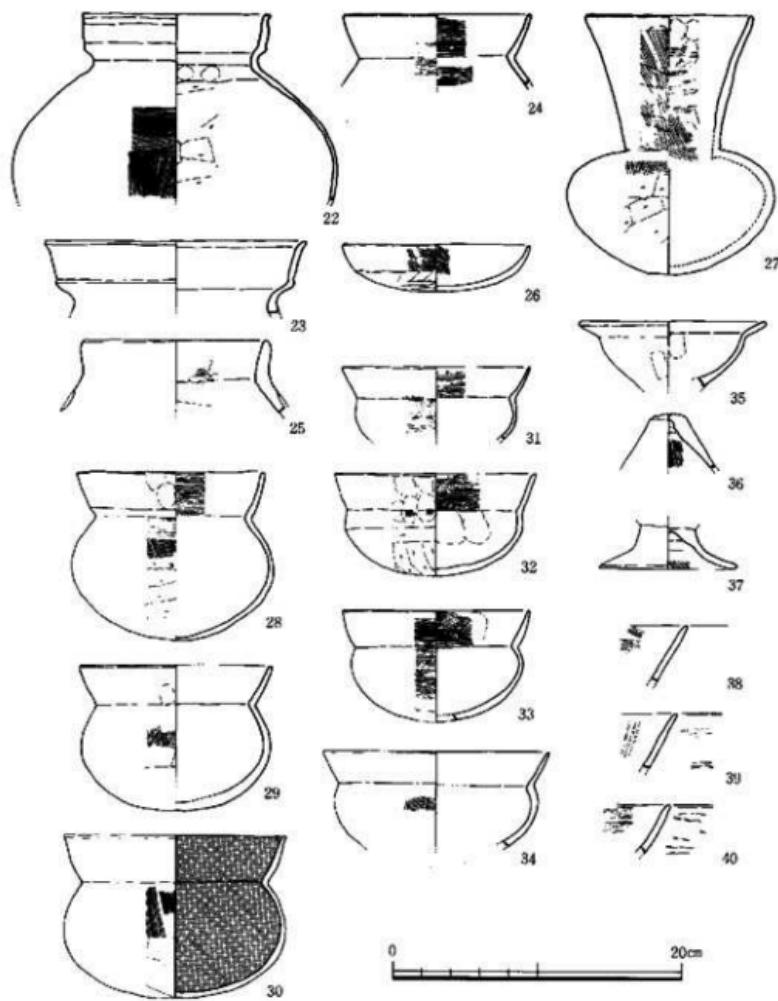


Fig.68 第41号竪穴式住居址出土土器実測図(2)

下に波状沈線を巡らせている。胸部外面はハケ目調整、口縁部は横ナデ調整、内面の屈曲部下はヘラケズリが施されている。口径は15がもっとも小さく15cm、7がもっとも大きく18.5cmで、1など16.5cm前後のものが本住居址出土窯の60%を占めている。

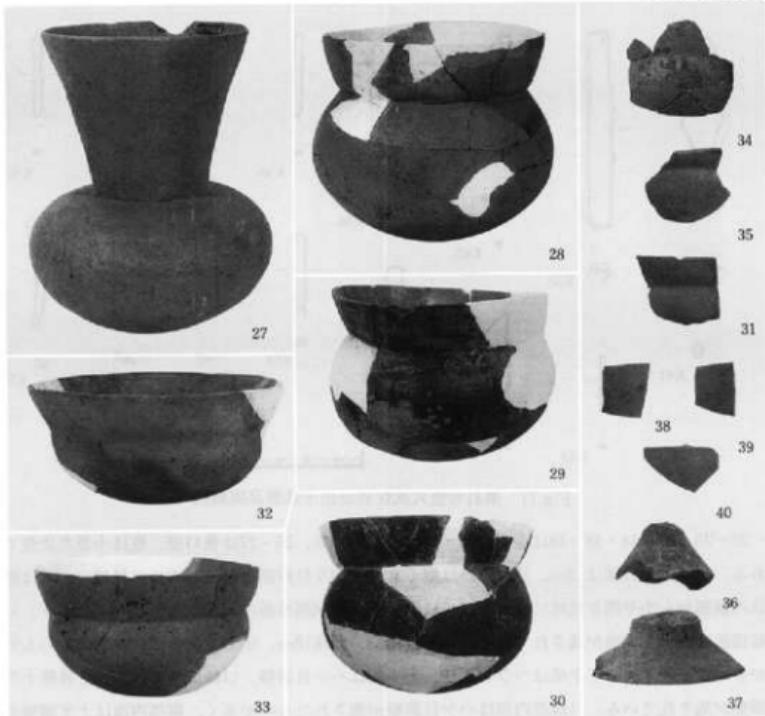


Fig.69 第41号竪穴式住居址出土土器

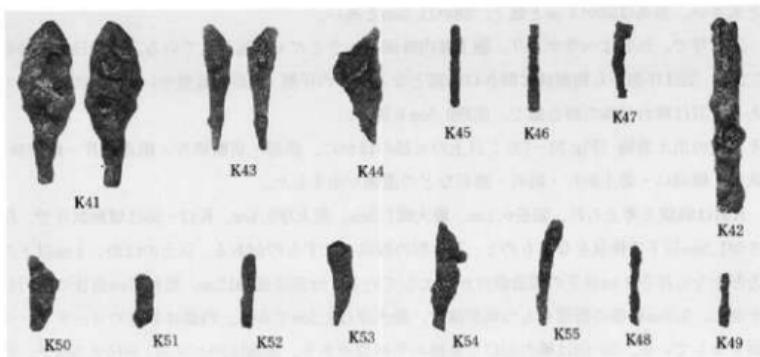


Fig.70 第41号竪穴式住居址出土鉄製品

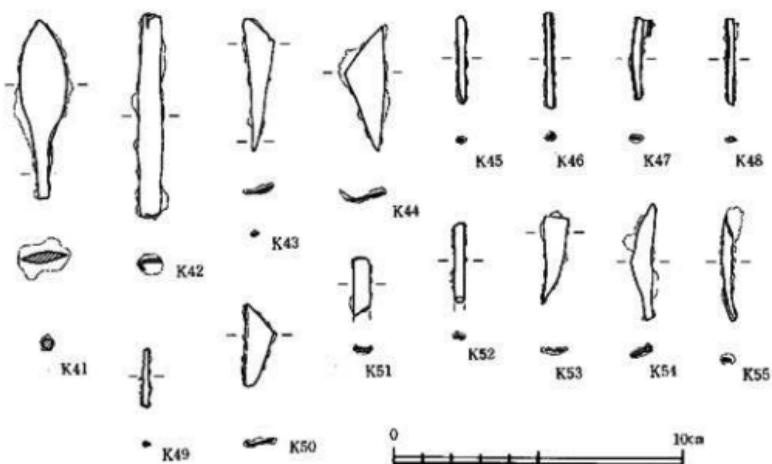


Fig.71 第41号竪穴式住居址出土鉄製品実測図

22~25・27~34・38~40は壺で、22・23は二重口縁壺、25・27は直口壺、他は小型丸底壺である。22・23の口径は13cm、18cm。25は短く立ち上がり口縁部となるもので口径13cm。27は球状の肩部からやや開き気味に長く延びて口縁となり、肩部外面の肩部から下はヘラケズリ、口縁端部は横ナデ調整が施されている。口径11.5cm、器高18cm。小形丸底壺は比較的大きいものが多く、肩部下面の下半部はヘラケズリ、上半部はハケ目調整、口縁部外面は指揮え後横ナデ調整が施されている。口縁部内面はハケ目調整が施されたものが多く、肩部内面はナデ調整で仕上げている。30の内面は赤色顔料が塗布されている。口径は31が13cmと小さく、34が15.6cmと大きい。器高は32が7cmと低く、28が11.5cmと高い。

26は環で、外底はヘラケズリ、肩上部内外面はヘラミガキが施されている。口径13cm、器高3.2cm。35は環部から朝顔状に開き口縁部となる高环の环部（小形丸底壺か）で、口径13.5cmである。37は脚台付鉢の脚台部で、底径9.5cmを測る。

その他の出土遺物（Fig.70~73）：以上の土器のはかに、鐵器・切断鉄片・鍛造鉄片・塊形滓、鉄滓・繩羽口・碧玉剥片・敲石・磨石などの遺物が出土した。

K41は鐵鎌と考えられ、器長6.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cm。K42~55は切断鉄片で、厚さが1.5mm以下で棒状をなすものと、三角形の板状をなすものがある。以上のはか、1cm以下の方形をなし厚さ1mm以下の鍛造鉄片が出土している。Sr56は長軸12cm、短軸11cm前後の楕円形を呈し、5.5cm前後の器厚をもつ塊形滓で、最大厚は2.3cmである。内面は黒色のコーティング面をなしている。59~60は繩の羽口で底面の平坦部があり、器高は59が8cm、60が6.5cmで、孔

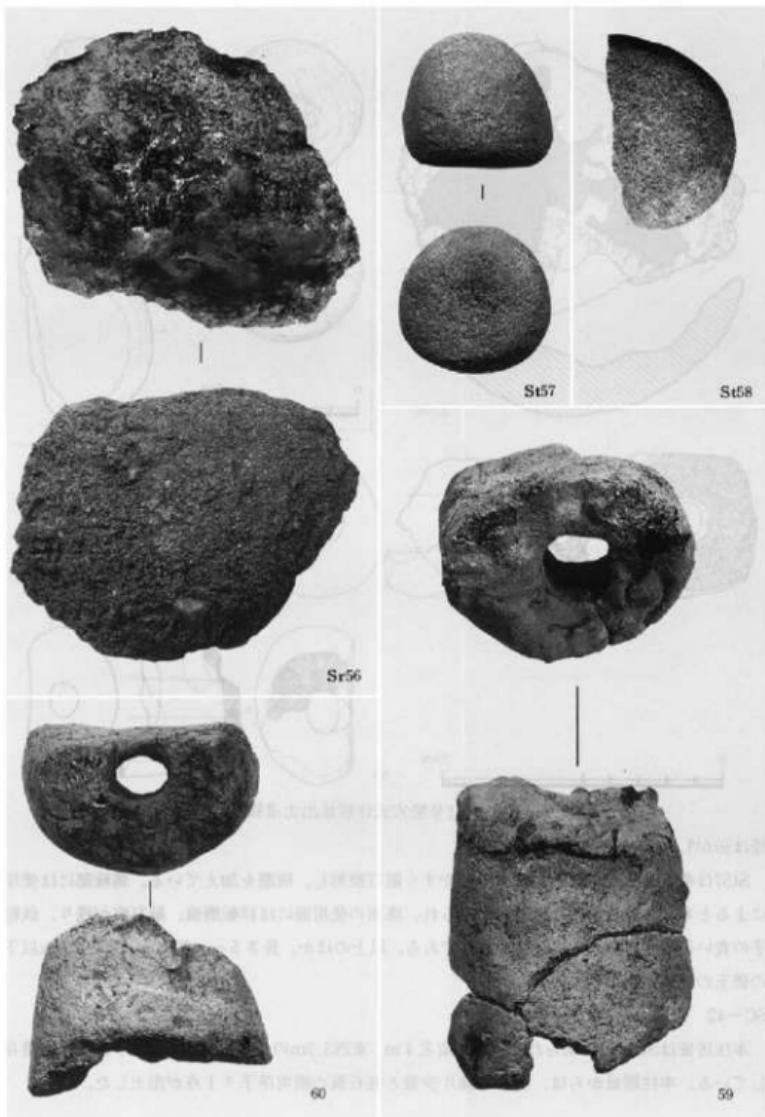


Fig.72 第41号竪穴式住居址出土遺物

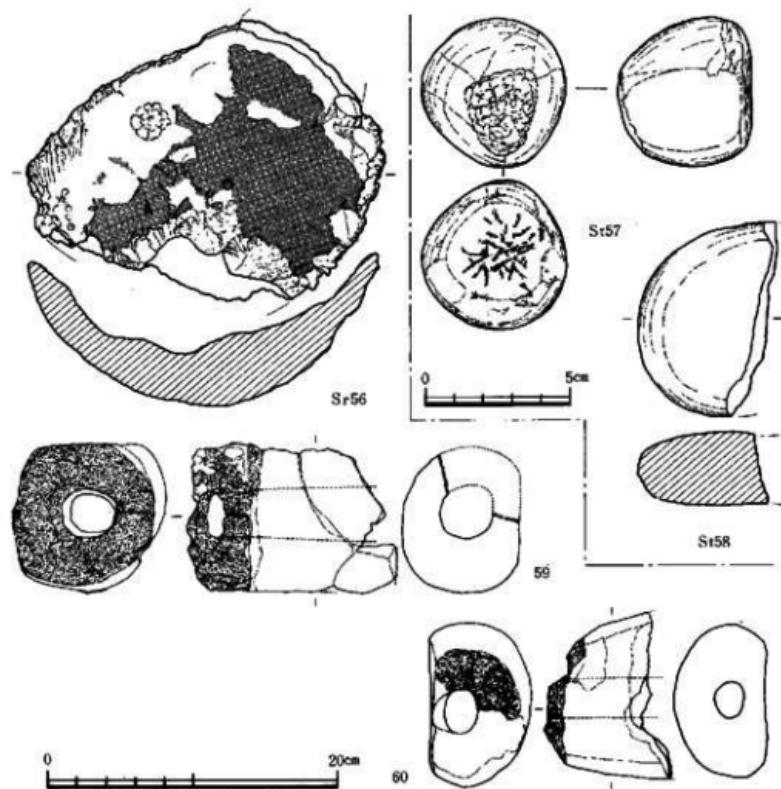


Fig.73 第41号竪穴式住居址出土遺物実測図

径は59か3.6cm、60か2.3cm前後である。

St57は拳よりやや小さめの礫を持ちやすく敲打整形し、研磨を加えている。側縁部には使用によると考えられる手擦れ摩耗痕がみられ、底面の使用面には回転磨痕、敲打痕が残り、鉄粒子の食い込みがみられる。St58は磨石である。以上のほか、長さ5cm、幅2cm、厚さ0.6cm以下の碧玉の剝片が出土している。

SC-42

本住居址はSC-41に切られている。南北4m、東西3.5mの隅丸長方形を呈し、35cm前後遺存している。本住居址からは、土器の細片少量と軽石製の網用浮子？1点が出土した。

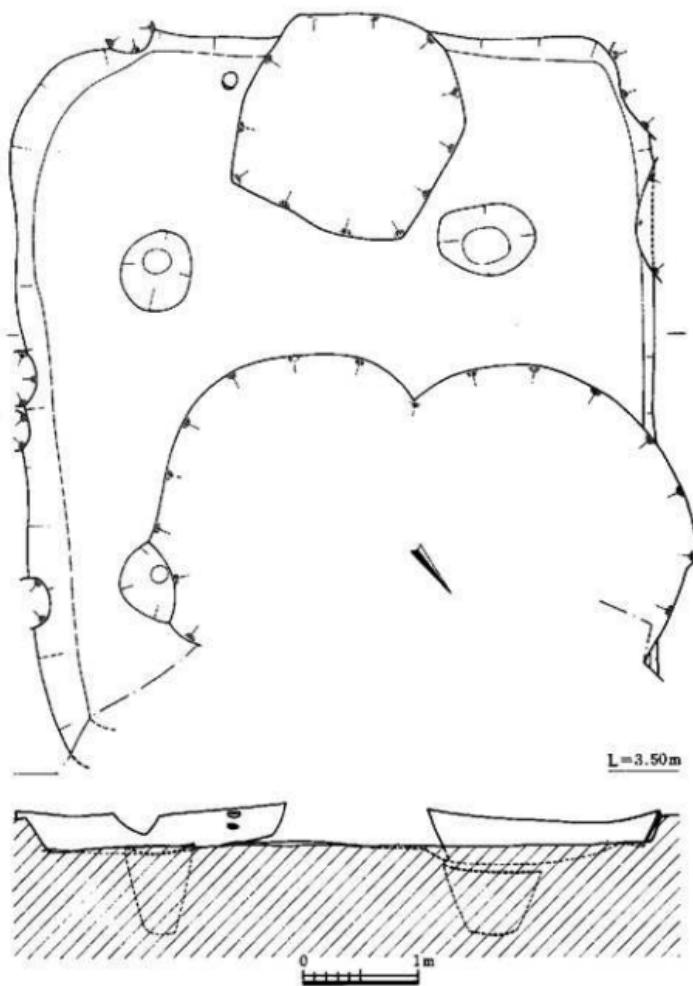


Fig.74 第43号竪穴式住居址 (SC-43) 実測図

SC-43 (Fig.74)

本住居址はSC-41を切り、SE-36・60、SC-49に切られている。北東部が調査区外に延びているが、長軸6.4m、短軸5.5mの隅丸長方形を呈す住居址で30cm前後遺存している。床面はほぼ

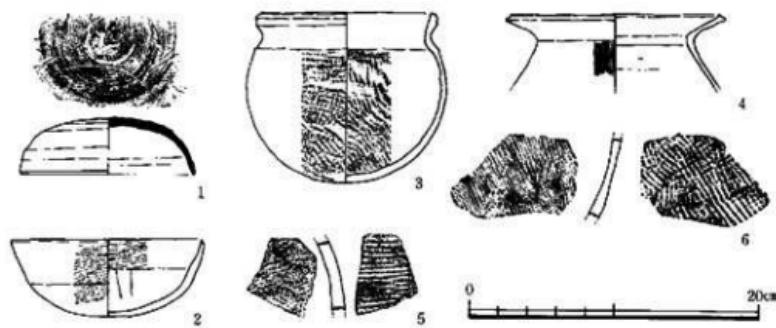


Fig.75 第43号竪穴式住居址出土土器実測図

平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がり主柱穴は4本で、北側辺に竈をもつと考えられる。

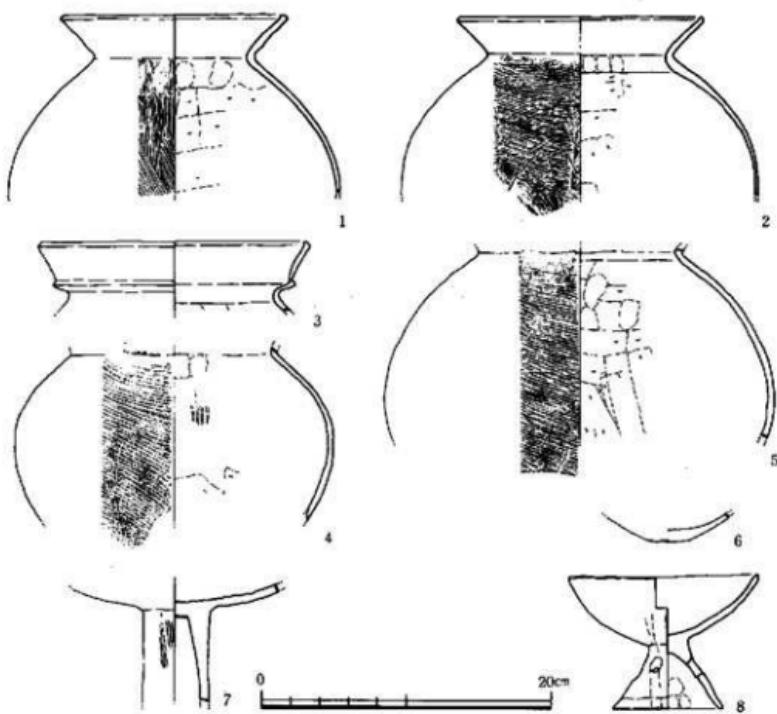


Fig.76 第44号竪穴式住居址出土土器実測図

出土遺物 (Fig.75)：本住居址からは、少量の土器と石製品 2 点が出土した。

1 は須恵器の壺蓋で、天井部にヘラ記号があり、口径 13cm、器高 4cm である。3・5・6 は外間に叩き痕があり、内面に当て具痕が残る土師器の甕で、3 は製塙土器の可能性がある。3 は口径 13cm、器高 11.7cm。2・4 は古式土師器で混入品。他に釣用軽石製浮子などがある。

SC-44 (Fig.77)

本住居址は調査区の西側に位置し、SC-52・57 に切られしており、大半は調査区外に伸びている。隅丸方形を呈する住居址で、30cm 前後遺存している。床面は平坦である。

出土遺物 (Fig.76・78)

：本住居址では、上から床面までむらなく遺物が出土した。出土遺物としては、土師器・石器・鉄滓などがある。

1～6 は甕で、3 が二重口縁をなすほかは球状の胴部をもち屈曲して開き口縁部となるもので、1 の胴部外面はハケ目調整、2・4～6 の胴部外面は叩きが

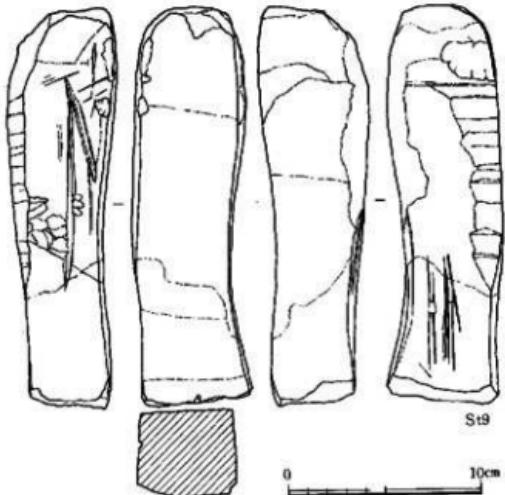


Fig.78 第44号竪穴式住居址石器実測図

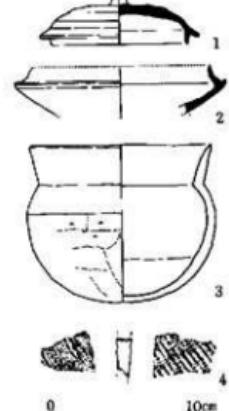


Fig.79 第44号竪穴式住居址出土土器実測図

施され、屈曲部下の内面はヘラケズリが施されている。1~3の口径は15.6cm、17cm、18.8cmである。7・8は高环で、8の脚部には焼成前の穿孔がある。8の口径は13cm、器高9.1cm。St 9は断面方形の仕上げ砥石で、4面を使用している。

SC-45 (Fig.79)

本住居址は調査区の西南部に位置し、SC-48を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北辺に竈をもち、両側は調査区外へ延びている。35cm前後の遺存で、床面はほぼ平坦で、竈は角礫を灰色粘土でくるみ造られていると考えられるが破壊されている。

出土遺物 (Fig.79)：本住居址からは、須恵器の壺、土師器の壺・甕、石製品が出土した。

1は天井部につまみをもつ円筒形の壺蓋で、受け部径11cm。2は受け部をもつ壺身で、受け部径(14.6cm)。3は小形丸底甕、4は胴部外面に叩きをもち、内面に当て具痕が残る土師器の甕である。3は前時期のもの。以上のはか石錐・磨石などが出土している。

SC-48 (Fig.80)

本住居址は調査区のほぼ中央部に位置し、SD-59を切り、SC-45・57・58などに切られている。長軸5.5m、短軸4.2m前後の隅丸長方形を呈し、30cm前後遺存している。主柱穴は2本で、ほぼ平坦な床面をもち、壁はやや開き気味に立ち上がっている。遺物は検出面から床面までむらなく出土した。

出土土器 (Fig.81~83)：本住居址からは、甕・壺・壺・高环・脚台付鉢などが出土した。

1~34は、球状をなす胴部から屈曲して開き口縁部となる甕である。25のみは口径11cmの小形の甕で、異なる器形である。口径は17が14cmと小さく、3・4が18cmと大きい。16cm前後のものが多い。16の口縁部には赤色顔料(朱)が塗布されていた。

35~43は甕で、35・36は二重口縁甕、37~41は小形丸底甕、42・43は直口甕である。35は、球状をなす胴部外面にはコの字突帯下に横描き波状文、その下に斜めハケ目調整、横ハケ目調整、縦ハケ目調整が施され、肩部に暗文がある。口縁部外面は端部下と屈曲部に浮文があり、屈曲部の浮文下には横描き波状文で施文している。内面は胴部下半がヘラケズリ、胴上部は指押え後ナデ調整、口縁部はナデ調整後暗文が施文されている。口径31cm、器高(41cm)。36は甕の可能性もある。37~41は小

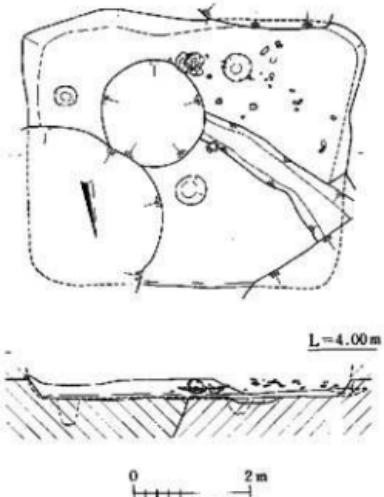


Fig.80 第48号竪穴式住居址 (SC-48) 実測図

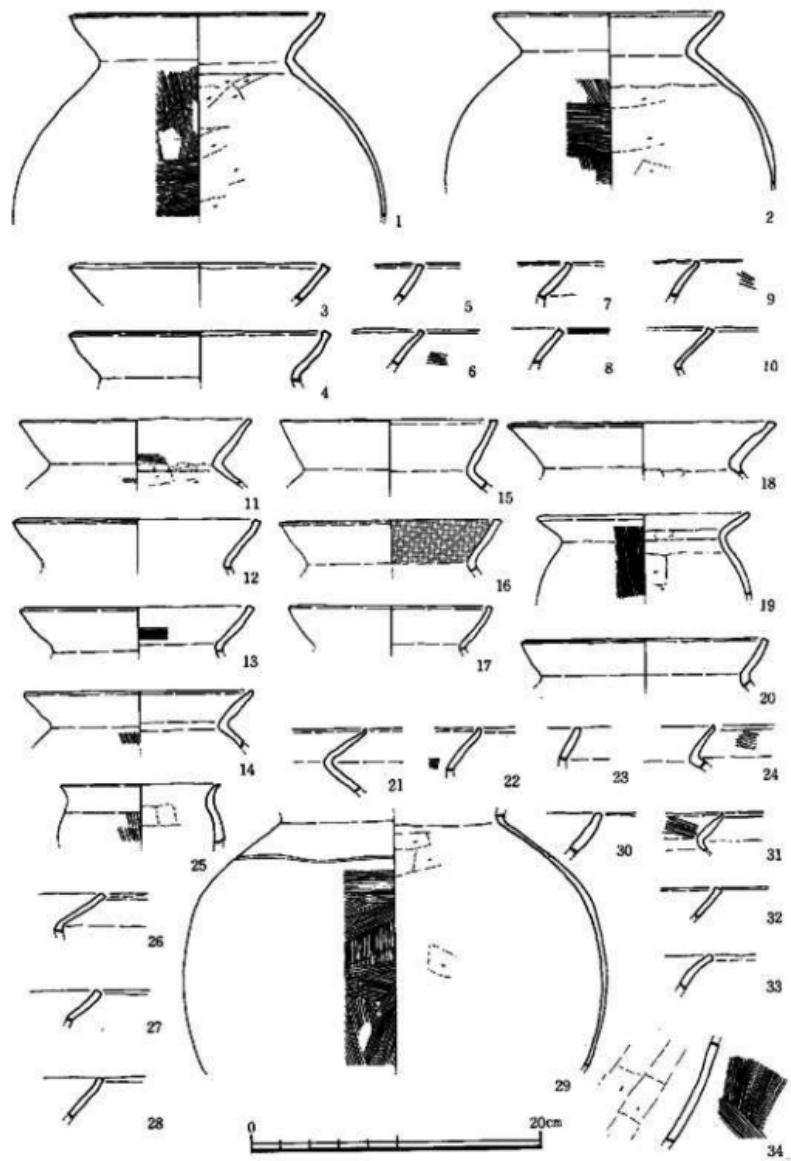


Fig.81 第48号竪穴式住居址出土土器実測図(1)

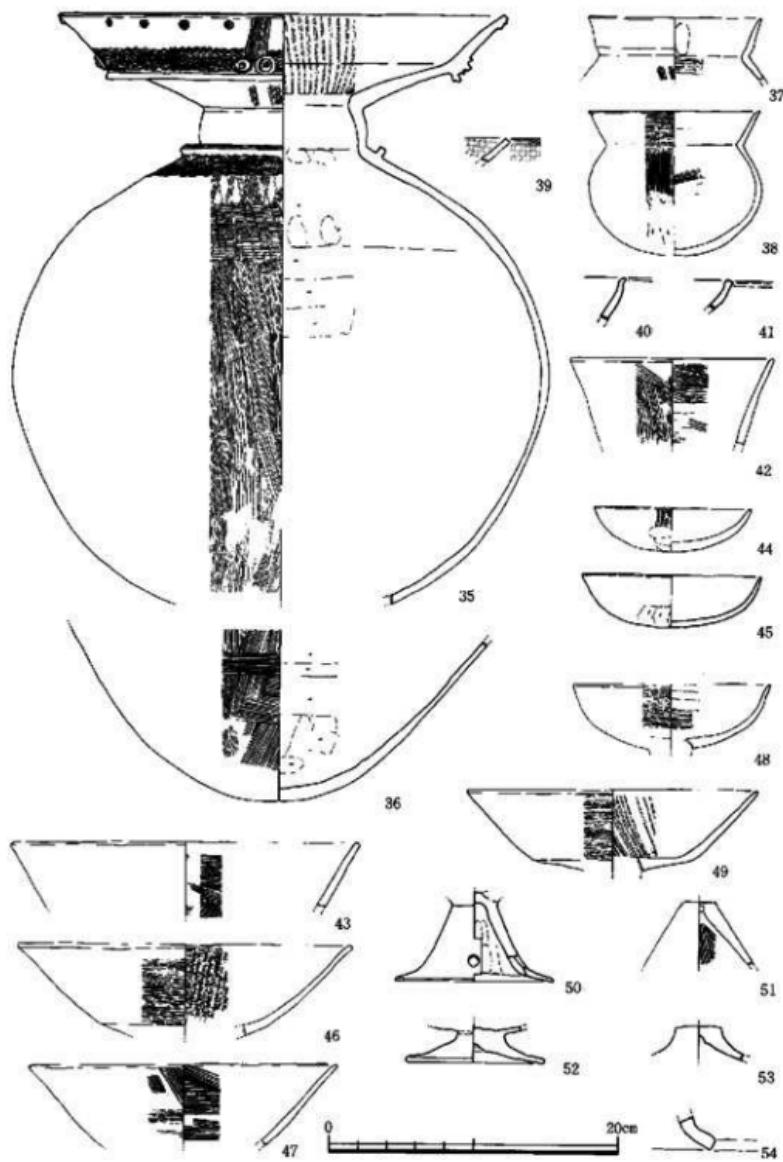


Fig.82 第48号竖穴式住居址出土上器实测图(2)

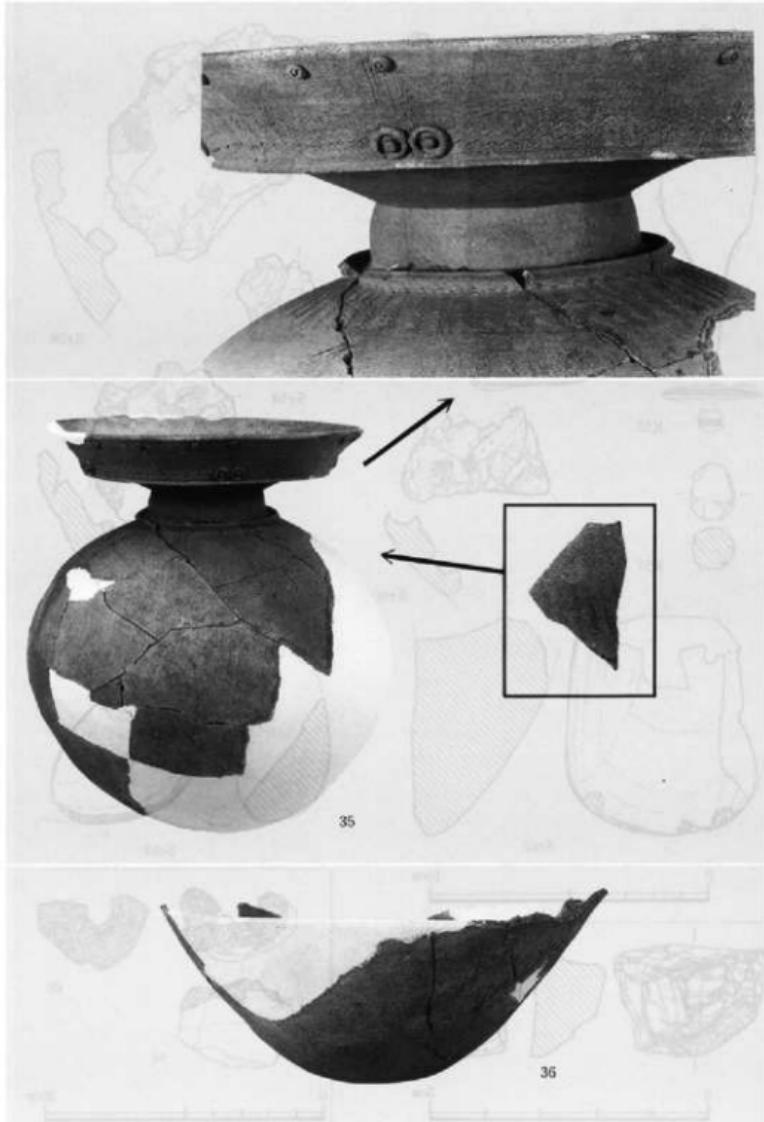


Fig.83 第48号竪穴式住居址出土二重口縁壺

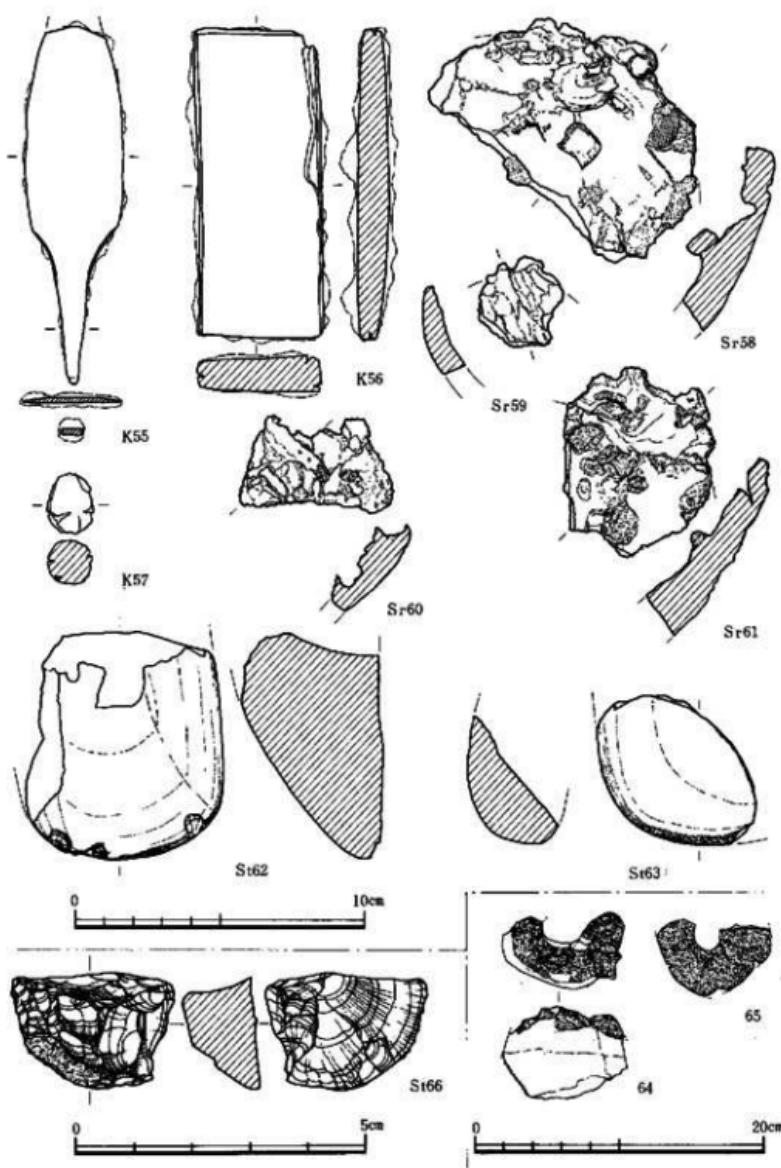


Fig.84 第48号竖穴式住居址出土遗物实测图

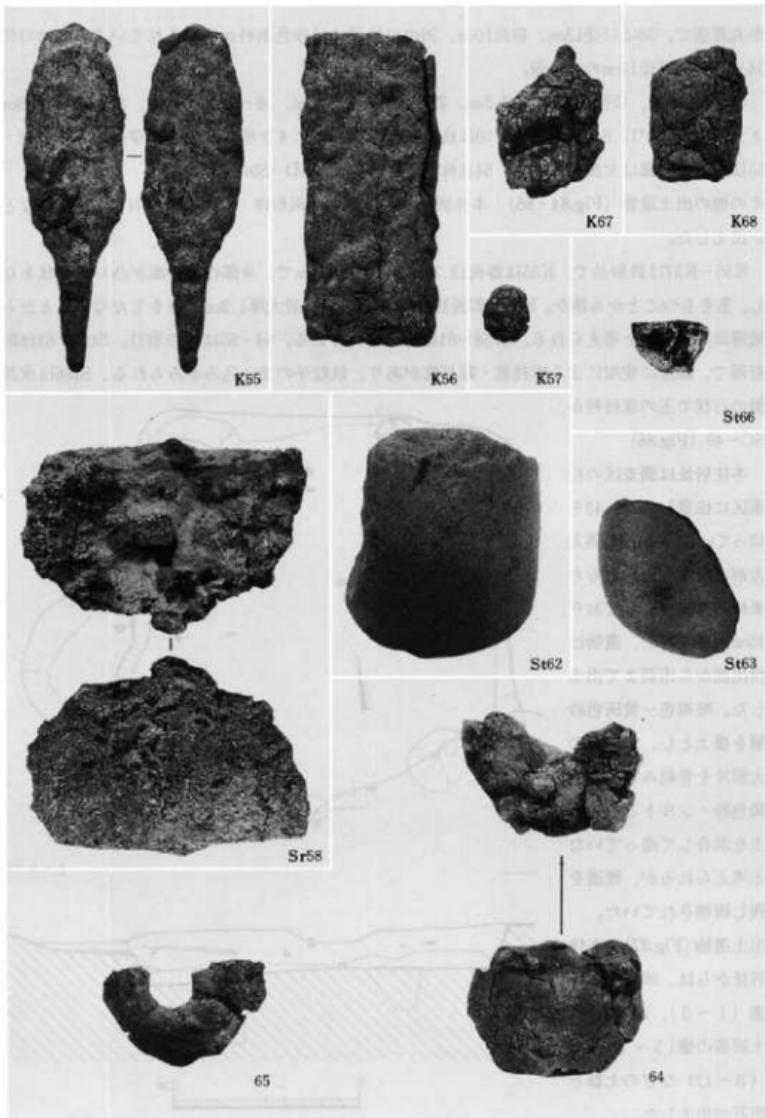


Fig.85 第48号竪穴式住居址出土遺物

形丸底壺で、38は口径12cm、器高10cm。39の口縁部には赤色顔料が塗布されている。43は口径24cm、42は口径14cmの直口壺。

44・45は壺で、口径は11cm、12.2cm。器高は3cm、3.7cm。46～51は高壺で、口径は46が23cmと大きく、48が13.6cmと小さい。50は底径11cmで、裾部に4ヶ所の焼成前の穿孔がある。52・53は脚台で壺部は欠損している。54は弥生時代の器台でSD-59に伴うか。

その他の出土遺物 (Fig.84・85)：本住居址からは鉄器・塊形津・石器・轆の羽口・玉素材などが出土した。

K55～K57は鉄製品で、K55は器長12.2cm、最大幅3.3cmで、身部の横断面が凸レンズ状をなし、茎をもつことから鎌か。K56は器長10.6cm、幅4.2cm、最大厚1.2cmで刃をもたないことから塊形の鉄素材と考えられる。Sr58～61は塊形津片である。64・65は轆の羽口。St62・63は敲打器で、縁辺に使用による摩耗痕・敲打痕があり、鉄粒子の食い込みがみられる。St66は水晶製の石核で玉の原材料か。

SC-49 (Fig.86)

本住居址は調査区の拡張区に位置し、SC-43を切っている。4m強の隅丸方形をなす平面形をもち、東縁辺に竈をもっており、40cm前後遺存し、遺物は検出面から床面まで出土した。暗褐色～黄灰色砂層を覆上とし、竈は瓶の大形片を骨組みとして、褐色砂・シルトと灰色粘土を混合して造っていたと考えられるが、煙道を残し破壊されていた。

出土遺物 (Fig.87)：本住居址からは、須恵器の壺蓋(1～3)、高壺(4)、土師器の甕(5～7)、瓶(8～12)などの土器と四石が出土した。

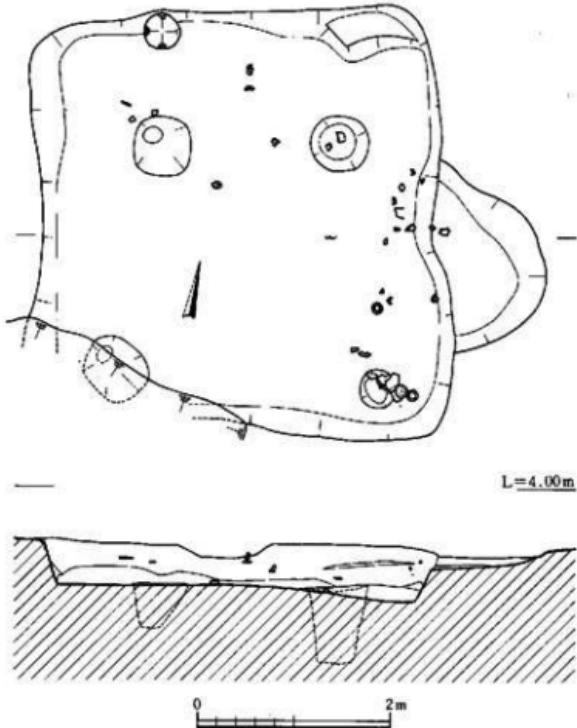


Fig.86 第49号竪穴式住居址 (SC-49) 実測図

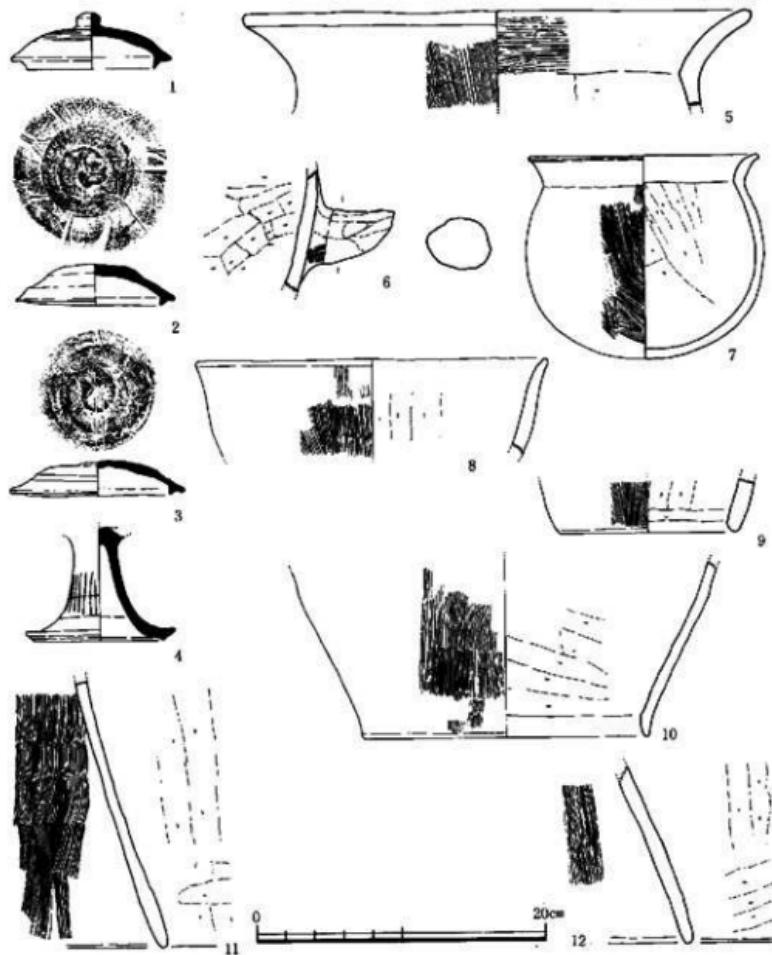


Fig. 87 第49号堅穴式住居址出土土器実測図

1～3は有返しで、1の天井部にはつまみ
があり、2・3の天井部にはヘラ記号がある。

受け部径は1・2が11cm、3が11.5～12cm。
4の脚部にもヘラ記号がある。5～7は甌で、
口径は5が35cm、7が16cm。7の器高は14cm。

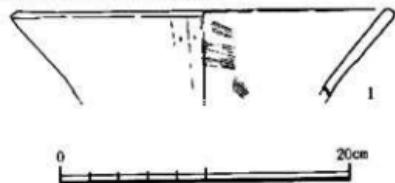


Fig. 88 第57号堅穴式住居址出土土器実測図

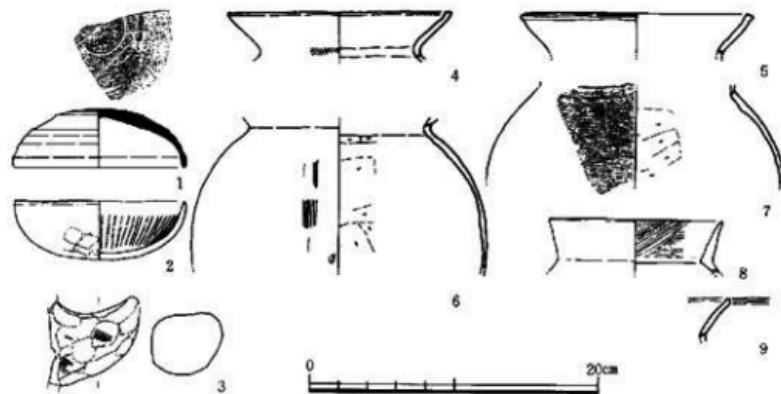


Fig.89 第54号竪穴式住居址出土土器実測図

8~12は竈の骨組みに使用されていた瓶である。

SC-54 (Fig.89)

本住居址は調査区の西北部に位置し、SC-56を切り、SK-34・39に切られている。平面形は隅丸方形を呈しているが、北西部は調査区外へ延び、東側は後世の造構に切られているため規模はわからない。20cm前後遺存している。

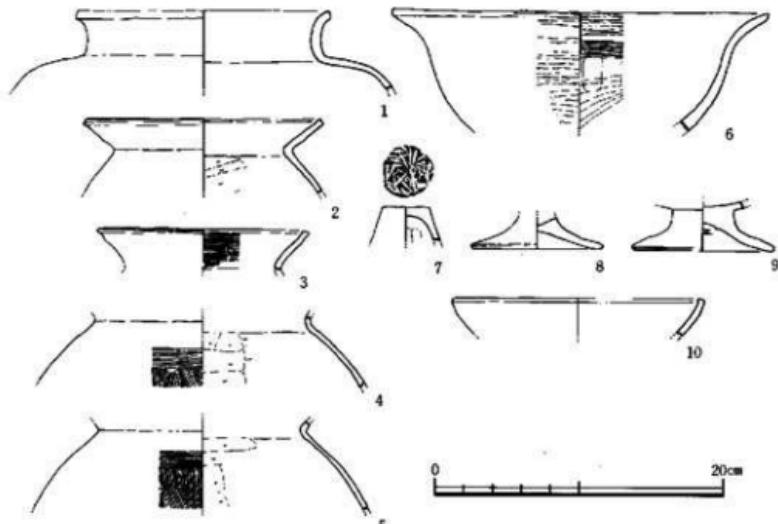


Fig.90 第58号竪穴式住居址出土土器実測図

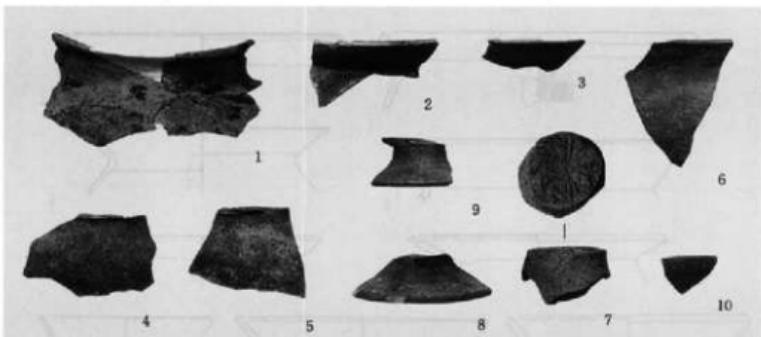


Fig.91 第58号竪穴式住居址出土土器

出土遺物：本住居址からは、須恵器の環蓋(1)、土師器の环(2)、甕(3～9)が出土した。

1は口径12cm、器高4cmで天井部にヘラ記号がある。2は口径10.6cm、器高4cmで、口縁部は横ナテ調整、内面はヘラミガキ、外面は指押え後ナテ調整で仕上げている。3は甕の把手。4～7・9の甕、8の小形丸底壺は前時期のもので混入品で、SC-56のものか。

SC-57 (Fig.88)

本住居址は調査区の西側に位置し、SC-48を切り、SC-45・52に切られている。 $2.8 \times 2.6 + \alpha m$ の隅丸長方形を呈し、20cm前後遺存している。

出土遺物 (Fig.88)：少量の土器と砥石1点がある。1は壺の口縁部で口径は27cmを測る。

SC-58

本住居址は調査区の中央部に位置し、SC-48、SD-59を切り、後世の遺構に切られている。一辺5m前後の隅丸方形を呈し、東辺の中央部に竈をもち、30cm前後遺存している。黄灰色～褐色砂・シルト・粘土を混合し、竈を造ったと考えられるが、破壊されている。主柱穴は4本で、床面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がっている。

出土遺物 (Fig.90・91)：本住居址からは、比較的まとまった土器が出土した。しかし、本住居址は竈をもち4本柱であること、SC-48を切っていることから、出土遺物はSC-48のものが大半を占めている。

1～5・10は甕で、1は韓式土器と考えられるが器面は荒れている。口径17.6cm。他の口径は3が14.6cm、2が18.4cm。6は口径26cmの鉢で、器面にはヘラミガキが施されている。7は高环、8・9は脚台である。

2) 第6面検出時出土遺物 (Fig.92～94)

第6面遺構検出時に、土師器の甕・壺・环・高环・瓶・移動式竈、須恵器の蓋類・环・高环・甕、輪羽口、鐵滓、土鍬、砥石、磨石、敲石などが出土した。第3～5面で出土したものであ

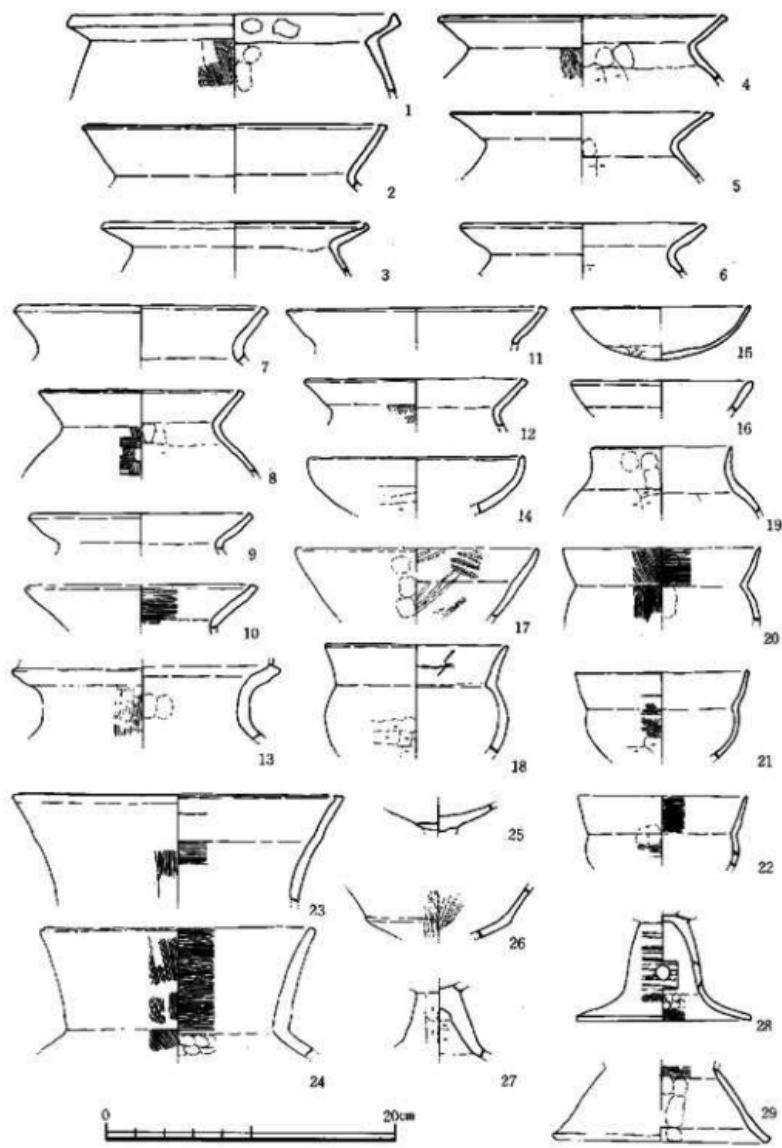


Fig.92 第6面出土土器実測図(1)

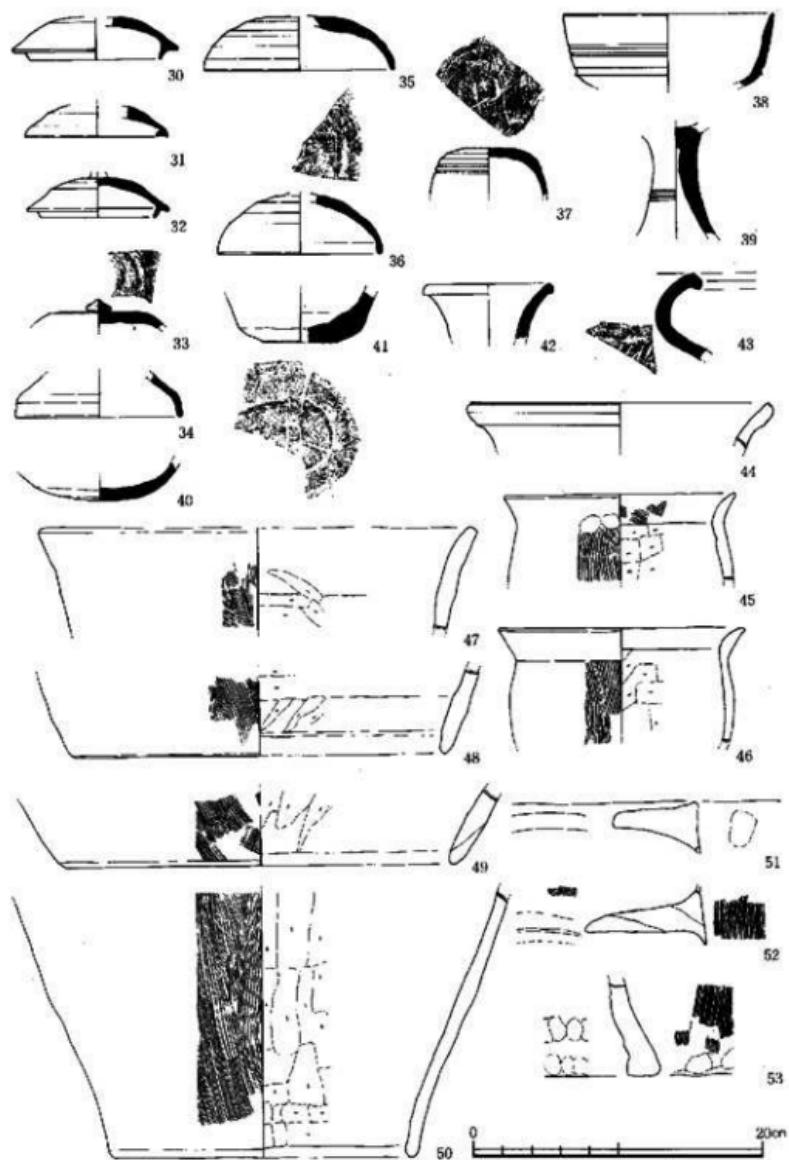


Fig.93 第6面出土土器実測図(2)

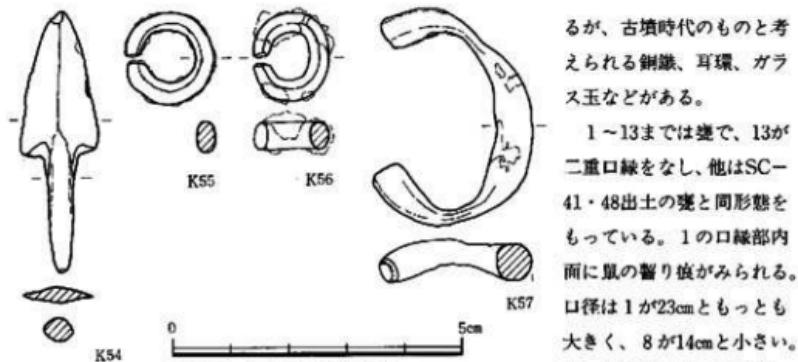


Fig. 94 出土金属器実測図

4cm、巻高3.6cm。17~24は壺で、19・23・24は直口壺で、19は口径9.5cm、23は口径23cm。17・18・20~22は小形丸底壺で、17・21・22は屈曲部括れが小さい。口径は17が17cm、22が11.6cm。25~28は高壺で、28の脚部には2ヶ所の焼成後の穿孔がある。29は脚台か。以上の1~29は古式土師器で、28を除くと布留式土器の古段階のものといえよう。

30~37は須恵器の蓋類で、30~33是有返しの壺蓋、34~36は壺蓋、37は壺蓋。33・36・37の天井部にはヘラ記号がある。38・39は高壺、42は横底か提瓶、43~46は壺で、43が須恵器、他は土師器。47~50は土師器の瓶、51~53は移動式竈片である。30~53の須恵器、土師器は6世紀末から7世紀のものである。

K54は器長4.5cmの銅鏃、K55~57は耳環で、K55・56は金誠金が施されている。

3) 第6面出土他時代遺物 (Fig. 95)

58・59はSC-48出土で60とともに壺である。61は壺である。St62・63は蛤刃右弁の刀部である。St62・63は弥生時代初頭以前のもので58・60・61は弥生土器である。59はSC-58のものか。

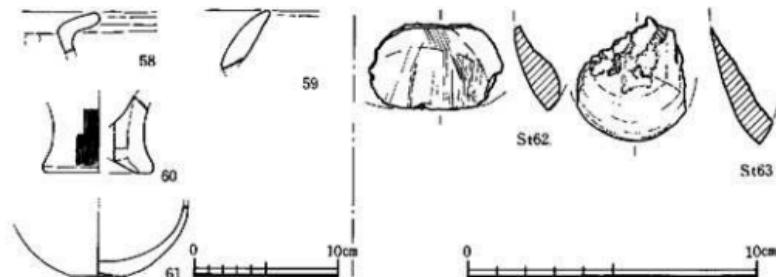


Fig. 95 第6面出土他時代遺物実測図

第4章 自然科学的分析

博多第59次調査ピット0018出土の無釉壺 内に付着した緑色ガラスの化学分析

名古屋大学名誉教授

山崎 一雄

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原調査部

肥塚 隆保

1. 形状 福岡市教育委員会より分析依頼を受けた無釉の壺は実測図のような形状をもち、破片が接合されている。外面は灰黒色で胴部から底部へかけて一部が黄白色の一見釉のようないくつかの物質で被われ、その下から緑色の物質がうかがわれる箇所もある。

壺の内面も外面と同様に灰黒色で、胴から底へかけて緑色のガラス状のもので被われ、あたかも壺が横倒しになった時に液体が溜ったかのような状況を呈している。緑色ガラス層の厚さは胴の上部で約1mm、底に近い厚いところでは5mmに達する。ガラスの表面は壺の外面と同様に黄白色を呈している。

2. 蛍光X線分析とX線回折 壺から遊離した緑色ガラスの小塊について、表面の黄白色の層を除去し、新鮮な表面を露出させた上で、蛍光X線分析を行ったところ、多量の鉛と珪素、銅などが検出された。すなわちこのガラスは鋼で着色された鉛ガラスである。

次にガラス表面の黄白色の物質についてX線回折法により物質の同定を行った結果、塩化(トリス(構成))五鉛、 $Pb_5C \& (PO_4)_3$ と判明した。蛍光X線分析およびX線回折法の実験条件などはここでは省略する。またこの黄白色の物質については蛍光X線分析法によつても構が検出されている。壺外面の黄白色と緑色は内面と同じものである。

この壺自身の灰黒色の胎土について、X線回折を行ったところ、石英とムライト($2SiO_2 \cdot 3Al_2O_3$)の存在が認められた。さらに胎土中にやや多量に含有されている白色粒子は同じくX線回折法により石英の結晶であると判定されたが、この石英はクリストバライトには変化していない。

3. ガラスの化学分析 2で説明したように緑色ガラスは鉛を多量に含有するが、蛍光X線分析法は半定量的であるため、このガラスの微量をとり、定量化学分析を行った。結果は次の通りである。

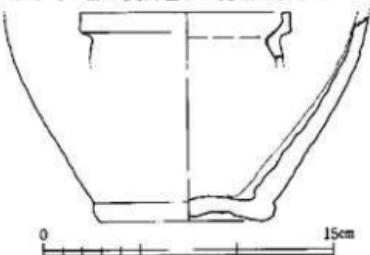


Fig. 96 0018柱穴遺物実測図

注(1) "Phase diagrams for ceramists" g. Am. Ceram. Soc., Nov. 1947, Part II, p.30, 1243.

二酸化珪素 (SiO_2)	30.5 %
酸化アルミニウム (Al_2O_3)	0.39
一酸化鉛 (PbO)	59.9
酸化銅 (CuO)	0.38
酸化ナトリウム (Na_2O)	0.14
酸化カリウム (K_2O)	8.37
合計	99.77%

これらの成分のはかに蛍光X線分析により、微量のチタン、鉄、カルシウム、マグネシウム、錫などの存在が認められたが、それらの定量は行わなかった。

4. 考察 このガラスの組成は3の分析結果から計算すると $\text{PbO} : \text{SiO}_2 = 1 : 2$ の分子比に近い。 $\text{PbO} - \text{SiO}_2$ の二成分系のガラスは詳しく研究されており⁽¹⁾、その状態図と対照すれば $\text{PbO} \cdot 2\text{SiO}_2$ の組成のガラスの融解点は約750°Cである。実際の緑色ガラスは前記分析値が示すようにカリウム、アルミニウム、銅などを含んでいるから、その融解温度はこれより低いと考えられる。しかし、その程度は不明であるから一応750°Cと仮定する。

他方、壺自体は胎土中にムライトが生成しているから、その生成しはじめる温度約1000°Cよりも高く加熱されている。しかし、胎土中の石英粒子がクリストバライドに変化していないから、後者の生成温度1200°Cまでは加熱されていない。すなわちこの壺は二つの温度の中間、1000~1200°Cで焼成されたものと推定される。

この壺の中に、別に製造された緑色の鉛ガラス（融解温度約750°C）を入れ、加熱、再融解し、流し出した時、壺が破碎したのであろう⁽²⁾。壺の破片の断面にガラスが付着していることは、破碎がガラスを流し出す途中で起ったことを示している。

破碎されたのち、この壺の破片は地中に埋設している間に、侵入を受け、表面が塩化（トリス（磷酸））五鉄に変化したと考えられる。従来の研究によれば⁽³⁾、鉛ガラスの表面が地中で塩の化合物に変化するのは動物、人間の遺体、排泄物などと接触していた場合であるから、この壺が埋設していた環境もそのような状況であったと考えられる。

博多第4次調査の同版編が「博多II—岡版編」、福岡市埋蔵文化財調査報告第84集として1982年3月末に刊行されたが、その中にFig.77として無釉盤口水注の図が掲載されている。この調査報告書の本文編は未刊のままであるが、この水注を調査した森本朝子氏によれば⁽⁴⁾、「暗褐色の胎土には白い砂が多く混じり、露胎は鉄錆色で、埴輪に用いたか内面に銀化した空色のガラスが付着し、器体は焼けて紫灰色となりガサガサしている」とのことである。この記載も、尖端図も今回の無釉壺に類似している。これ以外にも類似品の発掘例があることであり、それらの器のみならずガラスの調査を行なうことができれば、両者の产地についての知見が得られるものと期待される。

(2) この壺の中でガラスの材料を融解し、ろ過として使用したとは考え難い、そのためにはさらに高い耐火度の容器が必要であろう。
 (3) 山崎一雄、斎藤喜彦、「X線回折による弱熱された古代ガラスの研究」、Proc. Japan Acad., 36, 503 (1960) (英文)

(4) 森本朝子氏の御教示に対して謝意を表する。

土器表面に見られる砂礫

奥川 尚

1)はじめに

博多遠跡から出土した古墳時代初頭の壺、壺等の土器に含まれる砂礫の観察をした。観察資料は完形品もあるが、殆どは口縁部の破片のみである。最初に裸眼で土器片全体に見られる砂礫を観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分を観察した。

観察は石種・鉱物種・生物片の形、大きさ、量について行った。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃綠岩、斑頗岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩・泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、菱輝綠岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石、磁鐵鉱、生物片として海綿の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物等があげられる。また、火山岩起源と深成岩起源とを区別するために、鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に、石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径についてはmm単位で目測した。量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階とした。

岩石片の同定については、鉱物構成で名称が変わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英・長石、石英・長石、黒雲母・長石・黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃綠岩、輝石や橄欖石が噛み合っていれば斑頗岩とした。また、自形の石英がみられれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石が見られれば安山岩とした。片理があれば、片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

2)砂礫の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃綠岩、流紋岩、安山岩、泥岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。それぞれの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、灰色、粒形が角、亜角、粒径が最大5mmである。石英と長石が噛み合っている。

閃綠岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大1mmである。長石と角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は白色、灰白色、灰色、暗灰色、茶色、赤色とさまざままで、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大2mmである。石英や黒雲母の斑晶がみられるものもあり、石基はガラス質である。

安山岩：色は灰色、粒形が角、粒径が最大0.5mmである。ガラス質で輝石の斑晶がみられる。

泥岩：色は灰色、粒形が亜円、粒径が最大0.2mmである。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7mmである。貝殻状、フジツボ状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大5mmである。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。

長石：無色透明、灰色透明、灰白色で、粒形が角、粒径が最大4mmである。短柱状で自形をなすものもある。

黒雲母：黒色、金色の金属光沢があり、粒径が最大1mmである。板状、粒状をなす。

角閃石：黒色、粒形が角、粒径が最大1mmである。粒状、柱状をなす。柱状で自形をなすもの、あるいは一部に結晶面がみられるものがある。

輝石：青銅色透明、褐色透明、黒色透明で、粒形が角、粒径が最大0.2mmである。柱状で自形をなすものが多い。

3) 砂礫種構成

観察した砂礫種構成は、花崗岩と他形の石英・長石からなる花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループと流紋岩質岩と自形の石英からなる流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループがある。これらの砂礫種構成と他の砂礫種を組み合わせて、類型区分をした。砂礫が少量の場合、細粒の場合、表面に付着物が多く観察が不良の場合は類型区分不能とした。

I 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる I a 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I b 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I bd 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I d 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I de 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I e 類型

IV 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる IVae 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる IVb 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される

表. 1 土器表面に見られる砂礫種(1)

(※印は、断面分析資料番号)

資料番号	分類名	岩 石										云 物					神 区
		花崗岩	閃綠岩	沈灰岩	安山岩	砂岩	泥岩	片 岩	火成岩	石英	長 石	雲母	角閃石	黑 石	上 面		
1	風 化 物	L-1 角 片							M-1 E1 B1	L-1 E1 B1						Td	
2	風 化 物		L-1 E1 B1						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1				Se	
3	風 化 物	L-1 E1 B1 A1 角							M-1 E1 B1	M-1 E1 B1		S1 E1 B1				Td	
4	風 化 物			M-1 E1 B1 A1 角					M-1 E1 B1	L-1 E1 B1				L-1 E1 B1		We	
5	風 化 物		M-1 E1 B1 A1 角					M-1 E1 B1	L-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1					We	
6	風 化 物			L-1 E1 B1 角				L-1 E1 B1	L-1 E1 B1				S1 E1 B1		We		
7	風 化 物	30mm 角						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tb	
8	風 化 物		L-1 E1 B1 角					M-1 E1 B1	M-1 E1 B1		S1 E1 B1					We	
9	風 化 物		L-1 E1 B1 A1 角					L-1 E1 B1	L-1 E1 B1		S1 E1 B1					We	
10	風 化 物		M-1 E1 B1 A1 角					L-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1				S1 E1 B1		We	
11	風 化 物		L-1 E1 B1 A1 角					M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1					We	
12	風 化 物	L-1 E1 B1 角						L-1 E1 B1	L-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tb	
13	風 化 物		L-1 E1 B1 角					M-1 E1 B1	L-1 E1 B1	S1 E1 B1	M-1 E1 B1					We	
14	風 化 物		M-1 E1 B1 角					L-1 E1 B1	M-1 E1 B1		S1 E1 B1					We	
15	風 化 物	L-1 E1 B1 角						L-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tbd	
16	風 化 物	L-1 E1 B1 角						L-1 E1 B1	M-1 E1 B1		M-1 E1 B1					Tbd	
17	風 化 物		L-1 E1 B1 角					K-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1			S1 E1 B1		We	
18	風 化 物		L-1 E1 B1 角					L-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	L-1 E1 B1					We	
19	風 化 物	L-1 E1 B1 角						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1					Tb	
20	風 化 物	L-1 E1 B1 角						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tbd	
21	風 化 物	L-1 E1 B1 角						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tbd	
22	風 化 物	L-1 E1 B1 角						M-1 E1 B1	M-1 E1 B1	S1 E1 B1	S1 E1 B1					Tbd	
23	風 化 物	L-1 E1 B1 角						L-1 E1 B1	M-1 E1 B1							Tbd	
24	風 化 物							L-1 E1 B1	M-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
25	風 化 物	L-1 E1 B1 角						L-1 E1 B1	L-1 E1 B1							Tbd	
26	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
27	風 化 物	L-1 E1 B1 角							L-1 E1 B1	L-1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
28	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
29	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
30	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
31	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
32	風 化 物								S1 E1 B1	S1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
33	風 化 物								M-1 E1 B1	M-1 E1 B1						南北少 量区分不 明	
34	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
35	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
36	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
37	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
38	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
39	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
40	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
41	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
42	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
43	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
44	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
45	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
46	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
47	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
48	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
49	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
50	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
51	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
52	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
53	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
54	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
55	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
56	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
57	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
58	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
59	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
60	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
61	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
62	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
63	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
64	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
65	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
66	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
67	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
68	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
69	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
70	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
71	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
72	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
73	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
74	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
75	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
76	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
77	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
78	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
79	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
80	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
81	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
82	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
83	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
84	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
85	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
86	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
87	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
88	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
89	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
90	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
91	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
92	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
93	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
94	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
95	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
96	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
97	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
98	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
99	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
100	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
101	風 化 物								L-1 E1 B1							南北少 量区分不 明	
102	風 化 物								L-								

表. 1 土器表面に見られる砂礫種(2)

(颗粒度、粉土分层系数)

元朝

表. 1 土器表面に見られる砂礫種(3)

(※印は、出土分析番号)

資料番号	部類	石										紅物									地図	
		花崗岩	閃綠岩	流紋岩	安山岩	碧玉	青石	瓦	砂	火成	火成	火成	火成	火成	火成	火成	火成	火成	火成	火成		
31	土 有機物	L-盛 内		M- 瓦						L-5 E5	M- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	i	N		Ibd					
32	土 有機物	L-盛 内								L-5 E5	L-4 E4	S- 瓦	S- 瓦								Ide	
33	土 有機物		L-盛 内							M-5 E5	L-5 E5										Ibe	
34	土			M- 瓦					M-5 E5	L-5 E5	M-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		We	
35	土 二重土器	L-盛 内							S- 瓦	L-5 E5			S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		Ibd	
36		L-盛 内		M- 瓦					L-5 E5	L-5 E5			S- 瓦	S- 瓦							Ibd	
37	土 小形瓦	M- 瓦	内							S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1b	
38	土 小形瓦									S- 瓦	S- 瓦			S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
39	土 有機物			M- 瓦					M-5 E5	M-5 E5											We	
40	土			L-盛 内					M-5 E5	L-5 E5											We	
S	E 壁?			S- 瓦					S- 瓦	K-5 E5	M-5 E5											
C	土											S- 瓦	M-5 E5									1e
C	土 缺口	L-盛 内							M-5 E5	L-5 E5	M-5 E5		S- 瓦	S- 瓦							Ibd	
41	土											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
42	土											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
43	土											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
44	土 瓦	L-盛 内										S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1e	
45	土 瓦											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		Ibd	
46	土 瓦	L-盛 内										S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
47	土 瓦											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		Ibd	
48	土 瓦	L-盛 内										S- 瓦	L-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1b	
49	土 瓦											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
50	土 瓦	L-盛 内										S- 瓦	L-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		Ibd	
51	土 瓦											S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		少量少 区分不規	
52	土 瓦	S- 瓦										S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		Ibd	
53	土 瓦	M-5 E5										S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1bd	
54	?	M-5 E5										S- 瓦	M-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1bd	
55	?	L-5 E5										S- 瓦	L-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1a	
56	?	L-5 E5										S- 瓦	L-5 E5	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		1d	
S	I 鉢式瓦	L-5 E5										L-5 E5	L-5 E5								1a	
C	土 瓦											L-5 E5	L-5 E5	K-5 E5							Ibd	
1	?	L-5 E5										S- 瓦	L-5 E5	L-5 E5								
58	?	L-5 E5										S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦	S- 瓦		No	

推測=推認観察 視認による観察 L=粒径 2mm以上 M=粒径 2mm未満 0.5mm以上 S=粒径 0.5mm未満 非=量が非常に多い 多量が多い 中=量が中程度 強=量がごく多く 微=量がごく僅か 粒=粒径がごく僅か 30倍=実体積の倍率が30倍 実体積による観察: L=粒径 1mm以上 M=1mm未満 0.5mm以上 S=粒径 0.5mm未満 豊=量が非常に多い 貧=量が非常に少ない 稀=量が少く以下の程度がある E=自形 EF=幼品面がある W=白雲母が含まれる 板=板状 貝=貝殻状 東=東状 フ=フジツガ状 国=報告書等の出版

Fig. A2

Fig. B2

- 砂礫が僅かに含まれる IVbe類型
 流紋岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる IVd類型
 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる IVe類型

以上のように類型区分をすれば、表2・3に示すように I bd類型と IVe類型に集中が見られる。

4) 砂礫の採取地

博多を中心として東を船屋郡、西を糸島郡とした範囲の河川の砂礫種を調査した。現在の河川であるために、護岸工事等により、人為的に移動した砂礫種もごく僅かにあると考えられるが、自然に流出した砂礫が主を占めていると考えられる。河川砂礫の傾向をみれば、前原町の河川では比較的角閃石が多く含まれ、閃緑岩質の岩石片が見られる。早良平野や博多付近では

表. 2 器種と類型 (博多遺跡第59次SC-41、SC-58: カッコ内)

類型	器種						輪式車	合計
	布留横行	布留	板合口縫	小形丸底	直口	壺?		
I	a				1		(1)	2 (1)
	b	2		1				3
	bd	3		1		1		5
	d	(1)						(1)
IV	d	1						1
	e	13	(1)					14 (1)
不能				6				6
合計	20 (1)	(1)	2	6	1	1	(1)	32 (3)

表. 3 器種と類型 (博多遺跡第59次 SC-48)

類型	器種			壺			輪台	合計
	布留横行	布留	壺	小形丸底	直口	壺?		
I	a		2					2
	b	2			1			4
	bd	9		3		1		16
	d			1		2		1
	de	3						3
IV	e				1	1		2
	ae		1					1
	b	1						1
	be	1						1
	d	2	1					3
e	9		1			1		11
	不	1		2	1		2	1
	合計	28	1	10	2	2	1	54

角閃石が比較的少なくなり、片岩がごく僅かに含まれる場合や花崗岩質岩起源の砂礫のみとなる場合がある。福岡市東方の粕屋郡付近になれば、泥岩・砂岩や片岩が多くなる。

河川砂礫の傾向から、博多遺跡から出土した上器に含まれる I a 類型 (SC-58 の No.1 を除く)、I b 類型、I bd 類型、I d 類型の砂礫は博多遺跡近くで採取できる砂礫である。また、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする IV 類型の砂礫は博多付近では採取出来ない砂礫である。IVd 類型、IVe 類型の砂礫は、流紋岩質岩や安山岩質岩が分布する加賀南部の砂礫構成に酷似する。IVae 類型、IVb 類型、IVbe 類型の砂礫は山陰、北陸、播磨のいずれかの砂礫であると推定される。I de 類型、I e 類型の砂礫は花崗岩の分布地域の砂礫であるが、場所は限定できない。

また、博多59大SC-58の1の資料は、器形的に韓式系土器である。含まれる砂礫種は花崗岩質岩起源と推定される砂礫種のみである。石英や花崗岩、長石片においてもくすんだ色を呈し、他の資料の砂礫とは感覚的に異なる。韓式系とされている多くの資料に見られる砂礫である。

表. 4 博多周辺の河川の砂礫種

裸眼：散聚散開 眼鏡による散開：L=粒径 2mm以上 M=粒径 2mm未満 0.5mm以上 S=粒径 0.5mm未満 非=量が非常に多い 多=量が多い 中=量の中 僅=量が僅か 僅=量がごく僅か 等=量がごくごく僅か 30倍=実体鏡の倍率が30倍 実体鏡による散開：L=粒径 1mm以上 M=1mm未満 0.5mm以上 S=粒径 0.5mm未満 非=量は視覚に同一 →以下の粒径がある E=白形 EF=結晶面がある W=白雲母が含まれる 粒=板状 貨=块状 東=東方 フジ=フジボウ 団=聯合巣等の團塊

同じ花崗岩質岩起源と推定される砂礫であるが、博多付近の砂礫とは異なる。

5) おわりに

主として布留傾向甕・布留甕に的を絞って観察したのであるが、砂礫の採取地が上器の制作地であるとするならば、布留傾向甕は出土した博多遺跡付近でも制作していたものもあり、加賀南部付近から運ばれてきたものもある。運ばれてきた甕と同じ形の甕を遺跡で制作していることは、加賀地方から何らかの目的で、博多付近まで加賀地方の人が来て、甕が足りなくなり、博多付近の砂礫を使用して甕を制作したとも考えられる。

各地から出土する布留傾向甕の砂礫種構成をみれば、博多遺跡と同じようなことがいえる。

河内平野では八尾市中田遺跡、久宝寺遺跡等を中心に布留傾向甕が比率的に多く出土する。これらの甕に含まれる砂礫種構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を含むものと、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を含むものとに区分され、前者は大和川が流してきた砂礫種構成に酷似し、後者は加賀南部の砂礫種構成に酷似する。奈良盆地東南部の難向遺跡を中心とした範囲に出土する布留傾向甕においても、河内平野出土の布留傾向甕と同じ様相を示す。

吉備や播磨、東海における布留傾向甕の胎土の特徴を把握していないが、少なくとも、布留傾向甕が制作された時期に、加賀南部では、何らかの目的をもった人が博多付近や河内・大和に行っていたといえる。

博多遺跡第59次調査出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子

宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

第41・48号住居跡出土の甕、丸底壺・小形丸底壺および石器に付着している赤色顔料について、その種類と状態を明らかにするために顕微鏡観察とX線分析を行った。赤色顔料の分析結果とそれにより推定される赤色顔料の種類を表に示した。X線分析の条件およびそれに基づく赤色顔料の推定の根拠については第329集に記した。

表 赤色顔料の分析結果

No.	試料	顕微鏡観察	蛍光X線分析	X線回折	赤色顔料の種類	写真
1	SC-41出土 小形丸底壺	朱?	水銀・鉄	辰砂	朱	Fig.68-30
2	SC-41出土 小形丸底壺	朱?	水銀・鉄	辰砂	朱	-
3	SC-48出土 甕	未	水銀・鉄	*	朱	Fig.82-16
4	5面出土 磨石	ベンガラ	鉄	*	ベンガラ	Fig.97
5	SC-48出土 鋸刃器	?	鉄	?	?	Fig.84-86

*は試料の状態により未測定

試料

No.1～3 土器の内面に薄く残っているのだが、赤色顔料粒子が単に付着していたり塗られているという状態ではなく、なんらかの方法で磨り込まれたように密着して見える（No.3は残りが悪く、わずかに凹部にからうとして付着している）。土器の外面には厚くススが付着している。X線分析では土器破片をそのまま測定した。検鏡用には針先に着く程度を採取し、プレバラートを作成した。

No.4、5 No.4は石器の一部にわずかの赤色顔料が残ってるが、No.5は一部暗褐色ではあるが顕著な赤色顔料は認められない。実体顕微鏡下20倍で石材凹部に残っている赤色物を針により採取した。X線分析では石器をそのまま測定した。

赤色顔料の同定

顕微鏡による観察では、No.1、2は朱？と思われたが赤色顔料の粒子が非常に細かく、はっきりと判断できなかった。No.3には顕著なやや大きな朱粒子を認め、ベンガラは認められなかった。No.4はわずかではあるがベンガラ粒子を認めたが、No.5には顕著な赤色顔料の粒子を認めることができなかった。No.1、2は検鏡で朱？であったが、蛍光X線分析で鉄と水銀が検出され、鉛が検出されなかったこと、X線回折で辰砂（Cinnabar）が同定されたことから内面に付着している赤色顔料は朱である。No.3は蛍光X線分析で水銀と鉄が検出され、X線回折は試料の量が少なく測定できなかったが、検鏡で朱粒子が認められ、ベンガラはなかったことから、赤色顔料としては朱として判断した。No.4は、検鏡でベンガラが認められ、蛍光X線分析で鉄だけ

が検出されているので、一部に付着している赤色顔料はベンガラである。No.5は、蛍光X線分析では赤色の由来となる主成分元素として鉄が検出されたが、検鏡によりベンガラが認められないこと、X線回折で赤鉄鉱（Hematite）が同定されないことから、暗赤色に見える部分は赤色顔料によるものではないと判断した。

内面に赤色顔料が付着している土器について

今回の土器資料の3点は内面に朱が付着残存していた。赤色顔料の残存状態の悪いNo.3は別として、No.1、2は赤色顔料の付着状態が共通している。これは、博多遺跡第50次調査（第249集）、同第65次調査（第329集）で出土している同じように内面に朱が残存した土器のそれともほぼ共通した状態である。赤色顔料が単に付着しているのではない。つまり赤色顔料が土器内に貯蔵されていたために付着残存しているのではない。かといって土器の内面に装飾を目的として単に塗られた状態とも考えにくい。朱は土器器面にすり込まれ、みがかれたかのように少なからず浸透し、器面に密着している。そして土器外面は厚くススが付着している。

この種の土器は弥生時代後半以降に北部九州地方で多く出土している。弥生時代の出土例の多くは破片であるが、野方中原遺跡（第348集）、博多第50次出土の例は片口が付く。片口が必要であるということは、内容物が液状であることを想定させる。今回のNo.2は外面からも水銀が検出されているので、内から外に染み出していったとも考えられる。この種の土器は畿内地方でも数例出土しているが、纏向遺跡でも内面に朱が付いている土器は必ず外面にススが付着している。

以上の事実を総合すると、この種の土器はなんらかの目的のために「朱を液状にして火にかけるために使われた」としか考えられない。そもそも朱を水銀により精製するために水でといったのではなく、火にかければ少なからず水銀蒸気となる朱を熱しているのであるから、単なる赤色顔料の製造をしているわけではない。また、この種の土器に付着している朱の粒度は本例も含めて非常に細かいが、この時期の墳墓から出土する朱の粒度はこのように細かくないので、葬送のために使われた朱とは違うかも知れない。「仙薬」の製造にかかわる土器かとも思われるが類例に期待したい。

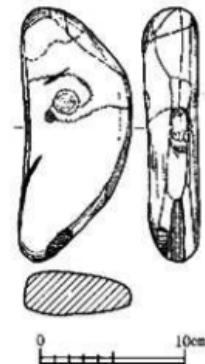


Fig.97 第5面出土磨石実測図

第5章 結章

博多祇園町に位置する第59次調査地点は、近世以降の擾乱があるため、276m²と狭い面積の調査を実施した。しかし、標高4.35~3.1mまで7面に分けて調査を実施し、少なくとも4枚の遺構が伴う文化層を検出し、多大な成果を得た。ここで各文化層について成果をまとめていくことにする。

1. 第1文化層

第1文化層は、第1~3面として調査を実施した面となる。この文化層では、井戸7基（第4面として調査したSE-36・60を含む）と土壙16基、柱穴539個を検出した。遺構の分布状態でみていくと、井戸は調査区の中央部を南北に斜めに横切る形で分布し、北からSE-36・60、SE-04・17・25・26、SE-05と3つの切り合いグループとなっている。土壙は井戸に接した形で分布し、柱穴は柱痕跡があるもの、根締め石があるものがあるが、建物としてまとめることができなかった。

第1文化層出土の遺物としては、糸切り底の小皿・壺などの上師器、竈泉窯の青磁小皿・碗、白磁、陶器などと石鍋、硯、サイコロなどが各遺構から出土している。SE-04・05など新しい時期のものもあるが、ほとんどは12世紀前半から後半のものであり、第1~3面の遺構は同時期のものといえよう。

2. 第2文化層

本文化層は第4面に相当し、土壙7基と柱穴101個の遺構がある。第4面の土壙は調査区の中央部に分布し、土壙に接した形で柱穴も分布するが、建物としてまとめることはできなかった。SK-34・37・39はいずれも4本柱を主柱とする屋構造をもち、倉庫的な用途をもっていたと考えられる。

第4面出土の遺構としては、板状压旗をもちヘラ切りの土師器皿、瓦器、白磁碗などがある。SK-34・37・39は1m前後の遺存をもっていること、柱穴も建物としてはまとめてはいないが、3×2間のコーナーがつかめること、各遺構の遺物の時期が一定していることなどから第4面は11世紀末~12世紀前半の生活面であるといえよう。

3. 第3文化層

第3文化層は第5面に対応し、第5面での遺構は検出できなかった。出土遺物としては、須恵器の壺蓋・壺・高壺・皿・甕、土師器の蓋・壺・高壺・皿・甕・瓶・移動式竈と製塩土器、焼塩土器、韓式土器などの土器と「和銅開珎」1点、刀子・釘などの鉄製品、金銅製の飾金具、轆羽口、鉄滓、瓦類、土錐、砥石、磨石、敲石などがある。

出土須恵器・土師器は90%以上が7世紀前半~8世紀前半のもので、2%前後8世紀後半~9世紀前半の遺物があるが、11世紀後半~12世紀前半の土器とともに第2文化層のものと考えら

れる。したがって本文化層は、8世紀前半のものといえよう。

4. 第4文化層

本文化層は第6面に対応し、検出遺構としては13基の住居址と土壙・溝・柱穴がある。検出住居址は竈を施設としてもつものと、もたないものがある。ここでは竈をもつ住居址群からみていくことにする。竈をもつ住居址はSC-45・49・58であるが、これらの住居址の構造からみていく。平面形は隅丸方形を呈すること。主柱穴は4本。一辺のはば中央に砂・シルト・粘土を混合し、角礫や瓶など大形土器の大形の破片を骨組みとして竈を造っていること。古墳時代後半期の遺物があることなどが共通している。これらの条件の2つ以上を満たしている住居址として、SC-43・52・54がある。切り合い関係、出土土器からみていくと、6基の住居址群は6世紀末～7世紀初頭のものと、7世紀前半のものに分けられる。前者はSC-43・52・54・58と大形で、後者はSC-45・49と小さくなっている。

SC-41・42・44・48・53・56・57はいずれも古式土師器が出土しており、古墳時代前半期のものである。住居址の構造は平面形は隅丸方形であるが、主柱穴はSC-41が4本、SC-48は2本である。SC-41はベットをもっている。出土土器と切り合い関係でみていくと、SC-44が布留式土器の最古段階でもっとも古く、SC-41・48が続く時期で、SC-57が5世紀前半のものである。古式土師器期のなかでも時期的隔絶がある。

SC-41・44・48からは、鐵器・鐵素材・切断鐵片・塊形滓・鐵滓・輪羽口・鍛造鐵片・敲打器など鐵器製作に関係する遺物がまとまって出土した。古墳時代初期に本調査地を中心とした地区で鐵器製作を行なっていたといえよう。なお、SC-41・48では碧玉・水晶の剥片・石核が出土しており、玉製作も行なっている。

古式土師器は、肉眼的観察および器形胎土分析から在地的なものが少なく、他地域の影響を受けたものと移入土器が多い。中国地方から北陸までの影響を受けた土器群といえ、海に面した博多遺跡群ならではのことといえよう。



博多第59次調査地にて（右 故牛田裕二君）

〔編集後記－牛田裕二君へ－〕

貴君が福岡市の遺跡調査に従事したのは、1985年の丸岡山古墳からだと思います。私が貴君と会ったのは同年の堤ヶ浦古墳群の調査からで、井尻B・片江B・鄭河（第10～17・21次）、高畠・博多（第37・59・64次）遺跡、老司古墳など、福岡大学在学時から同大学を卒業して佐賀市教育委員会に奉職する1990年9月まで共に調査を行ないました。特に1989年以降は、調査補助員として私の良きパートナーとなり、調査・整理・報告書作成までよく頑張ってくれました。感謝しています。

貴君をパートナーとして、調査を実施した博多遺跡群第59次調査の報告書を発行する運びとなりました。貴君の現場での実測図・写真が適格で、整理作業も調査同様に順調に進めることができました。

貴君にとっては満足できる内容となっていないかもしれません、貴君のご両親、貴君の良妻に献呈いたします。

牛田裕二君 略歴	
1965年2月12日	誕生
1983年4月	福岡大学に入学 理系研究会に入会
1985年	丸岡山古墳調査に見事
1987年3月	福岡大学卒業
1989年4月	福岡市教育委員会に
	歴史文化財部の調査基
	員となる
1990年3月	佐賀市教育委員会に
	奉職
1991年	田中和加子と結婚
1992年7月10日	永眠

博 多 36

－博多遺跡群第59次調査報告－

1993年（平成5年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印 刷 寿印刷株式会社
福岡市西区小戸四丁目5番42号